

飽海郡誌 卷三

160
10
130

160-130



1200901383923

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak

飽海郡誌卷之三

日 郊 寄 贈 本

目 次

第七編 市 街

第一章 酒田町上

酒田氏 組分卜戸口 町役人 町政卜經濟

大正 12. 6. 2 寄贈

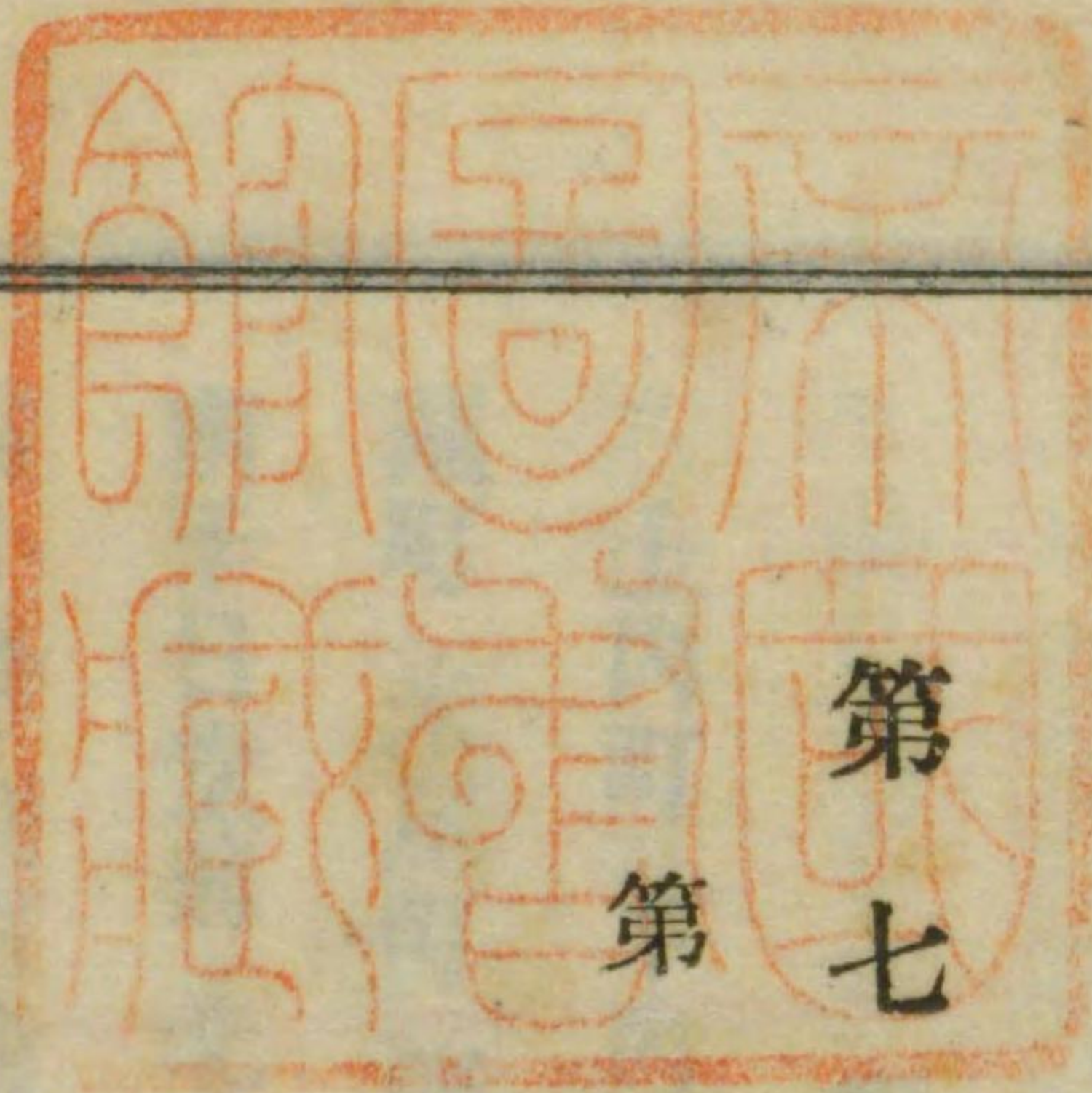
内町 成就院門址 町奉行所址 齋藤氏 佐竹氏

須田氏 淡路小路 齋藤氏 片町給人町 上藏卜

新井田藏 中之口町 新町 山王堂町 松原地址

一之口川端 本米屋町 米屋町 八軒町 池田氏

檜物町 濱町 荒瀬町 野附氏 天正寺町 天正



寺 伊藤氏 近江町 日枝神社 筑後町 堀切 新
片町 新地 濱畑 伊東氏 林昌寺 瑞相寺 本町
飽海郡役所 本間氏 二木氏 鑑谷氏 西野氏
上林氏 粕谷氏 越後屋九兵衛 卜鈴木伊右衛門
伊藤鳳山 十全堂

飽海郡誌 卷之三

第七編 市街

第一章 酒田町 上

上内町 下内町 細肴町 片町 中之口町 山王堂町 給人町 元米屋町 八軒町 荒
瀨町 米屋町 濱町 檜物町 天正寺町 近江町 筑後町 新片町 鷹町 外野町 濱畑町
南千日堂前 北千日堂前 本町七丁 肴町 上袋小路 稻荷小路 山椒小路 中袋小路
實小路 利右衛門小路 下袋小路 染屋小路 鍛冶町 上中町 下中町 十王堂町 大工
町 桶屋町 上内匠町 下内匠町 寺町 秋田町 傳馬町 今町 上臺町 下臺町 櫻小路
出町 上荒町 下荒町 上小路 下小路 船場町 新町等ノ町字ヲ有ス東西十二町廿三
間南三十一町五間街路井然局面ノ如ク公衙學校會社及ヒ大小ノ社寺其間ニ點在シ
家屋櫛比肆店相望ミ殊ニ酒田湊最上川ニ相接シ水陸ノ利便ヲ占ムルヲ以テ街頭頗

ル殷賑ニシテ縣下四都會ノ其一ニ居レリ

民居ノ創始文献ノ徵スヘキナシ古へ最上川ノ南北ニ各人家アリテ當酒田ハ所謂東禪寺分地方ニ居ヲ占メ向酒田ハ袖浦飯盛山附近ニアリ稍々繁華ノ處タリシモノ、如シ而シテ酒田ノ地形ニ關係スル最上川ノ變遷ハ古來一ナラス爲メニ異狀ヲ呈セシコト幾回ナルヲ知ラス試ミニ近古ノ形勢ヲ示サンニ明曆ノ頃最上川ハ鶴渡川原青原寺裏近ク酒田城大手前ヨリ酒田本町川岸ニ沿ヒ今ノ船場町ハ悉ク其流底ナリシヲコ、ニ挿入ノ地圖及ヒ明曆酒田町圖參照スヘシ 寬文中廣野谷地ニ新川ヲ開鑿シ流勢ヲ南ニ導キシヨリ酒田町川岸ニ起上地ヲ生シ漸次船場町ノ地形ヲ作レリ僅々二百餘年來ノ變遷ニシテ尙且然リ況シテ數百年以前ノ形勢ニ於テオヤ今ヲ以テ古ヘヲ推スハ固ヨリ臆説タルヲ免レ難シト雖モ要スルニ最上川ノ兩岸ハ河身ノ推移ニ依リ或ハ川成ト變シ或ハ起上ト化シ幾變化ヲ閱シ以テ今日ノ地形ヲ成セルモノニシテ砂瀉^{カガ}「スナ」ノ名稱蓋之ニ起因スルナリ

(夢宅年代記) 寶永五年酒田大湊俄ニおい上り水一滴も流れず砂地をかよひしが

十五六日後宮浦近所破れ元の湊ニ成る

(反故籠) 寶永五年七月大荒レ酒田古湊一夜に埋二百間上ニ新湊に成古湊ニ着岸之入舟引出兼惣郡中より大庄屋御人足引連酒田へ相詰砂堀埋セ候處出來兼大船二三艘出帆成兼候處翌三月雪代水ニ而新湊へ出し候 (筆の余) 最上川向寬永後迄新堀村下より鶴渡川原ニ突當青原寺裏大手前酒田裏ヲ西ニ流レテ宮之浦軒下ニ銚子有シヲ寬文中高力忠兵衛御郡代ノ折新井堀下ヨリ飯盛山下の新川ヲ立テ今ノ川向ニセシナリ左レハ享保頃迄も専ラ宮ノ浦ニモ海船着テ運送ヲモ扱シトテ當村今ニ間屋株二三軒殘レリ

年代不詳酒田ノ住民河身ノ變遷其他ノ原因ヨリシテ移轉ノ必要起リ漸次當地方

ニ移住シ終ニ一市街ヲ成セリ是レ實ニ酒田町組ノ始メナリ

(酒田山王宮附修驗舊記) 往古酒田ハ最上川を隔て、南北ニ有リ川の北を飽海郡酒田といふ家數百四五十軒はかり川の南を田川郡酒田といふ家數千余軒宮ノ浦ノつゝきにして飯盛山の西にあり其地卑濕にしてしばしば洪水の憂ひあり官家の許容ありて慶長四年に飽海郡酒田の西濱に總引移に相成

(庄内昔聞書^{筆の余}所引) 袖の浦ハ笹原野の笹を取除一郷を取立てひらた船^{〇船ノ假名}を作リ最上其外へ商物運送の便とす此時町年寄上林七郎右衛門村井理兵衛永田茂右

衛門の三人也長人ハ三十六人有りて市中の事を掌る笹原野薪不自由の爲め追々下濱より十里冢迄松林を切盡海風砂を吹て家を埋しかば天文中に至今の酒田を見立砂山引ならし一ノ丁より七ノ丁迄秋田町獵師町中町を立て又飛鳥砂越の河内に巾二間の海道を作商物を坂本迄牛ニ付けて送る此頃まで酒田に牛五疋ならでなく難義せしとなり

(庄内物語附録) 秋田印内臼市村兵次郎といふ百姓語りけるハ……百六七十以前ハ今の酒田ハ最上川の南飯盛山の西に有今泉流寺林などいふ處知る人多かるへし今の酒田ハ僅か家居有りしか次第ニ川を越て北に移り住ぬと語りし兵次郎ハ正徳年中に百六十六才なり永祿の頃生れなりとかや

(泉流寺縁記) 當所を往古ハ坂田と書又中頃ハ砂瀉いつの頃よりか酒田と書來りしにや定かならず昔し宮の浦繁昌の頃には當處を向フ酒田と唱へ今東禪寺分と唱ふる處に僅に町家ならでなかりしと舊記に見えたり其後三十六人衆の浦より此處に引移り本町通ニ家作いたされしハ是れ酒田町の開け始めなりと云其後内匠町次第ニ家作多くなりて後ち寺院引移る是今の寺町通りなり本町と内匠町ハ裏地境續の處慶長年中本町内匠町兩裏地領主より引揚らる此通り今の中町なりと云河岸八町ハ過半本町の裏地なりと云藪田小路和泉小路粕谷小路理右衛門小

路是等の町ハ皆三十六家ノ住處拘地と聞えたり故に家號を以て町名となす明應の頃大川筋自然此地に向ひ海船着場とハなりけり三十六家當所に引移りしハ永正年中武藤家の御代ニ當る後最上家の御代慶長の頃までハ前にも述ふるが如く此酒田も戸數いと少かりしに元和年御當家御入國以來益市中の繁昌して萬代不易の湊とはなりぬ

將夕酒田ノ北部ヲ流ル、一條ノ河流ヲ日向川ト云フ亦最上川ト同ク古來河身ノ變遷一ナラス古老ノ傳説ニ往時日向川ハ酒田近ク流レ今ノ濱畑地方ヨリ本慶寺裏ニ沿ヒ字長坂ヲ貫キ海ニ注キシト云ヘリ

(異本庄内昔聞書) 新地之分濱畑ヨリ本慶寺迄水ニ而筑後町北へ船付候よし依而總名を濱の町といふ

日向川ノ濱畑ヨリ長坂地方ヲ流レシハ何レノ時代ナリシヤ記録ノ徵スヘキナキモ濱ノ町 濱畑 濱田等ト地勢トニ依リ之ヲ考フルニ其傳説モ亦據アルニ似タリ同川ノ末流海ニ注ク處ヲ小湊ト稱ス即チ酒田湊ヲ大湊ト云ヘルノ對稱ニシテ亦往時船舶出入シ小繁華ノ地タリ持地院ノ傳説ニ應永中其地ニ蒲地氏ナル豪族アリテ理

元ヲ歸依シ爲メニ持地院ヲ創立セラレシヲ蒲地氏没落ノ後チ小湊自ラ衰微シ人戸漸次酒田ニ移リ長祿三年ニ至リ持地院モ亦當處ニ移轉スト妙法寺等モ其本ト小湊附近ニアリシハ彼寺ノ下ニ述フルカ如シサレハ酒田ハ向酒田ヨリノミナラス小湊ヨリモ轉シ來リ民家増加シ繁華ノ地トナリシナリ

酒田氏 當所ノ豪族ニシテ平泉藤原氏ノ幕下ニ屬セリ而モ其何レノ地ニ住セシヤヲ詳カニセス

(義經記 辯慶如意ノ渡ニテ船頭權守ヲ威嚇セシ詞) 和殿のやうに我れに當らば出羽國へ一年二年の内に來らぬ事よもあらず酒田湊ハ此少人の父酒田次郎殿の領也只あたり返さんものと威しけれども云云

文治元年平泉陥リ奥羽悉ク鎌倉ニ屬スルニ及ヒ酒田氏亦之ニ事フ爾後ノ消息杳トシテ聞ユルナシ 永慶軍記ニ天正中ニ於ケル酒田氏ノ事跡ヲ載スルモ今之ヲ取ラス

(東鑑) 文治六年上洛供奉武士交名 坂田三郎

(建久四年富士野御狩日記) 出羽國侍小野義治五百騎打立幕下多比羅阿威氏家飯良子、螺木、遠藤、後藤、酒田。各合二千五百騎立、

○組分ト戸口

向フ酒田ト當酒田トノ經歷上ヨリシテ古來全町ヲ内町組 米屋町組 酒田町組ノ三區ニ分チ就中内町 米屋町 兩組ヲ「東禪寺分」ト惣稱セリ本ト東禪寺城惣曲輪ニニアリシヲ以テナリ後チ戸口漸次繁殖シ町數モ隨ツテ増加シ明曆ノ酒田大繪圖ニ據リ各組町名ヲ記スレハ左ノ如ク町數三十七、戸數一千二百七十七ヲ算スルニ至レリ

- 内町組 内町七十六戸 片町七十三戸 淡路小路九戸 中ノ口かしばた町十六戸
- 肴町十六戸 本米屋町二十四戸 濱町十四戸 町數七、戸數二百廿八
- 米屋町組 新米屋町六十五戸 山王堂町三十壹戸 荒瀬町十八戸 濱町横丁十八戸○今ノ近江町
- 同笠町卅三戸○今ノ天正寺町 町數五、戸數百六十五
- 酒田町組 本町七丁百四十六戸 片肴町廿六戸 上袋小路三十戸半 稻荷小路廿三戸
- 山椒小路廿壹戸 中袋小路同上 御宿小路廿五戸 下袋小路廿五戸 利右衛門小路二十戸 横鍛冶町同上 中町七丁百廿三戸 林昌寺小路六戸 片平町五戸 伊勢津小路五戸 御宿小路通五戸 地持院小路十戸 地藏院小路九戸○今ノ柳小路 粕谷小路九戸

秋田町 三十三戸 内匠町 五丁 九十三戸半 寺町 五丁 四十三戸 荒町 貳丁 三十一戸 茶筌町 五戸 獵師町 東小路 四十九戸 同西小路 三十五戸 町數 廿五、戸數 八百八十四

天和三年ニ至リ町數四十九、戸數二千二百五十一、人口壹萬二千六百四十九内男七千五百八十五ニ上レリ然ルニ酒田ノ地ハ既ニ述フルカ如ク最上日向兩川ノ間ニアリテ大海ニ瀕スルヲ以テ朔風起ル毎ニ土砂ヲ飛揚シ屋舎ヲ埋メ臺町 今町ヨリ濱畑濱田ニ巨リ被害最モ劇シ本間久四郎名ハ光丘後チ四郎三郎ト改稱ス本間家中興ノ祖ナリ痛ク之ヲ慨キ寶曆八年私資ヲ投シ貧民ニ賃シ西濱ニ風除樹木植付ノ舉アリシヨリ町民頼リテ其堵ヲ安ンスルヲ得シノミナラス漸次西北端ニ民家増加スルニ至レリ

明治四年八月酒田縣令シテ三組ノ名稱ヲ廢シ更ニ全町ヲ三區ニ分割セラル

(野附氏御用留) 覺

第一區 肴町通鍛冶町分十王堂町分東側正徳寺迄夫より寺町北側淨徳寺西小路濱畑角迄是より上通一圓

第二區 肴町通鍛冶町分十王堂町分西側正徳寺前角迄夫より寺町南側南藏院小路迄南ノ方引繼キ六ノ丁根上脇より粕谷小路通下中町分下内匠町分寺町分

東側並町離共

第三區 粕谷小路通七ノ丁分下中町分下内匠町分是より下通一圓

右之通酒田町三區割合御取究相成昨廿八日本山少屬見分相濟境々ニ棒杭相建候趣ニ御座候 未八月廿九日

同九年八月廿一日鶴岡縣ヲ廢シ山形縣ニ合併スルニ及ヒ酒田ハ管下第五大區ニ屬シ四五六小區ニ分割セラレシカ同十一年十一月大小區ヲ廢シ郡治トナシ同十七年七月町村組合ヲ制シ本郡ヲ廿六戸長役場ニ編成スルヤ天正寺町 上中町 臺町ノ三組合トナル 但各組合ノ名稱ハ役場所 在ノ町村名ヲ取レルモノ

天正寺町組合 上下内町、細君町、片町、中之口町、山王堂町、給人町、元米屋町、八軒町、荒瀬町、米屋町、濱町、楡物町、近江町、筑後町、新片町、鷹町、外野町、濱畑町、南北千日堂前

上中町組合 本町七丁、肴町、上袋小路、山椒小路、稻荷小路、中袋小路、實小路、利右衛門小路、染屋小路、鍛冶町、十王堂町、大工町、桶屋町、上下中町、上下内匠町、寺町

上臺町組合 秋田町、傳馬町、今町、上下臺町、櫻小路、出町、上下荒町、上下小路、船場町、新町、高野濱

同廿一年町村制施行ノ際組合ヲ廢シ全町ヲ一區トナシ各町名ハ之レカ字トナレリ戸口ハ同廿七年ノ調査ニ據ルニ戸數三千五百八十三、人口二萬七百九十一ヲ有セシカ同年十月廿二日ノ劇震ニ家屋ノ燒失スルモノ壹千三百五十七戸、破潰スル

モノ百四十六戸ニ及ヘリ爾後年々恢復シ現今ニ至レリ

○町役人

全町ヲ三組ニ分割セラレシヲ以テ施政ノ慣例モ多少ノ異同ヲ存シ之ヲ支配スル役人亦較々趣キヲ異ニセリ古來内町 米屋町組ニハ各町肝煎ノ外、組毎ニ長人ナルモノ若干人アリ其内ヨリ組頭ヲ立テ組内ノ政務ヲ取扱ハシム年代不詳組頭ヲ大肝煎ト改メ天和二年更ニ大庄屋ト改メラル

(野附氏書留) 天和三年亥三月十五日三町大肝煎自今以後大庄屋と可申由山口三郎 右衛門殿○酒田 町奉行 被仰渡候

内町組ニ於テハ最上時代齋藤淡路、三丁目大炊ナルモノ長人ヨリ組頭トナリ世々其職ヲ襲ヒシカ元祿三年淡路ノ四代孫與右衛門事ニ座シ改易セラレ齋藤某之レニ代ル大炊ノ消息詳カナラス寛文六年伊藤彌左衛門之ニ代リ組内ヲ支配セリ寛政四年佐竹彌右衛門本姓三 丁目氏勤功ヲ以テ大庄屋格トナリ文化八年大庄屋ヲ命セラレ天保三年長人須田五兵衛亦勤功ニ依リ大庄屋格トナリ同九年大庄屋ニ進メラレ是レヨ

リ四人ノ大庄屋ヲ有シ維新ノ際ニ至レリ

米屋町組ハ岩堀孫右衛門 遠山七右衛門ノ二人大肝煎タリシニ貞享二年退役シ荒瀬郷手代池田吉兵衛翌三年野附七郎兵衛大庄屋ニ召出サレ子孫相承ケ亦維新ノ際ニ及ヘリ

長人ハ大肝煎初メ組頭後 大庄屋ニ屬シテ組内ノ事務ニ與ルモノナリ内町組ニ二人アリ米屋町組ニハ寛永六年マテ五人アリシヲ町民ノ訴願ニ依リ三人ヲ減シ二人ト定メラル事米屋町ノ下 詳ガナリ但長人ハ大肝煎ノ推舉ヲ以テ酒田町奉行ヨリ補命セラル、モノニシテ世襲ノ役ニアラス

(野附氏御用留) 享保十四年酉

御尋ニ付以横折申上候覺

一今度内町組、米屋町組兩御町長人共へ御目見被仰付被下置候段奉願候ニ付古來之次第一ツ書ニ仕差出候様ニ被仰付候依之承傳候趣左ニ申上候
一内町、米屋町兩御町相立候義何年号と申儀不奉存候へとも最上様御代御町御座候而高橋伊賀守齋藤筑後守寺内近江守三奉行所御町方並郷中ともに御支配被成候

趣尤其節より長人相立候由承傳候

一古來之町長人誰々相勤候哉と御尋御座候即左ニ申上候

須田 □兵衛 鷺宮 與兵衛

廣谷 次郎右衛門 佐藤 九左衛門

右之者共内町組長人役相勤申候

小島 勘五郎

根津屋 彦三郎

右兩人者共米屋町組長人役相勤申候

一御入國以前より相勤申候大庄屋之者共内町組ニ而者齋藤淡路三丁目大炊と申者相勤申候則長人之内より相立候由承傳申候

一米屋町組大庄屋岩堀孫右衛門遠山七右衛門と申者相勤申候是又長人之内より相立候由承傳申候

一佐藤九右衛門奉得御呵之義ハ廿六年以前申之年と覺申候其節外ニ御呵之者無座候

一右同人御目見御赦免以後如何致御目見願延引仕候哉と御尋被遊候其節御願申上度存念ニ而罷在候へ共重キ願之儀ニ付容易ニ難奉願と默止罷在候義ニ御座候以御慈悲長人共奉願候通御目見被仰付被下置候ハ、重々難有仕合ニ可奉存候以

上

酉十一月廿七日

池田 吉兵衛 野附七郎兵衛
伊藤 傳 内 齋藤 寛 藏

御町奉行所

(同上) 享保十七年子歲 内町米屋町組長人御目見之義我々印判ニ而以書付奉願

候處ニ同子十月被仰付候其節御町奉行高橋萬右衛門殿内町組長人高橋作右衛門杉

原新助粕谷佐兵衛佐藤清右衛門米屋町組長人小嶋八右衛門池田藤七

享保廿年卯歲 米屋町長人小嶋八右衛門極老ニ付奉願御役御免被成候依之跡御役

卯閏三月近江町森佐次右衛門申上候處ニ願之通被仰付豊原多助殿御町奉行御勤

酒田町組ニハ三十六人衆ト稱スルモノアリテ同組ノ長人タリ其内重立チタルモ

ノ三人ヲ選ヒ年寄ト稱シ町政ヲ支配セシム所謂三十六人衆ハ向酒田ノ地侍ニシテ

當時上林七郎右衛門 村井理兵衛 永田茂右衛門年寄ナリシト云フ 庄内昔聞書 移轉ノ後

チモ各々家格ニ仍リ其職ヲ襲ヒシカ年代不詳加賀屋與助 鑑谷惣右衛門 上林七郎

左衛門コレニ補セラレ子孫相承ケ維新後ニ及ヘリ外ニ大肝煎二人アリテ亦町政ニ

與カレリ各家ノ事歴ハ住處ノ下ニ述フヘシ

三十六人衆ハ本ト由緒ヲ有スル門地ナルヘキモ數回ノ火災ト家道ノ盛衰トニ依リ其由緒幾ント不明ニ屬セシモ酒田町組長人トシテ龜ヶ崎城ノ警備、人馬ノ檢斷公金ノ諸拂等凡ヘテ酒田町ヨリ公邊ニ係ル用務ニ勤仕スルヲ以テ商賈ヲ營業トスルニモ苗字帶刀ヲ聽サレ無稅地ニ住セリ

(萬書集抄)

元祿九年

先年より無役之御町家御改之上以來無役被仰付帳

子九月

一 壹軒屋	無役	本町一ノ丁長人	伊東彌次兵衛
一 同	同	白旗太郎左衛門	同
一 同	同	青家次郎右衛門	同
一 貳軒屋	同	小島半兵衛	同
一 壹軒屋	同	同二ノ丁 七森利兵衛	同
一 同	同	近江屋嘉右衛門	同
			伊東彌次兵衛
			小川與惣右衛門
			三丁目清右衛門
			山本三郎右衛門
			本間久右衛門

伊東彌右衛門
齋藤平右衛門
池田吉郎兵衛
野附七郎兵衛
栗林新右衛門
渡部隼人
鏡谷惣右衛門
加賀や與助

一 同	同	三ノ丁 みのや九兵衛	同	みのや新右衛門
一 同	同	西野長兵衛	同	みのや彦兵衛
一 同	同	かゝや又兵衛	同	押判屋四郎兵衛
一 貳軒屋	同	松田又左衛門	一 壹軒屋	高橋庄右衛門
一 同	同	渡部太兵衛	同	永野五郎兵衛
一 同	同	渡部三郎兵衛	同	上林治左衛門
一 同	同	藪田彌左衛門	同	渡部源助
一 同	同	小林喜右衛門	同	粕谷源次郎
一 同	同	野治嘉兵衛	同	かゝや多右衛門
一 同	同	渡部七郎兵衛	同	かすや半左衛門
一 同	同	玉屋久右衛門	同	
一 同	同	七ノ丁 粕谷三左衛門	同	
一 同	同	かゝや太郎左衛門	同	
一 同	同	かすや小路半右衛門名跡	同	
一 同	同	搦屋外兵衛	同	

右之通御町長人之分人足廻し諸事小奉行其外長人役儀相勤申候ニ付人足等御町並之御役ハ不仕候 ○以下年寄諸職人修驗ヲ載スルモ之ヲ畧ス

以上通計三十五人之レニ鑑屋ヲ加フレハ三十六人ナリ蓋是レ長人カ三十六人ノ
名稱ヲ得タル所以カ絶家若クハ退轉ヨリシテ其數ニ充タサルモ尙其稱ヲ襲ヒ享保
十五年ノ頃八年寄長人ヲ通シ三十人トナレリ

(野附氏御用留) 享保十五年戌歲

覺

酒田御町年寄共長人大庄屋共之内ニ而不宜儀之内談仕他所者ト申合願等相企江戸
其外他所ニ申越之趣承候ハ、不隱置壹人立御役所へ注進可仕候又風俗を乱不行作
之者も右同斷不隱置可申出候若隱置御役所より逢僉議候者其節之仕儀依面々可爲
越度候此旨諸役人得心可仕候唯今迄之致方不宜候間今度改申渡候

戌正月

右被仰付候趣奉畏候自今以後此旨可相守候爲其御請書如是ニ御座候以上

- 同 大庄屋
- 渡邊 隼人 栗林 新右衛門
- 同 長人
- 白畑 儀七 本間 久四郎
- 白畑 多七 青冢 治郎右衛門
- 谷口 九兵衛 西野 長兵衛

- みのや 彦兵衛 渡邊 三郎兵衛
- 藤井 與兵衛 永野 五郎兵衛
- 玉木 長右衛門 小林 作兵衛
- 六井 七郎兵衛 渡邊 徳助
- 根上 善七 勝木 藤右衛門
- 渡邊 七郎兵衛 最上 屋嘉右衛門
- かゝや 平兵衛 根上 伊右衛門
- かゝや 多右衛門 粕谷 源次郎
- 八幡 源右衛門 松田 又藏
- 近江屋 茂右衛門 松本 二郎兵衛
- 近江屋 嘉右衛門 淺野 彦右衛門
- 酒田町年寄
- 鑑谷 惣右衛門 上林 七郎左衛門
- 内町長人
- 佐藤 清右衛門 廣谷 次郎左衛門
- 粕谷 佐兵衛 高橋 作右衛門
- 同 大庄屋
- 齋藤 寛兵衛 伊東 傳内
- 米屋町長人
- 小島 八右衛門 池田 藤七
- 同 大庄屋
- 野附 七郎兵衛 池田 吉兵衛

寶曆十一年三十六人ノ由緒取調アリ此時年寄ヨリ酒田町奉行ニ差出セルモノ左ノ如シ

(萬書集抄)酒田町人卅六人筋目 寶曆十一巳年正月かゝや榮藏差出ス

一三十六人之儀者奥州秀衡公御妹當所洞永山泉流寺開基洞永院殿水庵泉流尼公え從奥州附添之士と承傳申候

一尼公に附添之三十六人由緒書ハ秋田久保田白馬寺ニ御座候由泉流寺ニも尼公御手道具其他武具等御座候處度々之類焼ニ而焼失仕候只今ハ鑑斗御座候右白馬寺ハ古來泉流寺本寺ニ御座候由承傳候是等之趣を以三十六人之儀ハ酒田御城附ニ而警固仕候様ニ承傳候尤御城内御道具御封印三十六人之内御町年寄三人印形仕來申候義も右之故より被仰付候哉と奉存候

一三十六人之儀ハ往古ハ帶刀仕來候處先年於江戸御表町人帶刀御停止被仰付候節御斷申上帶刀不仕候由申傳候今以遠方へ罷出候節御用ハ勿論私共帶刀仕來申候一三十六人之内最上家侍筋之者有之候哉と御尋ニ付乍憚申上候

○此間ニ上林加賀屋永田粕谷等ノ筋目書ヲ載スルモ本町ノ下ニ抄出スヘシ
右者今度最上家侍筋之者有之候哉と御尋ニ付仲間相尋候處御尋之家柄當時相知不申候へ共前段之趣申上候程之品ニハ無御座候へとも一通申上候三十六人之儀ハ最

上様御時代以前より相勤來候義と承傳罷在候御尋ニ付乍憚申上候以上

辰十二月

鑑谷 惣右衛門
上林 勇右衛門

御町奉行所

○此下ニ三十六人相傳ノ古文書寫ヲ載セリ亦本町ノ下ニ抄出スヘシ

三十六人ハ奥州平泉藤原秀衡ノ妹德尼ニ扈從シ來レルモノ、子孫ノ名跡ヲ相續セシ家筋ナリトハ古老ノ傳誦ニシテ人口ニ膾炙スル所ナレトモ其記録トシテ今日ニ存スルモノハ未タ曾テ前掲ノ文書ヨリ古キヲ見ス其後チ寛政文化嘉永ノ際由緒職務ニ係ル事項ノ具申アリ

(酒田町年寄御用留)三十六人御役儀並長人役兼帶勤之覺書

一三十六人御役之義者往古より由緒有之者之由ニ御座候乍恐酒田御城附ニ而警固仕候様ニ承傳候尤御城内御兵庫御封印三十六人ノ内御町年寄三人封印仕候義も右之故を以被仰付候義と奉存候古來者年寄始帶刀仕來候處先年於御江戸御表町人帶刀御停止被仰付候節御斷申上候而平素者帶刀不仕候様承傳候
一享保十七年御入部之節酒田御町總代として最上大石田迄三十六人之内一人御出

迎罷登相勤候ニ付明和九年辰御入部之節前例之通御出迎罷登候様御窺申上候處如何譯御座候哉此後ハ罷登候ニ及申間敷段被仰渡差扣申候

一御着城御祝儀酒田惣名代年頭惣名代共三十六人之内御町年寄之内一人仲間より一人相勤來申候

一御在城之節年頭御目見並上下御出迎御見送共ニ罷出相勤來申候但年頭御目見仕候節席付之儀者桐之間御椽通年寄三人本間正五郎西野長兵衛外ニ仲間惣名代五人次ニ三町大庄屋内町米屋町長人御用達御扶持取並御藏米取座付申候

一御紋付御荷物御雇船積下鶴岡え爲御登之節古來より遠奉^{トホフギヤウ}行被仰付右警固仕罷登申候

一御城米積船出帆當日仲間行事一人宛濱詰相勤外ニ積船壹艘外ニ一人宛^{デフネコソフ}出船小奉行として相勤申候勿論御城米不意難等有之候節者不限晝夜行事一人罷出相勤申候

一御上下之節御召船並御召替船兩艘清川迄船中見計御船守護ニ罷出申候猶又御巡見様御下向之節御乘船三艘柏谷澤迄罷登守護仕諸事見計相勤申候

一御巡見様御通行並他所御大名様御通行之節御本陣御宿脇亭主古來より三十六人御役之者計相勤申候

一御城内惣御堀共ニ年々兩度宛掃持被仰付候節惣仲間罷出相勤申候是又土居^{トキナキ}薩奉^{サツホウ}行^{キヤウ}と古來より唱來申候

一出火之節御高扎警固相勤來申候

一御用御用錢諸割取立請拂之義仲間之内兩人割元被仰付相勤申候

一同御役所詰仲間兩人御用物爲警固相詰申候

一同御奉行所爲御案内仲間兩人御附添相勤申候

一夜廻之義^キ御印提灯爲持候而每夜相勤申候尤中陰之節ハ晝夜共ニ御町人足被^{タラシ}下置相勤申候

一御町方出人足御差紙通御町歩高ヲ以割出肝煎共々申付候並往來之旅人歩行人夫乞出候節不限晝夜出申付候

右之通相勤來候三十六人御役之義者往古より格合一通嚴重ニ被仰付一統難有相勤罷在候處右勤之内加役長人役而已之様ニ相成自然と三十六人御役之意味薄相成何共歎ケ敷奉存候ニ付乍憚是等趣奉入御内覽度奉存候間御序を以宜被仰上被下度奉存候以上

戌九月(寛政二年)

行事

- 松村彦兵衛
- 長濱五郎兵衛
- 永田茂右衛門

上林七郎右衛門殿
加賀や與助殿
鑑谷惣右衛門殿

○文化十三年子七月ノ覺書ヲ載スルモ大同少異ナレハ之ヲ略ス

(酒田泉流寺文書)

先達而差出候書付拙寺開基之義御尋ニ御座候小書ニ申上候通先年より度々自火類燒ニ付記録寶物等燒却仕リ委細相知不申候へ共先々住より申傳候者當寺開基東永院ハ前奥州大守秀衡妹君ニ而昔自戰國之砌家臣三十六騎と共ニ當國に被引取酒田御町未無之時川向宮野浦に落附暫家臣ヲ被扶助住居被成候へ共自身遁世之志在之羽黒山に引込被送老年候内法体被致候其後右三十六人君遠方ニ被成御座候而者朝夕不能拜顔悔造營一寺奉迎宮野浦ニ而生涯奉仕候而其後打續三十六人民家ニ下問屋商賣致渡世今酒田御町年寄職以下三十六人此末ニ御座候且三十六騎之馬卅二疋只今傳馬町ニ御座候飼料等も馬に附在是元開基尼公之所領ニ御座候且三十六人ハ于今不相替年頭中元五節旬忌日ニハ拙寺開基ニ禮參仕候殊ニ四月十五日忌日ニ候へ共當所祭禮時分故三月十五日取越拙寺ニ打寄法會執行且御町爲繁榮大般若經轉讀仕候猶又開基尼公之御草履取在之拙寺元屋敷ニ罷在候迄ハ寺中ニ差置候へ共時之住僧町家ニ相下ケ只今ニ拙寺擅家ニ御座候尤モ尼公之馬具等も三十年以前迄御

座候處出火之節燒却致候是等之儀諸人之知所ニ御座候開基入寂より年數六百年ニハ今少々御座候由此外之義相知不申大抵右之趣ニ御座候以上

寛政七卯十月

酒田泉流寺

右者當寺開基社奉行より御尋ニ付前書之通認メ差出申候

(三十六人御觸御用留) 尼公由緒之覺

當所曹洞宗泉流寺開基尼公之儀德之前と申候而與羽二州之大守鎮守府將軍陸奥守藤原秀衡之妹君ニ御座候秀衡死去之後子息右大將頼朝公ニ被亡一門悉沒落仕候依而平泉城立退家士三十六人相隨處々漂泊仕死亡等爲菩提秋田久保田於白馬寺剃髮仕夫より御當處宮野浦に落着金峰山高寺其外處々參詣就中羽黒山者靈山ニ思召秀衡夫婦之石碑建立在之暫此處ニ山籠仕リ其後宮野浦に一字之草庵造營平泉より落候迎泉流庵と名付同處ニ而爾時建保五丑年四月十五日九十歳ニ而入寂戒名洞永院殿水庵泉流德尼公和尚其後尼ニ而數代相續仕永正之頃宮ノ浦より砂瀉に移轉海晏寺三世正全和尚入院在之是より和尚續相成洞永山泉流寺ト改メ大永元年辛巳嘉永四年迄三年正全長老入寂仕境内ニ尼公廟所並鎮守白山權現堂在之其外尼公所持之手道具多御座候處正德年中元年より嘉永四年迄百四十一ニ成類燒ニ而什物悉燒失仕延享三卯年之類燒ニハ廟所等尊像等燒失仕明和元年申年再ヒ尊像彫刻仕尼公守佛之藥師如來斗リ于今相揃當

所林昌寺小路無量院ニ御座候宮の浦元屋敷于今泉流寺林と相唱申候毎年忌日ニハ三十六人打寄於泉流寺ニ御町繁榮古主爲菩提大般若經轉讀仕申候羽黒山大堂ニも尼公尊像往古より安置之處先年炎燒之節燒當時同處開山堂ニ御位牌斗安置在之尼公入寂より當亥嘉永四年迄六百三十五年ニ被成申候

(庄内物語附録)庄内酒田の町内に洞永山泉流寺とて曹洞宗の禪寺有土人云昔佐藤秀衡入道の妹徳尼公故有て庄内に來り給ひ此寺に葬りしなり古き位牌ハ貞享年中火災の時燒失す今改置く 洞泉院殿水庵泉流大禪定尼五月十五日と有近年奥州仙台の旅僧此寺に宿して此位牌を見て甚た驚き故を聞て曰近年仙臺にて追善ありしに此碑と符合せりといふ聞まゝ記之泉流寺に寓居せし長兵衛といふ土人云此燒亡のまへ泉流尼の香合とて堆朱鈕の香合徑り四寸余上に守宮サミのつまみ有寺中凶事あれバ此のり必失るとて住持朔日ごとに出して拜せられしと也外に禪尼の小袖とて二ツ三ツ有朽そんじたるをけさのうらなとに用られたるにもや彼の長兵衛か話ニ秋田郡印内白市村兵次郎といふ百姓語りけるハ我か先祖ハ彼禪尼の供して奥州より來りし三十七人の士の一人なりしか故あつて今秋田郡に住す今酒田町の長人三十六人といふハ彼尼に從來りし三十六人の從士の末なり奥州より供せしものハ内猶跡を殘せしハ粕谷某本間某飯口某長野某等わつかに其余流なり世隔りて今ハ

三十三家多亡たり又百六七十一年以前ハ今の酒田ハ最上川の南飯森山の西に有今泉流寺林などいふ處知る人多かるへし今の酒田ハわつか家居有りしが次第に川を越て北に移り住ぬと語りしとなり兵次郎ハ正徳年中に百六十六才なり永祿ノ頃とかなれりかや又勝事ならずや

(東永山縁起慶應二年齋藤彦兵衛壽平撰)抑當山開基洞永院殿泉流徳公禪尼の由來を尋るに奥州の大守前陸奥守藤原秀衡卿の御後室泉の方と号せしなり……夫より最上領なる板敷山などの難所ニかゝり……庄内領なる楯谷澤といふ所の民家に暫く忍び羽黒山を信じ日々丹誠を運ひ給ひしとゞ其頃頼朝公四海を治め給ひて諸國の靈場に御寄進あり羽黒山には黄金堂五重の塔の御普請あり其掛り役人入込しと聞給ヒ鎌倉に憚りしにや當宮の浦まで落延給ふに所の長の情に庵室を結び尼公の守り本尊藥師如來を信仰して泉流庵と改め爰に住居し給ふこと久し……本尊藥師如來の御前に坐し讀經終り拜と共に遷化し給ふとゞ時に建保五年四月十五日御年八十七歳戒名洞永院殿泉流徳尼公と号すこれより數代比丘尼にて相續有來りしが其後二百八十余年をへて追々衰微し庵室有か無かになりしに文龜年中當寺開山鳳芝正全大和尚ハ河雲山海晏寺三世に當る奥州永徳寺より法縁ありて河雲山ハ住職し後ち當寺の開山と成て洞永山泉流寺と改め云云

一酒田卅六人衆由緒ハ當山開基洞永院殿德公禪尼ハ附從し侍なり云云

(卅六人松田家記) 抑東永山泉流寺開基德尼公ノ由緒ヲ尋ルニ往昔鎮守府將軍藤原秀衡卿妹君トクアマ子ト申奉ル奥州信夫郡司佐藤元治ノ姉君ニシテ桓武帝ノ後胤岩城次郎大夫則道公カ北ノ方ナリ則道公奥州へ左遷ノ并妻トナラセ平ニ城ヲ築キ住セ給フト云フ

文治五年八月八日畠山重忠ヲシテ泰衡ヲ攻討タリ金剛秀綱信夫郡司元治始メ部將十八名戰死ス依之落城ノ并些カ三十六騎ト俱ニ逃レテ德前君奥州ヲ立退羽州秋田久保田ノ草庵ニ止マリ爰ニ於テ德前君御剃髮アラセラレタリ暇ヲ告クルニ至リ乘馬一頭ヲ下シ賜ヘリ故ニ此寺ヲ白馬寺ト号ク馬死シテ後チ山門ノ邊ニ白馬ノ像ヲ建立シアリト云フ夫ヨリ御親族ノ出羽國田川郡司太郎實房行文等ヲ便リ最上郡嶮岨ノ山坂ヲ越ヘ漂然庄内ニ彷徨シ田川郡ニ至リ名モ高キ月山湯殿山羽黒山ヲ信仰シ給ヒ登リ降りテ立谷澤下扇ノ附近ニ草庵ヲ結ハセラレ卅六騎俱ニ此地ニ潛ミ給ヒテ秀衡卿一門勇士戰死者ノ靈像ヲ築キ弔祭シ專ラ菩提心ヲ起念シ在シマセル時ニ源頼朝公鎌倉ニ覇府ヲ開キシヨリ諸國ノ靈場ニ寄進アリ羽黒山大堂黄金堂等ヲ始メ拂川邊營繕ノ爲メ土肥次郎實平奉行トシテ來ル尼公之ヲ憚リ什物ヲ山間ニ埋メ田川郡砂瀉地方宮野浦ニ來リマシノテ草庵ヲ結ヒ玉ヒ佛道修行アラセラル光

陰空ク過キ建保五年丁丑年四月十五日德尼公御年九十才ニシテ入寂セラレ玉フ……尊骸ヲ庵ノ東ニ埋葬シ榎ノ木ヲ植テ墓標トシ忌日毎ニ靈供ヲ捧ケ尼公塚ト稱シタル暴風散砂ニテ自然山トナリ竟ニ其跡ヲ世俗飯盛山ト云フ草庵跡垂レテ三十
六家保護シ奉リ數代比丘尼相續二百八十年ヲ經文龜年中河雲山海晏寺三世鳳芝正
全和尚入院シテ庵号ヲ寺号ニ改メ洞永山泉流寺ト号ス釋迦如來ヲ安置ス云々
(卅六人御觸御用帳) 由緒御尋ニ付申上候

私共先祖文治五年前陸奥守秀衡之妹德尼公ハ附添之士ニ而田川郡宮野浦ハ沒落尼
公草庵を結泉流庵と稱し被致潛伏建保五年四月十五日被致卒去候後弟子相續仕候
從士卅六人之義者爲活計民家ニ下リ問屋商賣致渡世住居罷成候處爲不便利大永年
中飽海郡へ移轉砂瀉開墾仕候居始候故酒田市中于今町名相殘申候沒落之節牽連候
馬只今傳馬町御座候武藤家上杉家領地之節度々戰場ニも罷出軍功有之御拜領品々
御座候上杉家最上家領地之節ハ酒田地侍ト唱卅六人之老分之者更ニ三十六人頭相
勤自然年寄ト唱町方政事取扱來元和八年酒井家御入國之節龜ヶ崎城御引渡之節相
馬大膳亮様御人數ハ立會御城付御兵具封加判仕候近頃迄仕來候酒田町奉行始而被
遣候節御仕置等如從前不可有相違旨鶴岡御家老中より年寄二人ハ御狀被遣候御巡
國之節樽肴献上仕年頭目通被仰付從士同様之取扱ニ相成町役人年寄卅六人大庄屋

長人小役人と順序ニ御座候且又御高札並鎮守山王堂守護其外火防方非常之儀者勿論都而市中取締之爲晝夜見廻相勤申候居屋敷之儀者古來より免地ニ罷在候素より年寄卅六人ニ限り役料等無御座候年經候ニ從ひ度々類焼聊相殘候而已申傳旁御尋ニ付申上候

(明治二年)

巳六月

民政御役所

年寄格卅六人連判

以上ノ記録ニ據リ卅六人ノ由緒ヲ見ルヘシ而モ此等ノ記録ハ皆後出ニ係リ悉ク信スヘカラスト雖其言フ所略々趣ヲ同ウスレハ無下ニ抹殺ニ附スヘカラス要スルニ三十六人ハ文治五年藤原秀衡ノ妹トクノメ徳前ニ隨從シ出羽ニ遁レ來リ向酒田ニ落居セシモノ、子孫ノ名跡ヲ繼キタルモノナリト云ヒ松田家傳ニハ徳前ハ秀衡ノ妹信夫庄司元治ノ姉ニシテ岩城則道ノ妻ナリシヲ元治戰後三十六騎ニ擁セラレ當國ニ遁レ來ルモノナリト云ヘリ之ニ據レハ秀衡徳前元治ハ兄弟ニシテ藤原基衡ノ子トナルナリ然レ平泉系圖ヲ案スルニ秀衡ハ基衡ノ一子ニシテ妹弟ナシ又元治ハ佐藤系圖ニ據ルニ出羽住人佐藤師治一本師綱ニ作ルノ子ニシテ即チ繼信忠信ノ父ナリ尊

卑分脉平泉系圖ニハ之ヲ清綱清衡ノ三男ノ女婿トナセリ斯カレハ酒田卅六人ノ傳説ニ

徳前ヲ秀衡ノ妹ト云ヘルハ頗ル覺束ナク況シテ秀衡徳前元治ヲ兄弟トスルハ固ヨリ信スルニ足ラサルナリ必竟徳前ノ出所ハ不明ニ屬セリ

案スルニ平泉志ニ鎌倉實記云奥州岩城判官代府生兼帶海道小太郎成衡○の後室徳尼○といふハ源賴義朝臣の女にて母ハ多氣權守宗基か女なり後三年の時義家朝臣養女として亘理清衡○ノ祖父○に預て常陸大塚清行嫡子小太郎成衡に嫁す基衡か媒なりと徳尼の遺跡今も岩代國平ミヒラニありて此平ニ對し泉といふ所もあるハ平泉の名を襲へるなりといふ又出羽國羽黒山大堂ハ秀衡の建立にして本社中ニ秀衡の妹徳尼子の木像ありと云傳ふ系圖を考ふるに秀衡ニ妹なし疑クハ同人にして異説なるへしと雜記に云ヘリト見ユ松田家傳に徳尼子ハ岩城則道ノ妻ナリト云ヘルハ蓋岩城成衡ニ係ル事跡ヲ誤リ傳ヘタルモノナルヘシ

又酒田古老ノ口碑ニハ泉流寺ノ開基ヲ秀衡のばゝさまト云傳フばゝさまトハ祖母又老夫婦ノ妻ヲ云ヘル方言ナレバ岩城ヨリ來レル成衡ノ妻徳尼子若クハ秀衡ノ後室ヲ云ヘルモノナルヘシ平泉志ニ

東鑑に基衡の妻ハ鳥海三郎宗任の女なり秀衡の先妻ハ近江國の住人佐々木源三秀義の姨母なり後妻ハ前民部少輔基成の女にして泰衡忠衡を生りとあり同

書ニ建久六年九月故秀衡入道の後家今に存在す殊ニ憐愍を加ふへし是即基成の女なりと見ゆ

一説ニ秀衡の後室泰衡母の墓ハ出羽庄内邊の寺にありて其後裔ハ坂田の豪家本間某なりと顧ふに泰衡の子彼處に匿れ居たるに○東鑑ヲ案スルニ泰衡の幼子萬壽平泉没落ハ際家人ニ擁シ去レ在所分明ナラザリ

シナリ本文ニ據レバ萬壽ハ出羽ニ潛匿セルモノ、如シ其祖母も同居せしならんか

ト見エ之レニ據レハ泉流寺開基ト稱スル尼公ハ秀衡ノ妹ニアラスシテ後室ナランカ姑ク疑ヲ存シ後考ヲ俟ツ

然リト雖氏平泉藤原氏ノ盛ンナルニ方リ一門郎黨奥羽ニ彌蔓シ我カ庄内ニハ田川ニ郡司行文アリ坂田ニ坂田次郎アリ殊ニ佐藤信夫庄司元治ノ父祖ハ皆出羽ノ住人ニシテ一族各所ニ散在シツ、アレハ没落ノ際秀衡父子ノ妻孥兵乱ヲ避ケ當國ニ來リ投セシモノ必スアリシナルヘク泉流寺開基ト傳フル女性モ亦其類ニシテ譜代恩顧ノ郎黨ニ擁セラレ平泉ニ緣故ヲ有スル庄内地方ニ遁レ來リ向酒田ニ落居シ子孫土着ノ侍トナリ長人タリキ後年ニ至リ平泉譜第二アラサルモノモ之ニ加ハリ終ニ三十六人衆トナレルナラン故ニ加賀屋ハ本ト加州ヨリ永田ハ三州ヨリ來リ谷口

ハ織田家ノ遺臣ニシテ平泉譜代ノモノニアラス亦以テ之ヲ證スヘシ

三十六人ノ經歷ハ蓋斯クノ如クニシテ向酒田ノ長人トシテ町政ニ與リシカ星移リ物換リ地勢ノ變遷ト生活ノ關係トニ依リ町民ヲ率井當地方ニ移轉シ各々本町通ニ居ヲ占メ舊ニ仍リ所務ニ從事シトヒマロ問丸交易ヲ生業トナシ各自多少ノ資産ヲ有スルヲ以テ常ニ甲ヲ藏メ馬ヲ養ヒ世々東禪寺城主ニ屬シ一旦緩急アレハ酒田地侍卅六騎ト稱シ數々弓矢ノ間ニ馳騁セリ元和八年酒井家入部ノ際扶持米給與ノ沙汰アリシモ年寄等辭シテ受ケス是レ各々相當ノ資産ヲ有シ衣食ニ事欠カサルニ因レリ

(庄内昔雜話) 酒田町年寄共御家人被成様御取持人御座候へ共二君ニ不仕など、申上壹合も受不申候然共くらし方澤山成ほど地所又かぶ田地持候間氣つよく上の御世話ニならずと申候

此時資格ニ制裁ヲ加ヘラレ町人ニシテ平素刀ヲ帶ヒ馬ヲ養フハ過分ナリトシ帶刀ヲ禁シ馬匹ヲ驛傳ノ用ニ供セシメラルサレト其所務ハ故ノ如ク且邦家ノ慶弔ニハ町民ヲ代表シテ献物スルノ格式ヲ享有セリ

(酒田町年寄二木氏文書)

今度水野市兵衛御町奉行訴訟申上候處被成御免候就夫石原孫左衛門其御地御町奉行被仰付候萬事御仕置等如前々不可有相違候以上

寛永十五年霜月十五日

石原源内重則 正

柴谷武右衛門宗左 正

石原平右衛門重秋 正

高力喜兵衛一方 正

酒田町

加賀屋與助との

燈屋惣右衛門との

上林七郎左衛門との

改年之御慶珍重申納候舊冬極月廿二日之飛札昨十三日令披見候然御繼目爲御祝儀酒田御町中より目錄之通進上被申遂披露候之處一段御機嫌事ニ候惣御町中右之通御申渡可有之候恐々謹言

正月十四日

長谷川權右衛門、 正

平時ハ長人ノ内輪番行事二人ヲ立テ人馬ノ差配ヲ掌リ其他ハ町用錢受拂ノ割元トナリ或ハ船舶ヲ支配シ巡見使諸侯ノ宿泊ニハ本陣脇亭主ヲ勤メ城地浚治ノ際ニハ土居羅奉行トナリ總ヘテ公ニ係ル用務ニ從事シ就中酒田城内武器ノ封印ニハ古來年寄ヲモ加ヘラル是其外郭警衛ノ任ニ當ルヲ以テナリ

(酒田町年寄御用留) 口上之覺

此度行事勤方御尋ニ付申上候御役所より人足御指紙其外諸方より參候人足割之義町々歩高見合日々大概平均相成候様町割仕行事より肝煎ハ差紙ヲ以早速申付候義ニ御座候

一行事三人日々勤方之義前々より詰切ニ相勤候ニハ無御座候御用有之候節書役方より爲相知罷出相勤候義ニ御座候尤行事切相濟兼候御用之節ハ仲間之内年老之

末松吉左衛門、 正

石原源内、 正

加賀屋與助殿

燈谷惣左衛門殿

上林源七郎殿

返報

者罷申合出相勤候義ニ御座候日々人足御差紙之義夕方ニ小使持參仕候節三人之内壹人宛罷出人足割等相勤來候義ニ御座候
右之趣御尋ニ付仲間共打寄前々より之義沙汰仕候而乍憚口上書を以申候以上

(安永元年) 辰八月

行事

淺井治助

近江屋嘉右衛門

西野長兵衛

鑑谷惣右衛門殿

加賀屋與助殿

上林七郎右衛門殿

覺

一錢貳百貫文 但兩替三貫六百四十文ニ御座候

右者惣年寄長人爲用金御町用金より被下置難有仕合奉存候相渡候様ニ御末書可

被成下候以上

長人行事

玉屋久右衛門

近江屋嘉右衛門

松田亦右衛門

年寄

加賀屋永藏

明和二年十二月

御町奉行所

鑑谷惣右衛門
上林勇右衛門

若シ長人ノ内絶家退轉スルモノアリテ公務ニ差支フル片ハ更ニ選舉シ之ニ補充スルヲ以テ古來ノ慣例トナセリ

(酒田町年寄御用留)

- 一ノ丁 治郎右衛門
- 二ノ丁 新四郎
- 三ノ丁 庄兵衛
- 四ノ丁 與兵衛
- 五ノ丁 與五右衛門
- 六ノ丁 清右衛門
- 七ノ丁 清右衛門

右之六人之仲間不足ニ付御役儀相立申度奉存候候間右之趣宜敷被仰上被下度奉存候以上

行事

渡邊彦兵衛

白旗太郎右衛門

加賀屋太右衛門

上林七郎右衛門殿

加賀屋與助殿

鑑谷惣右衛門殿

天明七年未十二月日

天明七年未十二月日

天明七年未十二月日

天明七年未十二月日

明治元年三月酒田民政局清水助一舊幕臣副田專之助同福田要八肥前藩池藩士ヲ市中掛ニ命スルト同時ニ酒田町奉行當時石原友大夫廢セラレ年寄大庄屋長人ハ市中掛ニ屬セリ同二年九月八日從來年寄大庄屋ハ各自宅ニ於テ公務ヲ取扱ヒシカ此日初メテ町會所ヲ本町四丁目 米屋町 内町ニ置キ日々出勤シ之ニ從事セシム同三年正月十二日三十六人ヲ廢シ同二月宅地拘屋敷ニ町役ヲ課セラル同八月廿八日三組大庄屋ヲ町年寄役ト改稱ス

同四年八月廿八日山形酒田出張所ヨリ從來ノ組分及年寄役ヲ廢シ全町ヲ三區ニ分チ各區ニ正副戸長一員宛ヲ置カル同年十一月再ヒ酒田縣ヲ立テラレ其十二月各町肝煎ヲ廢シ更ニ每區四人ノ肝煎ヲ置キ戸長ニ隸屬セシム同月十八日縣屬戸田治作市井理事トナル同八年二月七日管内ヲ大小區ニ分割シ大區ニ區長小區ニ戸長用掛計算掛ヲ置カル、ニ及ヒ三區ノ肝煎廢セラレ是ニ至テ年寄大庄屋肝煎ノ制全ク廢絶セリ明治元年以下野附氏御用留ニ據ル

○町政ト經濟

酒田町政ニ係ル事歴ハ記錄散逸シ今其詳細ヲ述フル能ハス明和六年巡見使菅沼藤十郎戸田主膳正下向ノ際町奉行ヨリ呈出セシ覺書ハ較々要領ヲ得タルモノナレハ左ニ録シテ參考ニ供ス

- 一 御町方之義御町奉行頭取年寄二人大庄屋六人諸事取計情相を正し高利を不貪質素を第一ニ仕候様申付候右年寄大庄屋九人ニ而四十四町を裁許仕候町毎ニ名主一人宛御座候町内之義取計申候御町人衣服之儀前々より布木綿之外着用不仕候町家五軒宛組合四人組と相唱其内一人五人組頭と唱申候
- 一 酒田町組古來より三十六人之者御座候御用之品ニより罷出相勤申候右之内三人宛一ヶ月持ニ仕行事と唱人馬指配仕候
- 一 内町組米屋町組古來より長人役之者御座候勤方右同斷
- 一 浦役人二人公義より五人扶持宛頂戴御城米並御米置場御用等相勤申候御用相勤候節ハ帶刀仕候
- 一 川船差配四人内一人ハ年寄共之内より相勤申候内三人ハ廿六人之者共之内より相勤申候公義御船米川下之節最上ハ罷登酒田より登申候船々差配仕候其外近國御大名様方御下米並最上往來之船々差配仕候

一 盜賊博奕火付等御改ハ平日御町奉行預リ御同心之者並目明之者四人晝夜御町端々迄相廻リ町々自身番御座候而夜中相廻リ其外辻番人鳴子番人と申もの有之夜中六時に時柏子を打相廻り候右之外重もの義有之節又ハ風立候節杯ハ臨時御同心並町役人共相廻リ町々の諸番人も相増尤火消町持之内廿人宛毎夜相廻リ申候九月より翌二月迄六ヶ月の間御町中晝夜相廻リ申候

一 公義御城米爰元へ着船の當日より御物頭組足輕召連爲火之巡毎夜御町相廻申候尤御町中ニ而御城米御米置場ニ有之内別而用心向ニ付一町毎ニ晝番人差置申候一切支丹宗門御改之義毎年六月中年寄大庄屋所へ御同心一人罷越町内家持之者共招呼御法度相認候帳面へ銘々判形取其上ニ而年寄大庄屋御町奉行所へ罷出嚴重ニ相守候様申渡候段申出右判形仕候帳面差出申候毎年六月中於御町奉行所御町人共宗旨之寺院招呼宗門改御物頭御町奉行列席御法之條目爲讀聞右帳面へ寺判取候而帳面宗門御役人方ニ而取調申候 ○此以下七條アレトモ之ヲ略ス

一 他處へ縁組養子等親類又ハ懇意之者へ遣候節願主より願之品名主へ申立候へバ其旨年寄大庄屋へ願之御町奉行へ内意申聞承知之上願出候様申付願書へ親類並印形仕年寄大庄屋へ願之御町奉行承届御家老中へ申上願之通申付候宗門之義ハ旦那寺送り手形ニ其町名主墨付相添先方へ遣申候 ○他所ヨリ縁組ノ手續モ之

レニ同シケレバ省略ス

出口之義も先達而内意申聞女出判ハ御家老中御列判ニ而御境目御番所罷通申候一御城下出火御座候へバ諸町自身番人辻番人鳴子番人火事觸仕候ニ付町々より火印高挑灯其外火消道具色々持出御町人足追々駈付火防申候右場處へ御町奉行罷越並町役人致差圖爲相防申候其外町持之内より一組三十二人宛九組罷出相防申候右之外火消役人罷越相防申候

右之通御座候以上

丑二月

金井男四郎

而シテ人夫傳馬等ノ郡役ニ屬スル徴發ノ方法ハ古來酒田町組ハ六、内町、米屋町兩組ハ四ヲ等分負擔ノ制ナリシカ兩組ノ資力ニ差違アリテ之ヲ等分ニ負擔スルハ米屋町組ノ堪フル所ニアラストナシ寛永六年同組ヨリ步率變更ヲ請願シ更ニ酒田町ハ七分五厘、内町ハ壹分八厘七五、米屋町ハ六厘二五ニ改メ總へテ賦役亦之ヲ標準トスヘキヲ命セラル事淡路小路米屋町ノ下ニ詳カナリ爾後永制トナリ維新ノ際ニ至レリ

將夕町役人ノ給料其他町費支出ニ係ル記録ハ極メテ不完全ニシテ今其方法ヲ叙

スル頗ル難シ天明六年二月元町奉行堀平大夫ヨリ新役加藤今右衛門へノ事務引續
覺書ニ據ルニ「御町用金米」「困究御救錢」「火銷用金」「町持用金」「川堀一錢掛」「町
奉行役所用金」「御同心用金」「山王用金」「御町雜用錢」等ノ設備アリテ町政ヲ料理
セラレシモノ、如シ各用金ノ成立支拂等ハ同覺書ニ詳カナレハ宜ク本書ニ就テ之
ヲ見ルヘシ就中「御町用金米」「御町雜用錢」ハ町經濟ノ消長ニ關スルヲ以テ左ニ其
概略ヲ述フヘシ

御町用金 享保以前ノ事ハ詳カナラス同十年加賀山平助町奉行在勤中、川船

上荷壹割錢及ヒ宅地賣買口錢ナルモノヲ創始シ年寄大庄屋ノ手當其他コレニ屬
スル用途ニ充テラレシニ同十四年時ノ町奉行高橋萬右衛門御町用金ノ資本積立
ヲ計畫シ年寄大庄屋ノ手當ヲ廢シ彼上荷壹割錢賣買口錢等ヲ蓄積シ其利子ヲ以
テ之ニ支給スルノ方法ヲ組立テラル是レ御町用金元立^{モトダテ}ノ始メナリ爾後ノ成績頗
ル宜ク子母繁殖セシヲ以テ安永六年ニ至リ年寄等ノ情願ニ依リ其内年々三十兩
宛手當トシテ給與セラレシモ用途ニ差支ヘナカリシト云フ

(野附氏御用留) 享保十四年酉年より酒田中ニ而屋敷買候者方金壹兩より口錢百
二十文宛萬右衛門殿へ上ル 同年より川舟壹割之内より壹ヶ年ニ三百文ツ、上
ル 同年より問屋貳分錢上ル 同年より三町より傳馬駄ちん上ル右之通此末年
々上ケ候様ニ高橋萬右衛門殿被_レ仰渡候_レ

(同上) 乍憚以書付申上候

五年以前酉年春中被_レ仰付候ハ此末御町用錢之端立ニモ罷成筋御座候ハ、存知
寄可申上様被_レ仰付候ニ付其節御町方ニ而用金之仕立相談仕拙者共申上候通被_レ仰
付當年迄溜錢以御精力四百五十兩余ニ罷成候ニ何にても此末御町之爲ニ罷成
儀も御座候ハ、存寄以書付可申上旨被_レ仰渡委細申上候只今迄差上申候金子上様
仕置<sup>○御郡代所
ニ貸附ノ義</sup> 來年より壹ヶ年ツ、利子年々申請並當年迄御町より口々取立候通
ニ仕年々御町用錢ニ仕御用之度々出錢之足ニ仕候様ニ被_レ仰付被_レ下置度奉_レ存候尤
此末取立錢差上拾ヶ年も元利共ニ溜置候ハ、金高ニモ罷成御町之爲ニモ罷成
候へとも當時御町困難之節ニ御座候故差當リ出錢之足シニ仕候様ニ被_レ仰付被_レ下
置候ハ、御町之者共ハ勿論拙者共迄難有仕合ニ可奉_レ存候依之拙者共以書付申上
候以上

(享保十八年)

丑六月

米屋町長人

藤

七

内町長人

作右衛門

池田吉兵衛	野附七郎兵衛
齋藤半内	伊東傳内
栗林新右衛門	渡部隼人
松田又藏	八幡源右衛門
鏡谷惣右衛門	上林七郎右衛門

乍憚口上書を以奉願候

拙者共儀他所懸合等ニ而諸かゝり物も仕迷惑之段御察被成下か、山平介様御勤之節上荷上壹割並屋敷賣買口錢御發端之上御手擬被成下年々配分仕一方之潤ニも罷成相續仕候處高橋萬右衛門様御勤ニ相成被仰聞候ハ御町方用金仕立置候ハ、末々御町方之ためニも相成可申候間何卒用金元立ニ相成候もの有之候ハ、用金仕立候而可然被仰渡候得共外ニ手段も無之其節ハ如何様ニも差繰相成候節柄故御手擬被下置候上荷壹割猶又屋敷口錢右兩口御町用金相育候迄用金元立差出可申旨申出候處左ニ御承知被成候ニ付今以右兩口御町用金ニ相納申候依之申上候廿六年以前より當御町大變有之度々類焼仕不存寄家作等仕候故右兩口前々之通被下置候様ニ折を以テ御歎可申上と仲間申合時節見合罷在候内連々之不差繰ニ罷成當時内々甚迷惑仕候隨而奉願候近來御用金之義莫大之金高ニ相成右壹割錢入不申候而も減候儀も相見不申候間右壹割錢當年より末々七月中ニ拙者共ハ

被下置候ハ、如何にも相續仕度奉存候右申上候通被仰付被下置候ハ、一統難有奉存候以上

(安永六年酉)

月 日

三町九人

御奉行所 堀平大夫殿也

御町用金之内より受取申事

一金三拾兩

右ハ五十五年以前^{○享保十年}か、山平助様御勤之節川舟上荷壹割錢並屋敷賣買口錢御發端之上拙者共ハ爲御手擬被下置候處五十二年以前^{○享保十四年}高橋萬右衛門様御勤ニ相成右二口共御町用金之元立ニ差上候様被仰付數年差上候處爲御手擬四年以前子年より此末年々金三十兩宛被下置候右金相渡申候様御末書可被成下候以上

酉十二月

九人 印

御町奉行所

(天明六年酒田町奉行御用引繼覺書)

御町用金並用米

酒田御町用金之義古來ハ鶴岡同様家屋敷賣買口錢ヲ以仕立候モノト相見候處萬右衛門殿勤之節年寄大庄屋共役料ニ取來候上荷壹割錢ヲ以テ當分借リ上右兩口

ヲ本ト被立候以來今以一割錢ハ用金へ入候右一段ト根つよく在之候上先役衆宜
 取計被申候而一割ノ利足ニ預候金子モ多く又ハ無盡等ニ入候而終取ナドいたし
 彼是過分ノ金高ニ相成年中拂方モ夥敷義ニ候得共差支モナク雜用拂ニ致候テハ
 御町ノ難儀ニ相成候事共ヲ一切用金ニテ相拂其外大勢ノ諸役人へ手當ヲ初メ時
 々ノ褒美金等存候程ニ行届候段ハ全ク先役衆ノ大功ニテ外役所へハケ様程根つ
 よき用金在ましく候用米ノ儀も委細帳面ニ相記候通前分ハ余程ノ米高と相見候
 與内米並御郡代衆御代官衆へ貸入候分追々捨リニ相成當時狩川組ヨリ元廿表年賦
利五分
 濟參リ候斗ニ御座候右退轉いたし候モ同様ノ儀拂方モ年中杖突飯米其外色々在
 之候故中々増長致し候所へハ參リ不申候安永七年戌暮小七殿入被居候兵庫殿千
 表無盡八番取いたし候積ノ所其年扎方ニ出入在之右無盡潰レニ相成天明二年寅
 暮是又小七殿加入致し被置候海晏寺五百表無盡八番目取當リ候所未ニ記シ下持
 頭出入片付ノ濟口トシテ右取計ノ者共十ヶ年拜借願出候ニ付無據貸渡し候故當
 分元米役所へ納リ不申取跡三ヶ年ノ懸米ハ右拜借ノ者共より掛出し四
年目ヨリ五分利上納十一ヶ年目元米上納ノ旨 旁以用米ノ元相減リ申候委
 細ハ勘定帳ニ在之候
 一右用米用金ノ義元來年寄大庄屋共役料ノ内借上候テ仕立候所モ在之候ニ付手
 當ノ爲余程ノ手數ニ預置候ヨリ小七殿傳達ニ御座候尤モ筋モ可在之候得共大

金ヲ長々預置候テハ引渡際むつかしき事坏モ在之候者故私勤已來兩人ツ、順
 番ニテ三年切ニ預年延ノ預ケ不仕義ニ定置候尤近年用金モ増長仕候ニ付古來
 之通上荷一割錢年寄大庄屋共へ被下度旨度々相願候得共萬右衛門殿已來數十
 年致來候義唯今改候モ如何ニ存取上不申候乍去役人共ノ内ニハ無給ノ者モ在
 之年寄並齋藤半内御扶持方ハ役ニ付候御給扶持ニモ無之新右衛門隼人七表ツ
 、ノ御給米ト申モ聊之事ニテ畢竟古來右役料モ附居候ニ可有御座候處數十年
 借上當時用金ニ手間モ無之事ニ候へハ願之筋モ無據存安永六年酉二月平右衛
 門御月番ノ節御内意相伺置同年暮ヨリ九人へ三十兩ツ、年々爲手當爲取申候
 尤此義ハ少々意味モ有之長ク爲取候ニモ及申間敷哉委細ノ内存ハ帳付共存居
 候故書面ニハ態ト相記不申候

御町雜用錢

御町用金ノ支出外ニ係ル更胥ノ給料土木祭事費及ヒ公借償却等

總へテ町民ノ負擔ニ屬スル雜費ヲ云フ徵收ノ方法ハ各組一ヶ年ノ金額若干ト豫
 算シ之ヲ各町壹軒屋敷間口四間ヨリ五間位奥行廿
間ヨリ廿八間マテヲ云フ 一壹歩トナセル各組惣歩高ヲ以テ

扣除シ壹步割當リノ目安ヲ取り之ヲ各町ノ步數ニ乘シ各組ノ割元ナルモノ其年
 ノ正月ヨリ月割ヲ以テ之ヲ徵收シ年中ノ費用ニ充テラレタリ然ルニ享保以後火

災凶荒相踵キ町民疲弊セシニモ拘ハラズ雜用錢ノ賦課年一年ヨリ増加スルヲ以テ漸次困究ニ陥リ爲メニ宅地ニ沽却シ或ハ免レテ恥ナキノ徒類々輩出セリ其本間四郎三郎深ク之ヲ憂ヒ窃ニ救濟ノ方法ヲ計畫シツ、アリシカ會々安永四年本間幸四郎等カ酒田湊口錢取立請負ノ年限既ニ滿チ村山與四兵衛、津國屋多助之二代リ年額四千五百兩錢二百五十貫文ヲ上納スルノ外酒田町救郵備金トシテ年々二百五十兩ヲ出シ向フ五ケ年間受負取立ノ請願アリ是ニ於テ四郎三郎亦救郵金トシテ同年限間同額ノ金子ヲ效シ都合五百兩ニ其他ノ融通金ヲ加ヘ五ケ年ノ間元利ヲ蓄積シ雜用錢元立錢即チ雜用錢ノ資本ナルモノヲ組立テ滿期ノ後ハ之レヨリ生スル利子ヲ以テ雜用錢ニ充テ全町ヲ舉ケ悉ク無役ノ民タラシメントスル方法ヲ案出セリ

時ノ町奉行堀平大夫多少コレニ異議ヲ容レ無役ハ町民ノ義務ヲ欠クモノトナシ稟請ノ結果更ニ之ヲ以テ雜用錢補助ノ資本トナシワッホウヒキダシモトダテセン雜用引足元立錢ト名ケラル是レヨリ賦課ノ金額幾分力減少シ町民其慶ニ頼リシカ尋テ天明ノ大凶荒アリテ元

立錢之レカ救郵ニ流用セラレ爲メニ資金減額トナリシノミナラス嘗テ諸方ニ貸附セルモノ亦延滞ニ及ヒ預期ノ結果ヲ收ムル能ハスシテ終ニ貧民救助ノ資ニ充テラレ悉ク費消ニ屬セシモ安永七年以後十年ノ間町民幾分ノ負擔ヲ輕ウシ且究民飢渴ヲ免レタルハ必竟雜用引足元立錢與リテカアリシナリ

(野附氏御用留) 安永七年戊歲

覺

當町方之義ハ前々より諸役之懸リ物多く末々に至まで過分之雜用差出候ニ付自然と困究ニ及家屋敷ニはなれ風俗濫リニ候依之今度本間正五郎寸志金並村山與四兵衛津國屋多助御請負方之寸志金等彼是取集本立被仰付右利足を以連々雜用ニ引足可被成下御沙汰ニ候然ル時ハ御町方出錢追年輕相成末々ニ至迄何分ニも取續可申事ニ付候間容易ニ家屋敷ニはなれ風俗を濫り候儀無之様より可被申達候

戊 二 月

平 大 夫

年 寄 中 大 庄 屋

(天明六年舊町奉行堀平大夫御用引續覺書)

御町雜用引足元立錢

一此儀ハ安永六酉年四郎三郎殿發端ヲ以御家老中へ被申上被仰付候儀ニテ末々御町方一角ノ潤ニ可相成事ニ御座候右發端ハ同年村山與四兵衛津國屋多助兩人増口錢請負願申上候節爲寸志五ヶ年ノ内酒田御町へ金貳百五十兩宛差出可申旨申上其通被仰付外ニ本間正五郎ヨリ同斷五ヶ年貳百五十兩宛差出別段四郎三郎殿兼テ御土藏へ納被置候八百兩申下サレ右三口へ御町用金ヨリ五百兩引足シ壹割ノ利足ニテ惣質屋へ預候而五ヶ年過候へバ酒田御町雜用取立ニ不及相濟候積ニ御座候間其通被仰付被下度旨被申上被仰付候右申立相濟候後四郎三郎殿私へ爲知ニテ用金ヨリ五百兩出金之義被申聞候ニ付御町永久ノ大益ニ相成候義結構ナル御發端私迄大慶至極ニ候へ共用金之義大方貸付ニ致置候間有合之金子五六兩御座候是ヲ元立錢へ差出候節ハ年中過分ノ拂方ニ必至ト手問致迷惑候貸付金ノ義ハ追々取立可申候得共是又急々申付候ハ、何モ可及難義哉仍而來年取入候兵庫殿發端之千表無盡不殘さし出可申候間是を元立錢へ被差向候様致度候乍去此無盡近年甚手もつれ候而明年ノ取入如何可在御座哉甚無心元存候何卒其許御働ヲ以無相違取入候様致度旨申請候處果シテ翌成年ニ至扎方ノ混雜ニテ連中掛米相揃不申四郎三郎殿モ様々世話致候へ共終ニ

潰レニ相成外ニ各別ノ出金可致様モ無之見合居候内増口錢ノ義モ打續取立不足在之由ニテ正五郎出金ト兩口ニテ二百五十兩宛年々出候事ニ相成去辰暮迄ニ兩口ノ出金皆濟ニ御座候唯今迄元利疊候而當時貸入高金百拾兩錢壹萬八千九百貫文程在之此利七月十一月兩度ニ金拾壹兩錢千八百九十貫文程出申候間今年頃ヨリ段々雜用へ引足可然段四郎三郎殿へ申談置候

一右四郎三郎殿被差上候書付ノ内ニ末々酒田御町無雜用ニ相成候ハ、屋敷賣間敷ト申議相止永久屋敷ヲ放シ不申候而衰微ニ及申間敷旨相見候ニ付此所私愚意一通リ四郎三郎殿へ申談候ハ近頃小癩ナル事ニ可被存候へ共ヶ様ノ義ハ永久ニ殘リ候事故此節最初ニ存寄一通リ不申述モ如何ニ付及御示談候惣テ四民共ニ無役ニ而土地安住致スト申議天下ノ法ニ無之士ハ勤ト申役百姓ハ年貢町人ハ廿日役ノ類町人ハ往古ヨリ地子ト申ヲ雜用ノ外地代ヲ出シ町ニ連リ候年貢ヲ出候所明智光秀京中ノ心ヲ取ルヘキ爲假ニ地子錢をゆるし候而大閣秀吉公ニモ其儘被成置候ヨリ後年迄其法ニ成來候由承傳候然共雜用人足ト申ハ天下一統ゆるしナク町へ掛候ニ御座候處酒田ニ限リ町人共、年貢ト申儀いか、可在之候哉尤此方ハ御上下ノ公事船又ハ御用材木運送ヲ始メ諸雜用過分ニ掛候町ニテ鶴岡ニテハ一軒屋敷ノ雜用ならし候而一ヶ年六七百文ニテ濟候由ニ候

處此方酒田町組杯ハ大抵一兩ニテハ事濟不申箇様ニ難儀ナル出錢故引足遣申
 度段ハ年來ノ願ニ御座候例令ヘバ惣町中ニテ一ケ年三百兩出候ヲ十兩出サセ
 殘二百九十兩引足候而モ根元ノ町役ヲバシ、候ト申本体ヲ不失候ヘバ少モ不
 苦候百姓ハ如何程高免ナル地ニテモ御年貢御免ト申儀ハ無之鶴岡ヲ初他所迎
 モ上ヨリ御手當トシテ無役ニ被仰付候ト申町ハ承及不申酒田ニ限り其元御親
 父ノ代ヨリノ篤志ヲ以町方ヲ憐愍ノ餘リ無役ニ被致候ト申ハ一旦慈悲ニ叶候
 様ニ候得共惣町人ヘ町人ノ本体如何ナルモノト申儀ヲ忘却致サセ候基ニ可在
 之哉ト存候尤屋敷賣買ト申儀相止候ハ、身体ヲ失候モノモ無之結構ナル儀ニ
 可有御座候ヘ共百姓之田ヲ讓渡候同意其者ノ盛衰ニヨリ能キ場所ヲ賣候而町
 蔭ヘ引込ミ又ハ邊地ヨリ場中ヘ張出シ候ト申様成浮沈モナクテハ叶申間敷哉
 既ニ鶴岡杯ニテハ御免地多ク候處其方ノ勝手ニヨリ御免地替ト申儀ヲ願別屋
 敷ヘ移リ候モ儘、在之候然ルルハ例如後々酒田無役ニ相成候而御免地ト心得候
 様申渡候而も御免地替之筋ニテ相願候ハ、移リ替リハ相止申間敷哉殊ニ雜用
 ノ外ニ人足ト申モ屋敷ノ歩ニ附居候故是又困窮ニ及屋敷高ノ人足出シ兼候者
 ハ他所ヘ移リ候モ可在之候酒田惣町無役ノ儀ヲ難有悅不申者モ有之間敷殊ニ
 私に役中右ノ御發端ニテ始メ候義ニ候ヘバ末々共ニ私ヲモ能様ニ申唱候ニ可

在御座候故滿悅致候ヘ共ケ様ノ事ハ僅ナル様ニテ四民ノ大本輕カラサル義ト
 心付候而ハ甚安堵不仕折角御厚意ニテ御申立被成候義ヲ破リケ様ナル申分氣
 ノ毒ニ余リ候ヘ共右愚意ヲ申述候同敷ハ御町雜用引足元立錢ト申名目ニ立候
 而少タリ共役ヲハ永久ニきかせ申主意ニ被成候而ハ如何可在之哉御同意ニ候
 ハ、此段御家老中ヘも申上右元立錢定書致し後年ニ殘置申度旨厚申談候所四
 郎三郎殿聞濟被申候様子ニハ無之候得共不同心ノ由ヲモ不被申何分其筋ヘ被
 申上可然由挨拶ニ付左候ハ、兩様相伺可申旨申候而戌二月罷登候節御家老中
 へ前段四郎三郎殿發端ノ主意ト私愚意兩様ニ委細申上四郎三郎心底ニハ得ト
 應ジ不申様子ニ御座候ヘ共不同心ト申ニハ無之由申聞候間奉伺候尤五ケ年過
 候而取行候趣向ニ御座候ヘハ唯今ハ雜用元立ト唱候而モ雜用引足ト唱候而モ
 障無之儀ニハ御座候ヘ共後年ニ至意味間違モ出來可申哉ト兩様相伺候旨申上
 候處其許被申聞候所理ノ當然ニ候去暮四郎三郎書付指出候節ハ何レ奇特ナル
 願ト思召其所迄細ニ御沙汰ニモ不被及被仰付候雜用引足ノ名目可然旨御列席
 御一同ニ被仰聞候間罷歸其段四郎三郎殿ヘ申達若後年傳誤モ可在御座哉ト右
 四郎三郎殿年來ノ篤志並正五郎與四兵衛多助寸志ノ次第共ニ帳面ニ認メ四郎
 三郎殿ヘ見せ候處少々加筆在之候ニ付其通清書致し年寄大庄屋共ヘ渡置候酒

田ヲ支配被仰付候私共ニ御座候へハ何レニテモ酒田ノ爲能キ様ナル義ヲ悦可申儀且折角發端被致候四郎三郎殿ノ主意ヲくじき候様ニテ甚申惡ク再思致候へ共町人ニ町人ノ本体ヲ取失セ無役ニテ御所ニ安住いたし事濟候と心得違サセ候處ヲなげかハしく存候ニ付愚意ヲ申談御家老中へも申上候義ニ御座候

一右懸リ役人之義四郎三郎殿へ申合セ元方ハ正五郎へ申付請拂ノ義ハ與四兵衛多助兩人へ申付役所ノ末書ニテ元入貸入共ニ致サセ候右ニ付與四兵衛多助へ年々拾貫文ツ、筆墨代トシテ爲取候尤四郎三郎殿發端ニテ出來候元立錢ノ事故私ハ少モ存念立不仕借リ方等ノ義申出候而モ毎度四郎三郎殿へ書付遣シ不同心ノ分相除同心ノ分へ斗貸渡候四郎三郎殿在江戸ノ節ハ前ニ斷置私吟味ノ上夫々へ貸渡候尤モ最初ハ不殘質屋共へ年中一割ノ利足ニテ預可被申者ノ趣向ニ御座候處年々錢高增長致し質屋共モ此上預リ候義迷惑ノ由申出候間其後ハ並町人ニテモ引當サへ儘ニ御座候へハ相應ニ貸渡申候

一右元立錢之内只今迄モ三百貫文斗宛度々御町方救爲取申候乍去雜用元立錢ノ事故歩ニ懸候而爲取候ニ付大屋敷ニ住居致シ候者程割當リ多ク壹軒家己下困究者へハ三百貫文ノ配當漸五三十文宛當リ候事ニテ指タル手當ニテ相成不申ニ付去已暮ニハ四郎三郎殿へ申談惣町極究ノ者撰出シ候而一人ニ付五百文宛

爲取候猶又春ニ至候而飢渴ノ者出可申哉ト存去暮ノ三百貫ノ内百貫文ハ殘シ候而貯置候尤此段四郎三郎殿へ申達候

(文化二年酒田湊増口錢之義御尋覺書)

一未年安永四年より五ヶ年季六人之者御受負仕候處右年季ノ内ニ酒田村山與四兵衛津國屋多助兩人より奉願上候者本納四千五百兩と貳百五十貫文外ニ酒田御町困究救ひ備金として年々貳百五十兩ツ、差出置申度段奉願候處右兩人ハ被仰付候尤年季安永七年之年より寅年天明二年迄五ヶ年季ニ候其節本間正五郎より添書ヲ以願上候ハ今度増口錢村山津國屋奉願候旨趣ハ酒田御町に備金年々貳百五十兩宛差出し申度段彌右兩人に被仰付被下置候ハ、拙者よりも年々貳百五十兩宛御町方へ差出申度段奉願被仰付候

但本間正五郎仕方貳百五十兩宛双方よりハ五百兩宛年々備置五ヶ年相勤其後増口錢取立能候へハ追々右之仕法ニ致後年ニ及右利足を以御町方諸郡役人足等備ニ致度仕方之處戌年より寅年迄増口錢取立余慶無之卯年より跡年季願候へ共右之貳百五十兩宛ハ無之候最初五ヶ年備金も辰巳天明四年兩年之米高直酒田御町へ賣座を立安直段ニ致兩年共ニ賣續ケ候故大賣損莫大之義ニ而備金もなくなり候事と相聞エ候右備成就いたし候ハ、酒田困究者之爲

外ニ三百兩

五丁野廣野谷地
三町雜用元入

但最上海道鶴田街道下川原普請酒田持藤家水門普請入用並
水門守給料其外臨時入用ノ分ニ見込

(同上)

三町雜用錢之儀是迄取立候節ハ町々割元より組々雜用元ニ相納相拂候節ハ年寄
大庄屋月番ニ而印形付之端書別紙振方之通相認末書申請相拂申候此後ハ如何御
取扱可被成候哉何分御差圖被成下度候以上

己六月三日

年寄
大庄屋

(是迄通り年寄大庄屋之印形ニ而請拂候様六月八日御沙汰相成)

別紙 覺

一錢

内

酒田町組

内

内町組

内

米屋町組

右者何々之御入目ニ御座候間三町雜用錢之内より相渡候御差紙被成下度候以上

何何月

月番
年寄

大庄屋

此割合たごへバ

一錢十貫文

内七貫五百文

酒田町組

同壹貫八百七十五文

内町組

同六百廿五文

米屋町組

右割合ニ而相拂來申候米屋町内町組拂之節ハ内町六步米屋町四分割合ニ御
座候

六月九日市中掛より年寄大庄屋へ被申渡

今般市中雜用錢等改革致別紙差出候條尙又可被遂御吟味御町年寄大庄屋ニ委曲
談合有之度候事

己六月

西岡周碩 太田衛太郎
國府五郎 荒木權六

一市中地租之儀ハ鄉村之上畑年貢見鏡取立可然哉

一市中雜用錢之義聊之俸祿賜金等ニテ公用相勤或ハ町吏之分相除可然哉

己六月

岡田謙三郎 副田專之助
福田要八

一 酒田全港家屋敷步數割合金之事

右是迄每年正月ニ全歳之入費を見積り錢高何萬何百ト凡目論見相立依而一步ニ錢何百ノ相定毎月ニ取立候由一体租税金ハ上之土地ニ住居夫々之家職相勤候故寸志之納銀仕候譯ニ候ヘ共其銀ハ其儘上ニ相收リ候ハ當然ニ候素より町内ニハ無余義入費も可有之候間公用ニ相掛リ候入費ハ官より被下下より收候銀ト混同不致候様其内町々ニ而無余義入費相立候ヲ町雜用ト相唱取立候儀可然歟其條理一々分明致候様有之度事右屋敷步割合之義者田地トハ同様ニ參申間敷必御規則も可有之且又當港之入費去卯年辰年ニハ格別之入費高相成規則も難致儀も可有之其以前五ヶ年平均を以相調度事

一 町普請之事

些少之義ハ町内ニ而取行重立候義ハ官より致候ニ付其廉々相調候事

一 檢斷仕組之事

一 火消仕組之事

町々火番之事

酒田町組

一千四百九十五ノ五百五十八文

成年より五ヶ年平均雜用錢取立之分

一百九十六ノ六百三十九文

同斷町會所入用見込

一千三百八十二ノ四百文

書役貳人小遣二人給

但書役小遣とも壹ヶ月三兩宛月給被下置度奉存候事

外ニ三千七十四ノ五百九十七文

外ニ四百廿五ノ四百三文

別段見込

二口合三千五百ノ文

歩高五千五百八十二步六厘四毛九拂

但壹ヶ年壹步ニ付六百廿四文五分

内町組

一二百廿ノ三百六十壹文

成年より五ヶ年平均雜用錢取立之分

一四十九ノ百六十文

同斷町會所入用見込

一五百五十貳ノ九百六十文 但前同斷

書役六分小遣壹人給

外ニ八百廿貳ノ四百八十壹文

外ニ七十七ノ五百十九文

別段見込

外ニ九百ノ文

歩高千四百四十壹步三毛八拂

但壹ヶ年壹歩ニ付六百廿五人
米屋町組

一五十五ヶ六百四十三文

成年より五ヶ年平均雜用錢取立之分

一十六ヶ三百八十六文

同斷町會所入用見込

一四百八十三ヶ八百四十文 但右同斷

書役四分小遣一人給

一ヶ五百五十五ヶ八百六十九文

一外ニ四十四ヶ百三十一文

別段見込

二口合六百ヶ文

歩高千四百九十四歩九厘四毛八拂

但壹ヶ年壹歩ニ付四百壹文三分

右調書七月八日差出し候處右ニ而宜しく候間右之通取立候而宜敷旨御達有之候

(同上) 酒田港家屋敷之儀ハ如何之譯ニ候哉以前より租稅之常額無之是迄三町御用錢ト相唱年々正月ニ九一年中檢斷所人足川船方其外入費高見込ヲ以テ一町家屋敷歩數ニ應し割懸ヶ取立來候由之處當今事緒多端之折柄彌々以諸入費多分ニ相立三町共出錢前夥敷相成末々之者難澁之趣相聞斯ク御一新之折失費而已相

立難澁之向有之候而ハ不相濟より檢斷所川船方且又諸普請等改正ニ相成無益之失費等相省尙又町内出錢高をも相減度一体年貢上納ト町内雜用ニ而取立候銀筋ト相混候而ハ右御趣意をも不相立候條年貢之儀ハ家屋敷歩數ニ付相定度仍而古水帳且家屋敷沽券等取調候處一切無之旨申出候ニ付不得止事檢尺相當家屋敷區塚取調申候右ハ年貢之定額相定尙又港中出錢高相減土民共安堵爲致度之處間々心得違致候ものも有之家屋敷御取調之上ハ御年貢等も高石ニ相成杯申唱以テノ外之事ニ候此以後御趣意之程何レモ奉感戴心得違等不致候様末々之者迄不洩様可申觸候也

巳八月

市中

酒田

縣

年寄

大庄屋

肝煎

八月廿二日沽券帳御取立ニ付蓮池藩本山勝之進本莊藩工藤庸之助其外栗林野附懸リ被申付候八月廿九日迄ニ而出來九月六日十一字西岡君御見分九月七日より民政出張所ニ而沽券帳取調ニ懸ル

方今 御維新事体ヲ明ニシ紀綱ヲ更張スルノ御播政中當酒田縣ニ於テ社寺及市
店ノ經界舊貫頗ル紊乱セリ於是官 盛徳ニ命スルニ測量改正ノ任ヲ以テス
於是仁政者必境界ヨリ始ムルノ盛典ナルヲ体認シ毎年官裁ヲ得テ謹製ス事情條
件如左

- 一古へ市街一町假令ハ五十間ト定メタル今分見五十一間アリト雖古ニ據テ今ヲ
不用然モ私利ヲ營ミ土手ヲ搔崩シ或ハ溝川ヲ埋填シ屋敷割外ノ地ニ家作スル
ノ類ハ現地ニ隨テ圖面ヲ成セリ
- 一假令ハ間口五間裏行二十間場處へ二間半ハ家作致スノ類殘二間半ハ屋敷地ニ
採ラズシテ畑方ニ成セリ
- 一古二十間ノ地ニシテ十九間ニ減步セルノ類ハ今ヲ採レリ
- 一社寺ニシテ有由緒或ハ市郷ノ地ヲ借ルノ類ハ舊ニ依レリ唯無謂私ニ進退スル
ノ類ハ之ヲ改正セリ
- 一諸川岸緣荒蕪之地ハ船持間屋等物置場へ願ニ因テ之ヲ許可セリ
- 一右川岸屋敷地中自然ト道路ニ成レルアリ則テ改正シテ道路トナス
- 一市街商賣家造私ニ道路ヲ狹犯スルノ類往々有ト雖モ願ニ因テ是ヲ許可シ朱捕
立ヲ以テ判然タラシム

此外斷長補短ノ事業アリト雖モ一ニ苛刻ニ不涉様實地ヲ踏數十旬ノ功ヲ積テ終
業斯圖ヲ刻シテ官庫ニ備へ其顛末ノ概略ヲ識スト云爾

干時明治三年歲次戊午二月

舊蓮池藩士屬 酒田縣少屬本山盛徳謹識

其外沽券掛栗林新右衛門野附七郎右衛門肝煎八兵衛出役

- 一繪圖面二十枚 酒田町組 一同十六枚 内 米屋町組
- 一同四枚 寺院並秘藏地共 四十枚

惣 家數三千四百二十四軒
惣 町數八十一町壹反六步
惣 畝數四町六反貳畝九步

運上所川船役所並諸藩へ貸付地十一ヶ所 畝數壹町壹反四畝三步
寺院拾八ヶ寺並日枝神社地秘藏共 畝數廿六町九畝八步

修驗二十ヶ寺並齋藤齋一 畝數八町八反拾九步
惣家數三千四百七十三軒 畝數百廿一町四畝拾五步

右之通り

町々圖面出來致し二月廿日 御局にさし上ル

明治六年二月酒田縣ヨリ雜用錢徵收ノ方法ヲ下問セラル當時戶長ヨリ差出セル覺書ハ名町ノ歩高ヲ詳記シ前掲ノ文書ト對照セハ之ニ係ル事項ヲ會得シ且其調査ハ最近ニ屬シ明治九年地租改正ニ連絡スルモノナレハ冗繁ヲ顧ミス左ニ錄シテ參考ニ供ス

(内町組大庄屋佐竹氏御用留)

山岸様御渡

- 一町雜用錢一ケ年町々ヨリ取立何程ニ候哉
- 一屋敷割ニ應シ取立候ハ、何程之割合ニ候哉
- 一右拂方大凡大口ニ引分ケ取調候事
- 一雜用錢ハ年々正遣方ヲ以テ取立錢勘定致し過之節ニハ割返し候仕末ニ候哉
- 一雜用錢ト申モノ銘々ヨリ取立候分斗ニ無之元入相成候口々ハ取調之事
- 一昨年戶籍調之入用ハ何様ニ致し取調候哉之事
- 右之ケ條取調之事

覺

一町雜用錢一ケ年町々ヨリ取立高別紙ニ奉入貴覽候

一右拂方大凡大口ニ引分ケ候分前同斷別紙ニテ奉入貴覽候

一屋敷割ニ應シ取立候分

一内町組惣歩高千七百四十三歩八厘五毛八拂但壹ヶ年壹歩ニ付錢九百文取立

一壹軒屋敷上内町十歩役細肴町六歩三厘四毛役

同 下内町十歩役片町五歩壹厘役

同 給人町五歩壹厘役中之口町二歩八厘役

同 元米屋町五歩壹厘役濱町貳歩八厘役

同 鷹町貳分六厘役外野町壹歩三厘役

同 新片町三歩

一米屋町組惣歩高千六百〇五歩貳厘壹毛四拂貳五但一ヶ年壹歩ニ付錢八百文取立

一壹軒屋敷米屋町十歩役八軒町八歩四厘役

同 山王堂町七歩役荒瀬町五歩八厘役

同 近江町五歩八厘役筑後町四歩八厘役

一酒田町惣歩數七千三百四十四歩七厘貳毛貳拂ノ五

但壹ヶ年壹歩ニ付錢壹貫五百文取立

一壹軒屋敷上下本町十歩役秋田町七歩五厘役

同 船場町四歩役櫻小路七歩五厘役

同 出町五歩役下小路七歩五厘役

同	上小路七步五厘役	同	上下荒町七步五厘役
同	上下臺町三步役	同	今町三步五厘役
同	傳馬町十步役	同	寺町四步五厘役
同	上下内匠町六步役	同	上下中町七步五厘役
同	大工町七步五厘役	同	桶屋町三步役
同	鍛冶町三步役	同	檜物町三步役
同	十王堂町三步役	同	肴町五步役
同	上袋小路四步役	同	稻荷小路五步役
同	山椒小路五步役	同	染屋小路五步役
同	御宿小路五步役	同	中袋小路四步役
同	利右衛門小路五步役	同	下袋小路四步役

外ニ酒田組新町歩高五百八十貳文四厘六毛
但一ヶ年壹歩ニ付錢五百文取立

右壹軒屋敷ト唱候ハ間口四間位ヨリ五間位迄奥行貳拾間位ヨリ貳拾八九間位迄
御座候尤町々家々ニテ少々宛不同御座候

一雜用錢ハ年々正遣勘定仕過之節割返シ不仕翌年之取立ニ差繼仕拂仕來候
一雜用錢之義銘々より取立候外僅百貫文餘之入錢有御座候別紙ニテ奉入貴覽候
以上

明治六年二月

戸長

○町字

現今酒田町ハ六十大字ニ分レ其大字ハ往時獨立ノ町名ナリ名義沿革ハ幸ニ「明
曆酒田大繪圖及書入」ノ存スルアリテ其大略ヲ徴シ得ヘシ此圖ハ明曆元年ヨリ翌
一二年五月二日○同月同日酒田大災アリ市街ノ大半焦土トナレリマテノ間ヲ以テ成リ本ト年寄加賀屋與助ノ所藏
ニシテ坂尾甚平カ大泉叢誌ニモ收メラレ其卷首ニ

酒田町年寄加賀屋與助所持之明曆年中酒田古繪圖の中に町々由來の義書入有
之大繪圖なり大繪圖ハ廿ヶ一ニ縮め叢誌圖部に入れ書入をこゝに記す觀る人
繪圖を合せ見るヘシ

ト見ユルモノナリ所謂書入ハ往古ヨリ文政間ニ於ケル酒田町ノ傳説及ヒ古文書ヲ
注記シ事皆據アリ實ニ酒田ノ爲メニハ唯一ノ寶典ト稱スヘキモノナリ但類本三ア
リ一ハ「酒田御町三組古控並町割濫觴等記」下内町元肝煎藤塚又右衛門藏二ハ内町組元大庄屋佐竹
彌右衛門所藏ノ「錯薪編」ト題スルモノ三ハ編者所藏ノ記錄但表題ヲ逸セリニシテ「町割濫
觴等記」ノ異本ト見做スヘキモノ即チ是ナリ今此三書ヲ本トシ旁ラ他ノ記錄文書
ヲ參ヘ各大字ノ事歴ヲ述ヘ社寺舊跡人物等ハ各字ノ下ニ掲ケ閱覽ニ便ナラシム

内

町

上下アリ創始詳カナラス酒田城惣曲輪ソウゾル即チ内ノ民居ナルヲ以テ町名

トナス明暦ノ頃既ニ戸數七十六アリ天和三年巡見使阿倍入之丞調書ニ内町三丁半

同横小路半丁此家數八十四軒人數六百十二人内男三百廿二人 同女二百九十二人ト見エ當時未タ上

下ノ名稱ナカリシヲ貞享二年ニ至リ上下二町ニ分ルツキヌキ突抜ハ寛永十五年ヨリ正保

二年マテノ間ヲ以テ成レリ其外部ヲ突抜キテ通路トナセルニ依リ之レニ名ク庄

内昔物語附録ニ據ルニ五十年前享保年中ヨリニハ突抜通りニ門アリシト云ヘリ

(明暦大繪圖書入) 内町六七十軒此内町の内突抜と申處有之寛永十五寅年より正保二

酉年迄八ヶ年之内家作出申候天和調書ニ所 謂横小路ナリ貞享三年より上下内町と唱○來○申候此四字三組右

控ニハ「相分リ申候」ニ作レリ

當處ノ裏肴町ヨリ鍛冶町ニ亘リ壘濠アリ是レ酒田城外郭ノ要害タリ明治二年酒

田民政局ヨリ埋立ヲ命セラレ宅地トナリシモ今尙其形跡ヲ存セリ

(野附氏御用留) 明治二年十一月十八日左之通

内町西側通肴町上本町突抜

内吉物言附録... (明曆大繪圖書入) 内町六十 此内町の内突抜と申處有之寛永十五寅年より正保二酉年迄八ヶ年之内家作出申候 ○天和調書ニ所 貞享三年より上下内町と唱來申候 此四字控ニハ相分り申候ニ作レリ

當處ノ裏肴町ヨリ鍛冶町ニ亘リ壘濠アリ是レ酒田城外郭ノ要害タリ明治二年酒田民政局ヨリ埋立ヲ命セラレ宅地トナリシモ今尙其形跡ヲ存セリ

(野附氏御用留) 明治二年十一月十八日左之通 内町西側通肴町上本町突抜



御座三十一間
御座三十二間
御座三十三間
御座三十四間
御座三十五間
御座三十六間
御座三十七間
御座三十八間
御座三十九間
御座四十間

御座五間
御座六間
御座七間
御座八間
御座九間
御座十間

御座十一間
御座十二間
御座十三間
御座十四間
御座十五間
御座十六間

御座十七間
御座十八間
御座十九間
御座二十間
御座二十一間
御座二十二間

御座二十三間
御座二十四間
御座二十五間
御座二十六間
御座二十七間
御座二十八間

御座二十九間
御座三十間
御座三十一間
御座三十二間
御座三十三間
御座三十四間

山王別當出伏

東二十間

藏師町東路中四間尺長五十八間
屋敷四十九間

藏師町西路中四間三尺
屋敷三十四間

片平町長七十三間
屋敷十六軒

下藏
廣屋敷
五十二間

表十間

下藏
廣屋敷
五十二間

漆屋小路
中四間三尺

御座五間
御座六間
御座七間
御座八間
御座九間
御座十間

御座十一間
御座十二間
御座十三間
御座十四間
御座十五間
御座十六間

御座十七間
御座十八間
御座十九間
御座二十間
御座二十一間
御座二十二間

有藏

御座二十三間
御座二十四間
御座二十五間
御座二十六間
御座二十七間
御座二十八間

山居鳴

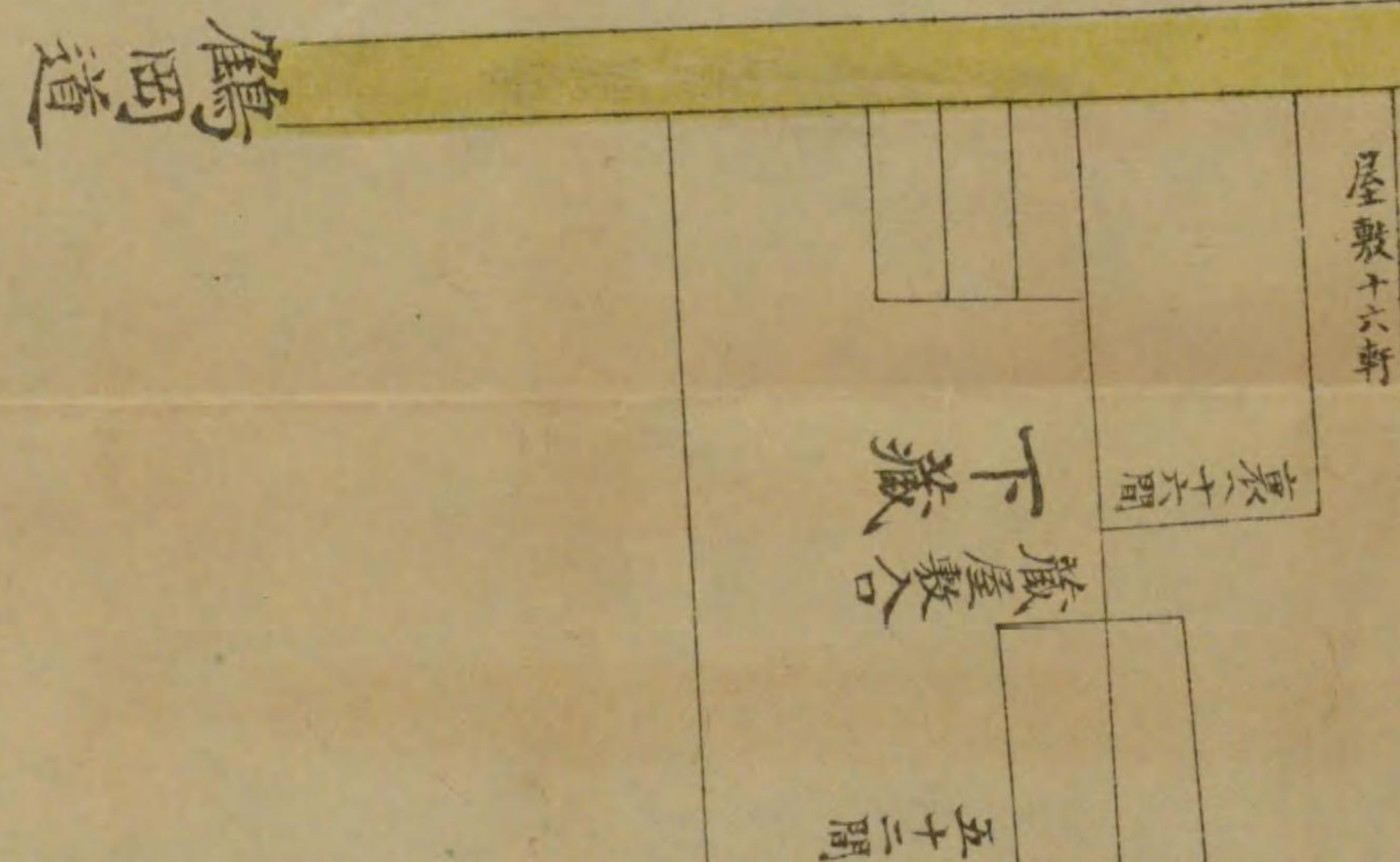
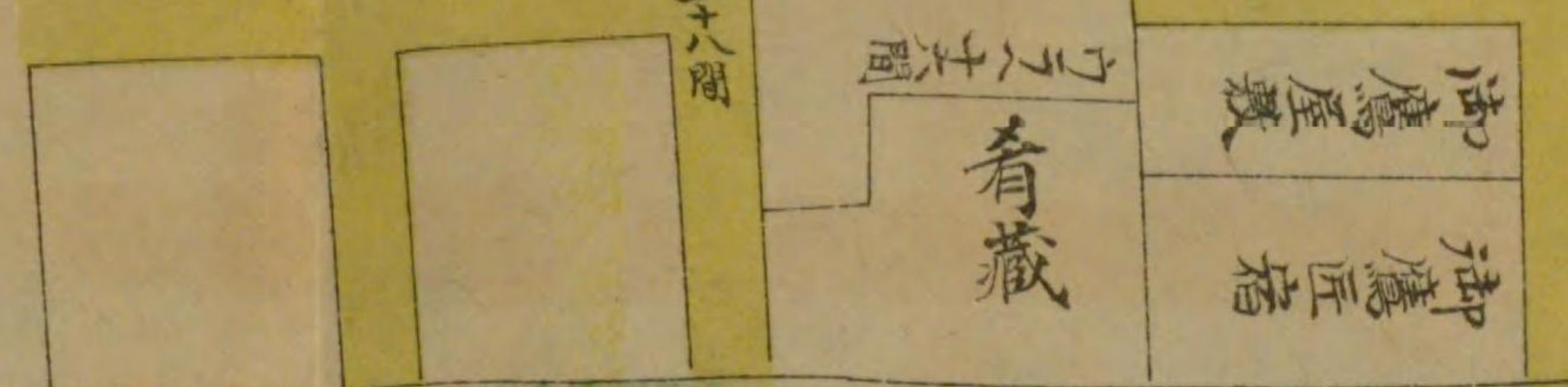
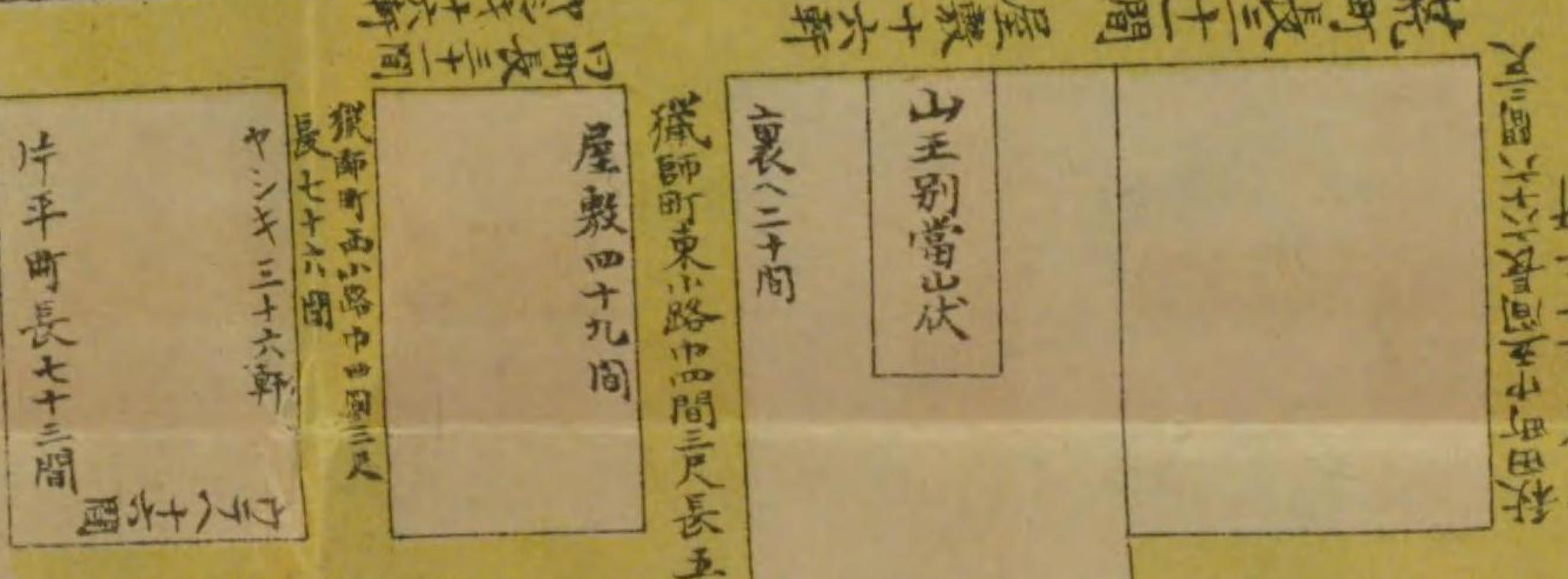
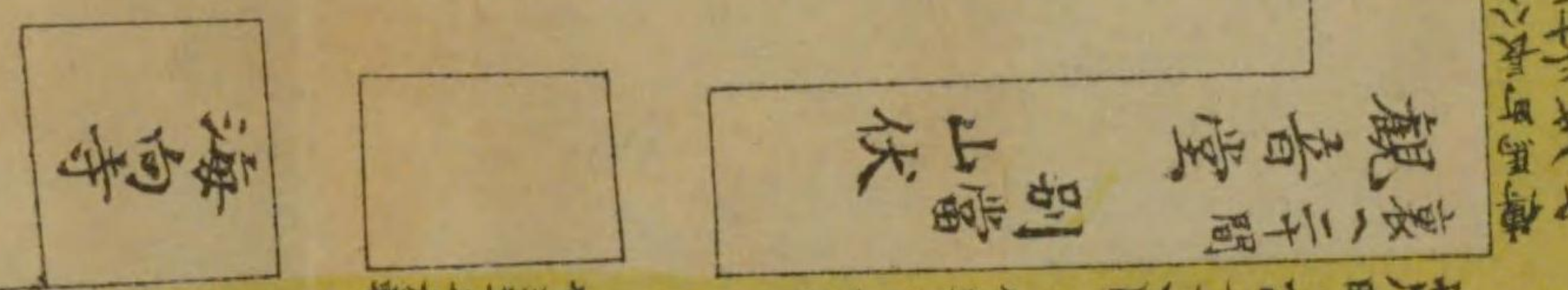
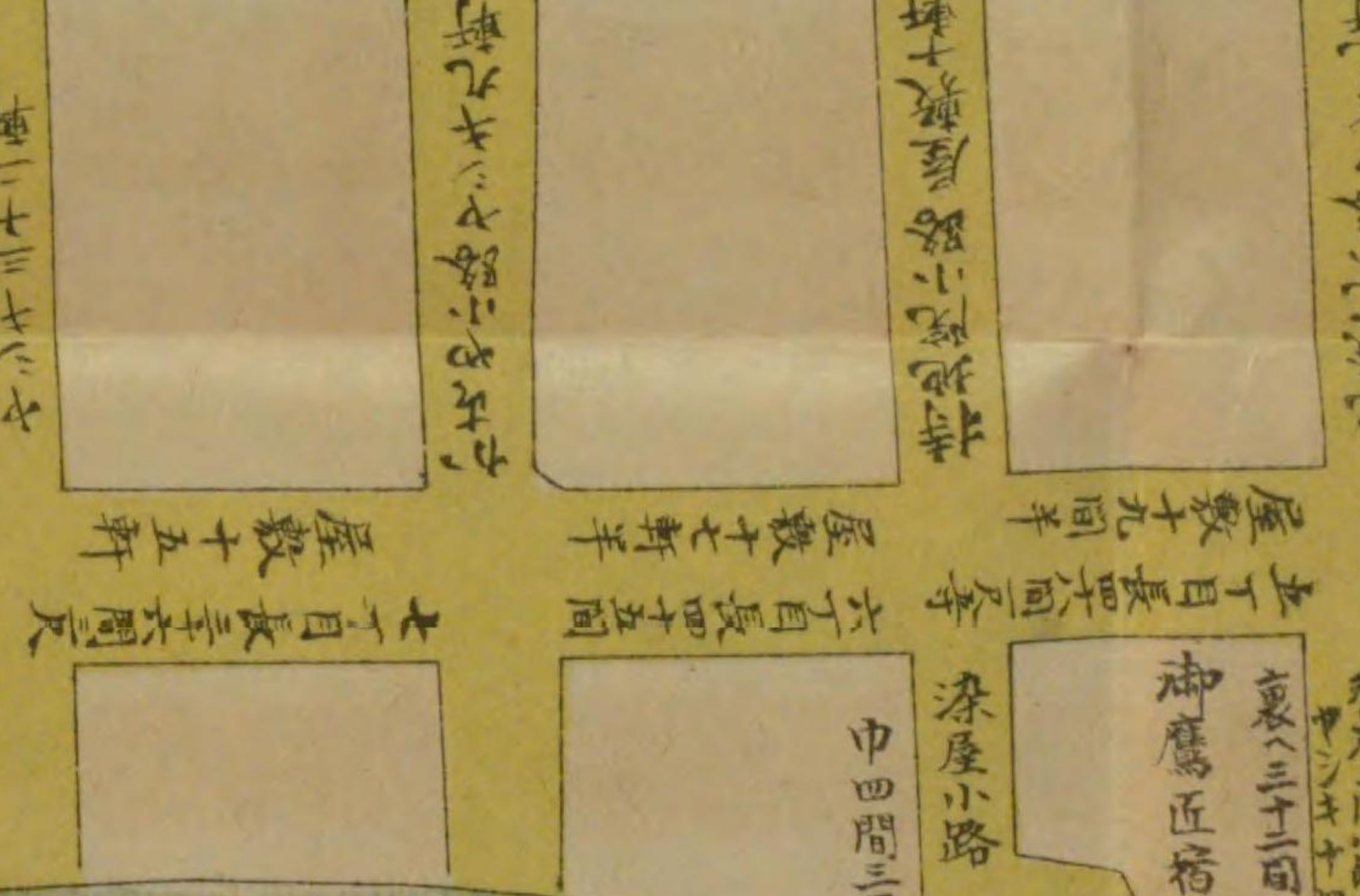
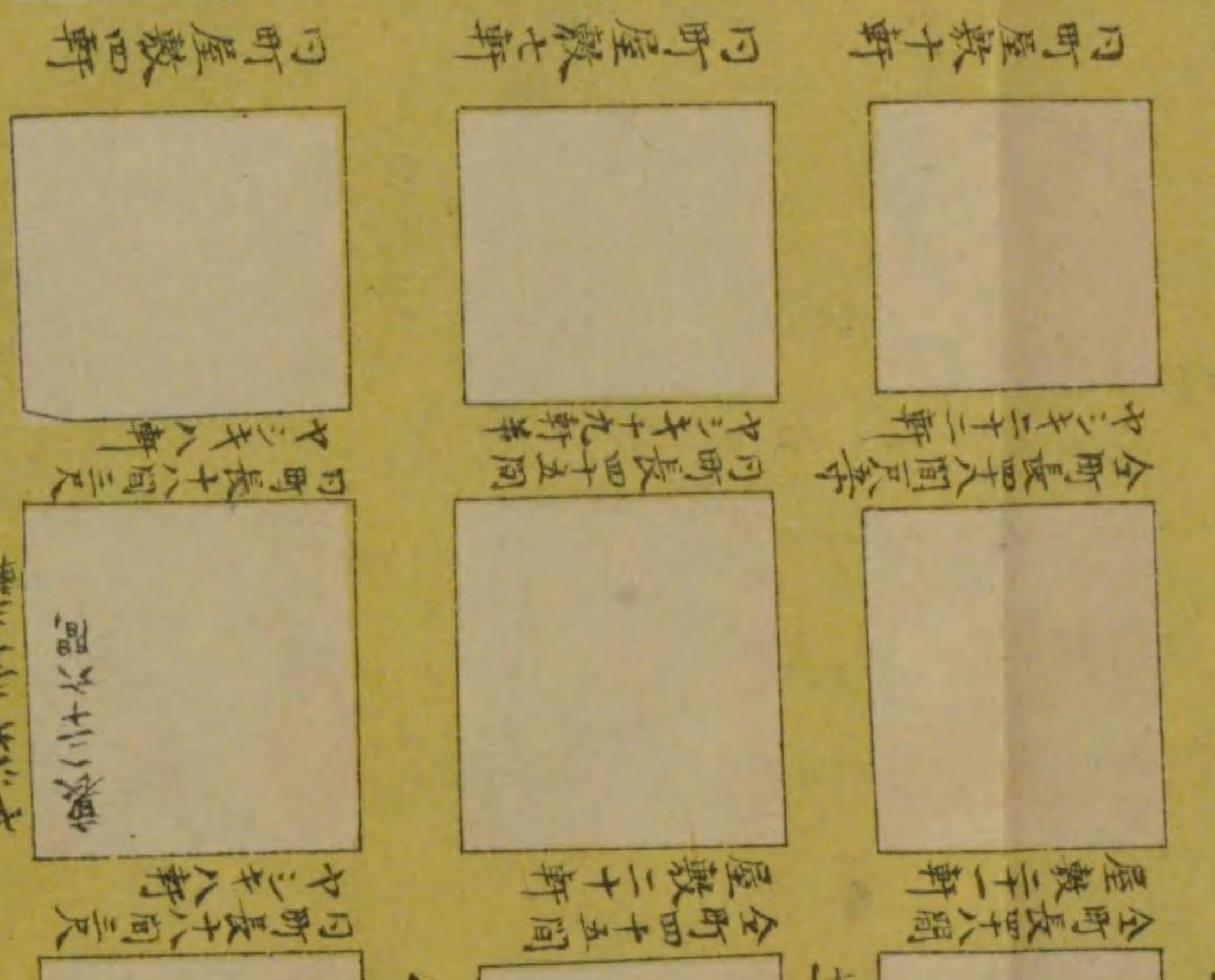
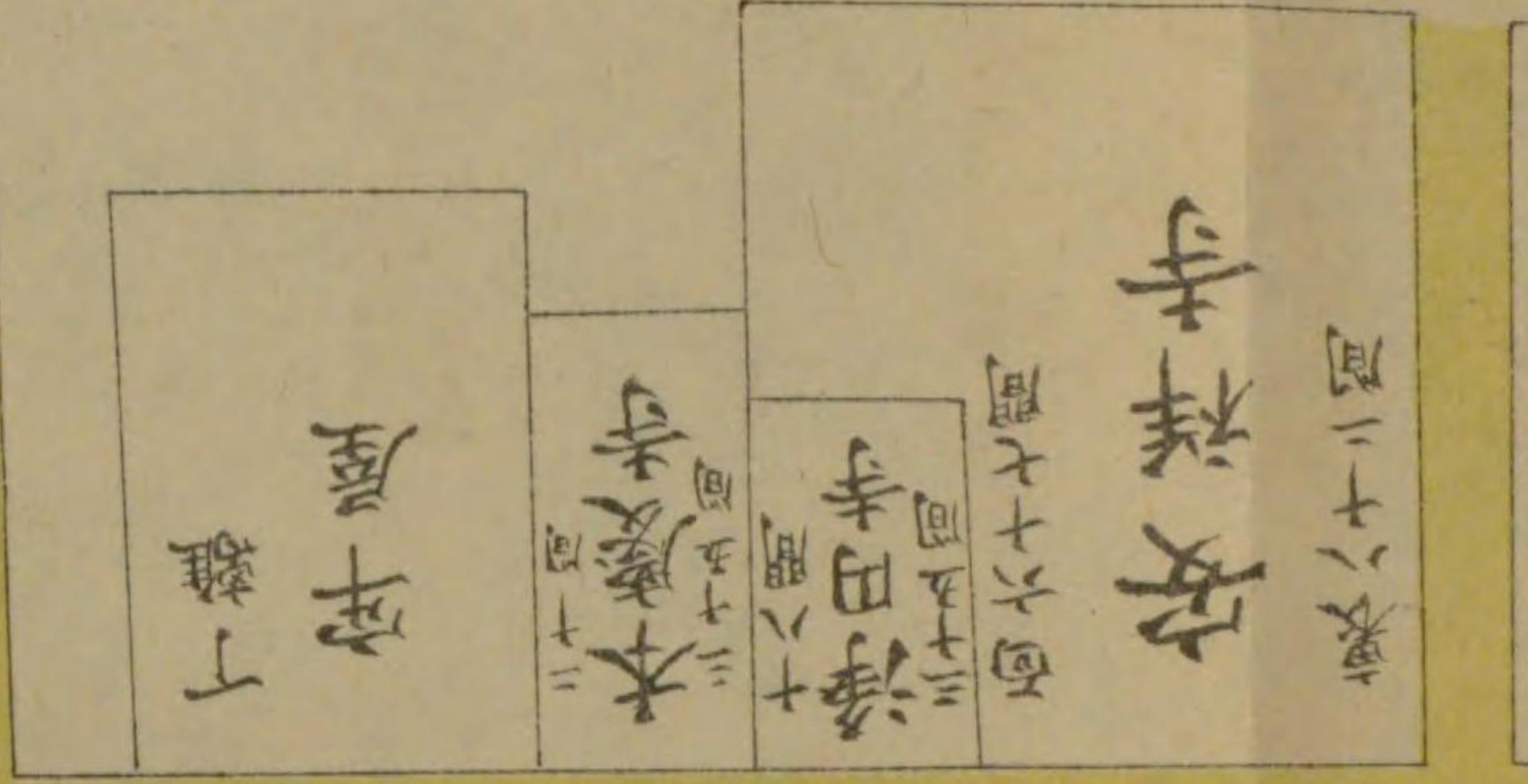
西

鶴岡道

北
三十四町四丁目

吹浦道

砂山



鶴岡道

肴町通堀先受地申付候間望の者申立埋立可申候

巳十一月

十二月五日七日ノ肴町内町地先堀地理立願出候ものへ銘々被相渡本山勝之進鈴木政吉出役いたす

上内町より下内町裏地先埋地丈之場處五ヶ年諸懸リ相除候ニ付願主申合火防之爲井戸三ヶ處堀建可申事

午二月廿日

市 政 方

成就院門址 上内町ヨリ新井田藏前へノ入口ニアリ往時龜ヶ崎八幡別當法光

院其東側ニ住セリ明曆繪圖參照スヘシ法光院ハ即チ成就院ナリ故ニ字ス事八幡神社ノ下ニ詳カナリ

町奉行所址 上内町稻葉神社ノ南ニアリ現今精米會社ニ隣レル畑地是ナリ最

上時代川北三奉行ノ一人高橋伊賀コレニ住ス酒井家入部ニ至リ舊ニ仍リ市尹ヲ

置キ町政ヲ司ラシム當時「御町代官」ト稱セシヲ寛永中「御町奉行」ト改ム

(明曆大繪圖書入)御町奉行屋敷 最上家領分之時川北三奉行之内高橋伊賀守住宅之由元和八年戌十月御入國後御代官屋敷ぞ唱云々

元和八年新屋五右衛門ヨリ代々ノ奉行コ、ニ住シ石原友大夫在勤中明治維新ト

ナリ同二年三月廢セラル

(御町奉行代々控 米屋町元小
走高橋菜蔵)

新屋五右衛門 石五百 元和八戌年御入國之節暫御勤被成候元和九亥年八月酒田御

町口被成候

勝木太左衛門 石三百 元和八戌年より御勤被成候年數相分り不申候へ共寛永六巳

年六月二日三町諸役並人足割合之義申渡候

阿倍五郎左衛門 石六百 勝木様御交代之年相分り不申候寛永九申年迄御勤メ

水野市兵衛 石三百 寛永九申年より同十五寅年迄七ケ年御勤メ被成候

石原孫左衛門 石三百 寛永十五寅年より正保二酉年迄八ケ年御勤メ

乙坂六左衛門 石三百 正保二酉年より寛文三卯年迄十九年御勤被成云云

成澤彦右衛門 石三百 寛文三年卯年より同九酉年迄七ケ年御勤云云

中臺式右衛門 石三百五 寛文九酉年十二月より延寶元丑年迄五ケ年御勤云云

杉山市兵衛 石三百石江戸
御元ノニ而 延寶元丑年九月江戸表ニ而被仰付十月交代三ケ年御勤

被成同三卯年御免奉願候

山口三郎右衛門 石二百五 延寶三年卯七月より貞享二丑年十月迄十一ケ年御勤云

云尤最初傳右衛門様と申後三郎右衛門と改名仕候

鱸 角兵衛 石三百 貞享二丑年十月より元祿八年亥十月迄十一ケ年御勤被成同

年御郡代御役替被仰付候

關 甚大夫 石二百石内五
十石役料 元祿八年亥十月廿五日交代同十二年辰十一月迄六ケ年

御勤被成候

歸山森右衛門 同上 元祿十二辰年十一月より寶永二年酉正月迄六ケ年御勤被成

御普請奉行へ御役替被仰付候 ○野附氏御用留ニハ元祿十三年十一月十
一日より寶永二年酉二月十七日迄トアリ

山田四郎左衛門 石二百 寶永二年酉正月より ○野附氏御用留ニハ
二月廿七日トアリ 正徳元年卯二月迄 ○同上
二月

十一日
ト見ユ 七ケ年御勤被成候

白石茂左衛門 同上 正徳元年卯二月より享保二年酉九月迄七ケ年御勤メ

坂尾甚兵衛 石二百石内五
十石御役料 享保二年酉九月より同六年丑五月迄五ケ年御勤被成候

加賀山平助 同上 享保六年丑五月十四日より御勤被成候處同八年卯九月十日

山形一件ニ付御前より御不審之義有之候ニ付遠慮被仰付岡田九右衛門様當

分御役被仰付候云云享保九年辰二月十六日平助様遠慮被仰付候 ○野附氏御用留
ニ享保六五年五

月十四日より同十三年
申十月廿四日迄トアリ

山内三右衛門 ○筆の余ニ加賀山ト高橋トノ間ニ此人アリ野附氏御用留ニ享保

十三年十月廿四日より同十一月六日迄山内三右衛門仮役トアリ

高橋萬右衛門 二百石 享保十三年申十一月六日より被仰付同十八年丑十一月廿

日御城代所より被仰渡候ハ當夏中間屋出入之義ニ付取計方不宜候ニ付御役
御免之上五十石御取上遠慮被仰付候當分御役黒川主水様ハ被仰付

豊原多助 同上 享保十八年丑十一月より寛延三年午九月八日迄御勤メ被成候

中田七郎兵衛 二百石内五
十石役料 寛延三年午九月十六日御交代被成寶曆五年亥九月病氣ニ

付當分御役山本重次郎様平田代屋吉右衛門宅へ御宿右七郎兵衛様十一月五
日奉願御役御免被仰付候

山本重次郎 同上 寶曆五年亥十一月十六日御下翌十七日御役家へ御出被成候

同八年寅五月廿二日御病死被成候ニ付跡御役黒川隼太様同廿四日御元メ加

賀山仁八郎様當分御役直ニ御役家ハ御出八月廿九日迄御勤被成候

土屋渡留 同上 寶曆八年寅八月廿九日被仰付同十年辰八月出判之義ニ付私用

ハ遠慮被仰付候處七月八日中田七郎兵衛様當分御役被仰付平田代屋吉右衛
門宅へ御着同月廿八日土屋渡留様知行百五十石之内五十石被召上退役被仰

付候中田七郎兵衛様前日罷登候様被仰付翌廿九日御町奉行相勤候様被仰付

翌八月朔日御下リ被成出判掛リ合之者共ハ被仰渡之趣申達相濟同日又々鶴

岡ハ御登跡御用御物頭大熊三郎右衛門様へ被仰付候

中田七郎兵衛 同上 寶曆十年辰七月廿九日被仰付明和元年申三月三日御普請奉

行被仰付是迄之御役料ハ御加増ニ被成下候

金井男四郎 二百石 明和元年申三月三日被仰付同八年卯六月八日奉願御役御免

隱居被仰付候

富田 小 七 二百石内八
十石役料 明和八年卯六月八日被仰付安永四年未十一月松山御家老

被仰付候

堀 平大夫 二百石内五
十石役料 安永四年未十一月被仰付同九年子十二月御役料五十石御

加増ニ被成下天明六年午二月五日就御用江戸表ハ罷登候様被仰付同十九日

御出立被成候

加藤今右衛門 同上 天明六年午二月五日被仰付寛政元年酉十二月奉願御役御免

被仰付候

松平藤九郎 同上 寛政元年酉十二月廿五日被仰付同七年卯五月御病氣ニ付奉

願御役御免

加藤勘 作 同上 寛政七年卯五月廿二日代屋ハ御出同廿六日御役家ハ御引移

同九年巳十二月五日船方之義ニ付公私愼被仰付當分御役黒川權大夫様ハ被

仰付同十年午二月四日勘作様退役愼被仰付其後御免御元メ役ニ被仰付候

黒川權大夫二百石 寛政十年午二月四日當分御役同年三月廿九日御奉行被仰付

同十一年未十一月十日酒田御物頭ニ御役替被仰付

松宮儀八郎二百石内五
十石役料 寛政十一年未十一月十日被仰付享和二年戊正月廿五日御

郡代所ニ御役替被仰付候

中村 亘 理同上 享和二年戊正月廿五日被仰付同年五月十三日酒田御物頭ニ

御役替被仰付候

高田織右衛門二百石内八
十石役料 享和二年戊五月十三日被仰付文化九年申十一月廿九日御

元ニ御役替被仰付候

山中傳 大夫二百石内五
十石役料 文化九年申十一月廿九日被仰付文政二年迄御勤被成候

辻 新右衛門二百石 文政二年卯五月下旬被仰付文政十一子年迄十ヶ年ニ相成候

加藤伊右衛門二百石内五
十石役料 文政十一年子九月より天保五年午正月中病死被成候

小川渡大太二百石 天保五年午正月中齋藤半内宅ニ御着其後二月ニ御引移被成

候嘉永三年戊四月廿五日御普請奉行被仰付候當年迄十七ヶ年御勤被仰付候

阿部傳 大夫二百石内二
十石役料 嘉永三戌年四月廿八日上林勇右衛門宅ニ御着五月九日御

役家ニ御引移○以上御町
奉行代々控

金井國之助

石原友大夫

(野附氏御用留) 明治二年己三月四日

今四日民政局より呼出ニ付黒川一郎石原友大夫罷出候處太田衛太郎別紙二通被
相渡

當曲輪住居家中之義専ら御城御警衛之爲ニ相聞候へ共以來不及警衛且是迄數
十日市中へ兵隊宿陣ニ於てハ商業之者一同難澁ニ付旁以今度御家中屋敷へ宿
陣爲致及警備候間右住居御家中面々當月十日迄鶴岡ニ引移候様被相達候間各
其意を得早々取仕末可被致候此段御家中之面々乞可被申達候以上

三月四日

但此御沙汰ニ付十一日より十三日迄御城代所初御引移御組頭御物頭其外局
ニ致關係候役々殘ル尤モ御組頭御足輕ハ御雇ニ相成申候

酒井德之助家來

石原友大夫

當町役所川口役所共明十四日請取可申候最掛リ役ハ町役人とも當分是迄之通
出勤可有之此段申達候事

三月十三日

民政 局

今般町奉行被相止候ニ付不寄何事願出候筋有之候ハ、民政局へ可申立候右之
段未々ニ至迄不洩様可觸知者也

三月十五日

民 政 局

酒田町年寄

大庄屋

齋藤氏宅址 下内町西側ニアリ家傳ニ川北三奉行ノ一ナル齋藤筑後ノ後孫

ナリト云フモ記録ノ徵スヘキナシ元祿三年齋藤與右衛門淡路ノノ跡役ヲ命セラ

レ内町組大庄屋トナリ子孫相承ケ維新後ニ及ヘリ今退轉セリ

佐竹氏宅址 上内町東側ニアリ本ト三丁目氏ト稱ス最上時代ヨリ酒井家ニ

巨リ内町組々頭後チ大肝煎ト改ム即チ大庄屋ナリニ三丁目大炊アリテ齋藤淡路ト共ニ當組ヲ支配セ

リ大炊ノ消息詳カナラズ疑ラクハ佐竹氏ノ先人ナルヘシ正徳五年藩主上京ノ臺

命ヲ受ケ用金ヲ町在ニ課スルヤ三丁目彌右衛門爲メニ七十兩ヲ調達ス其金額ノ

多寡ニヨリ資力ヲ比較スルニ當時酒田第二流ノ有富ナリ野附氏御用留年月不詳佐竹氏

ト稱ス彌一右衛門ニ至リ勤功ニ依リ寛政四年内町組大庄屋格トナリ文化八年役

義出精ノ故ヲ以テ大庄屋ヲ命セラレ○同書所收佐竹氏勤書子孫相承ケ維新後ニ及フ今退轉セ

須田氏宅址 下内町西側ニアリ出ツル所ヲ詳カニセス須田五郎右衛門ナル

モノ天保二年内町組長人トナリ同三年金五百兩献納ノ賞トシテ俸五口ヲ賜ハリ

同六年御用出精ノ故ヲ以テ内町組大庄屋格ニ補シ俸二口ヲ加ヘラレ同九年役儀

精勤貧民救助ノ篤志ニ依リ同組大庄屋家ニ命セラル子孫之ヲ襲ヒ維新後ニ至レ

リ同上今退轉ス

淡路小路 先代組頭齋藤淡路コ、ニ住ス故ニ名ク享保以後數々火災ニ罹ル

ハ「淡」字ノ二火ニ比フノ致ス所ナリトシ私ニ青渡小路ト稱セリト明曆ノ頃九戸

ノミナリシヲ天和三年ニ至リ十九戸トナレリ同年巡見使調書

(明曆大繪圖書入)淡路小路軒九此小路西の方上内町二丁目東側南角屋敷共先不相

知候得共天正文祿慶長之頃齋藤淡路住居いたし内町組組頭役相勤右同人宅の脇

小路故淡路小路と唱來候處享保以來右小路より度々出火ニ逢候淡ノ字ハ火ニツ

書候故度々の出火に候間青渡小路と改候事町内の者共私之申合候而唱來候乍恐御水帳其外表立候書ものハ今以淡路小路と書來申候

齋藤氏 出ツル所ヲ詳カニセス蓋地侍ナリ齋藤淡路ハ天正ヨリ元和ニ亘リ組頭トシテ内町組ヲ支配シ元和九年十二月歿ス子孫相承ケ四代ノ孫與右衛門ニ至リ事ニ坐シ逐放セラレ正徳二年歿ス後裔外野町ニ肝煎役タリ事ノ始末「齋藤淡路書付」ト題スルモノニ詳カナリ北書本ト酒田町大庄屋栗林氏所藏ナリシヲ嘉永四年野附氏寫置カラレタルモノニシテ原書既ニ散逸シ類本ナキヲ以テ全文ヲ左ニ掲ケ參考ニ供ス

(齋藤淡路書付)

一當時龜ヶ崎大庄屋ト申御役往古ハ齋藤淡路數代相勤最上家ニ屬候節モ右淡路相勤候元和三年之頃書付ニモ相見申候其後元和八年戌十月十九日御入國之後モ淡路家齋藤與左衛門ト相成代々相勤居候處元祿年中不調法ノ筋有之退役被仰付我々先祖同役ニテ永々相勤來候ニ付先役淡路ヨリ與左衛門代々譯後年ニ至心得之爲古記相糺明細書留置申候猶此外ニモ儘成事見當リ候節ハ末々ニモ

書加置可申事

内町元造料銀子之事

合拾貳匁者

右銀子請取則差上候也

元和二年分組
小日記其節預置

齋藤 筑後 印
高橋 伊賀 印
寺内 近江

元和三年巳卯月七日

淡路とのへ

一右筑後伊賀近江之三士ハ最上家ニテ當國ヲ領シ給ヒシ時川北三奉行ト唱候由申傳候伊賀住居ノ屋敷ハ今ノ御町奉行屋敷ノ由筑後近江ノ二士住居ノ屋敷ハ今ニ其名ヲ止メテ筑後町近江町ト相唱候由古來より申傳候或ハ二士ノ與力ノ人々住居致シ候ト申説モ有之候へ共其事ハ不詳候

一右淡路ト宛名有之候ハ齋藤淡路ト申候テ龜ヶ崎内町組大庄屋ト當時相唱候御役ヲ數代相勤候家ニテ其節住居ノ屋敷ハ淡路小路一圓之由申傳候當時ニ至リ御水帳其外書物ニモ右屋敷ノ事ハ相分リ不申候へ共淡路小路ノ町名ニ相殘リ居候得ハ其證有之様ニモ被存候
一元和八月十月十九日御入國其節モ淡路相勤罷在翌元和九亥年十二月廿一日病

死いたし候

一淡路忰齋藤與右衛門跡役相勤罷在寛永六巳年御町奉行勝木太左衛門殿ヨリ被仰渡候書付在

定諸役人足割之事

一酒田三町人足百人出し候時ハ

内

一七十五人ハ

酒田町

同村繼ノ日數ハ廿三日

一拾八人七分半

内町

同村繼ノ日數五日

一六人貳分半

米屋町

同村繼ノ日數ハ二日

一金銀諸役等出候事モ右人足ノ高ヲ以テ其積ニ出可申モノ也

巳六月二日

勝木太左衛門

内町中

與右衛門殿

此與右衛門義正保元申年十二月廿一日病死仕候

一與右衛門忰モ齋藤與右衛門ト相改跡役相勤申候天和元二ノ頃隠居いたし候様ニ相見申候

一與右衛門忰齋藤喜四郎跡役相勤天和二年ノ書付ニ右名前相見其後モ又與右衛門ト改右いたし候哉貞享三年寅二月御水帳表屋敷名前齋藤與右衛門ト有之候内町淡路小路入口北ノ方角屋敷ニテ表口八間壹尺五寸裏行貳拾貳間五尺ト相見候翌貞享四年卯四月十三日御城代所へ指上候祭禮道具拜借目錄ニモ齋藤與右衛門ト有之候

一右之與右衛門義上内町市左衛門事ニ付不慮之難事有之役義御取放之次第左之通

一扎指上申事

一内町市左衛門義荒瀬手代彌惣右衛門方ヨリ書替借申候節拙者ハ加判仕候節付拙者並兩親妻子鶴岡龜ヶ崎御城下御追放被仰付其上家財被下置難有仕合奉存候自今以後拙者不及申上兩親妻子トモ兩御城下出入仕申間敷候若出入仕候ハ、何様ノ曲事ニモ可仰付候爲其一扎指上申候以上

手錠罷在候ニ付印形不仕候

午十月廿一日

齋藤與右衛門

鱧 角兵衛殿 五十嵐久右衛門殿
 鈴木安兵衛殿 尾形惣右衛門殿
 平山左衛門殿 五十嵐六郎兵衛殿
 佐藤清右衛門殿 小川治五兵衛殿
 伊藤伊太夫殿

此午ノ十一月廿一日ト在之候ハ元祿三ノ午年ト相見申候
 一 扎指上申事

一 齋藤與右衛門義龜ケ崎鶴ケ岡御城下兩親妻子共御追放被仰付其上家財共被下置難有仕合奉存候自今以後右兩所ニ與右衛門兩親妻子共出入爲致申間敷候若相背兩所出入仕候ハ、當人ハ不及申上親類共迄何様ノ曲事ニモ可仰付候爲後日連判手形指上申候以上

但孫右衛門ハ米屋町池田氏ノ先役

午十月十一日

岩堀孫右衛門
 同 傳十郎
 會兵衛ハ内町組長人也 齋藤會兵衛
 遠藤吉右衛門
 星崎佐治右衛門
 觀音寺屋彌左衛門
 右九人御名前
 右ニ付與右衛門家内荒瀬郷東野村へ罷越住宅いたし候

一市左衛門親類ヨリ差出候書付

一 扎指上申事

一 内町市左衛門母妻子御欠所ニ被付候ニ付親類ノ者共へ被下置度申上候處奉願候通被下置難有仕合奉存候身代金錢ハ被仰付次第早速指上可申候以上

午十月

前 九人

彌右衛門印惣右衛門
 彌惣兵衛 又右衛門
 九右衛門 太兵衛
 五兵衛

一 扎差上申事

一 内町市左衛門世傳當年三ツニ罷成男子同罪ニ可被仰付所・御慈悲命御助被遊難有仕合奉存候右之男子十二罷成候刻申上出家仕可申由奉得貴意候其内病死仕候ハ、其段可申上候勿論出家仕候節ハ御役所迄可申上候則親類共預置申候爲其一扎指上申候以上

午十月

前 九人

前 八人

一 扎差上申事

一内町長治郎市左衛門養子兄分ニテ跡文言與右衛門親類共同様

午十月

前八人

鱸角兵衛殿

一右市右衛門ハ三丁目彌右衛門末家ニテ其頃ノ彌右衛門弟ニテ上内町ニ別家いたし候者ノ由右親類八人ノ内彌右衛門彌惣兵衛ト三人名前在之彌右衛門印形町家並ミノ印形共相見不申候追テ彌右衛門代々ノ印形ヲ見候上ニハ確ト相分リ可申候又市右衛門ハ三丁目彌右衛門弟ノ義故市右衛門子供預リ置其後出家爲致親市右衛門菩提ノ爲ニ松山念佛堂造立致候共又ハ在來候ヲ母話いたし候共申傳候

一市左衛門ハ齋藤與右衛門弟ニテ別家いたし居與右衛門他行ノ節右証文へ印形いたし遣候由申説モ有之候得共書物等ニモ無之不相分候右印形いたし候義母取計與右衛門不存候候事ニいたし候而モ市左衛門厚親類ニモ無之ハ母印形致間敷様ニモ被考候得共與右衛門親類六人之内壹人モ市左衛門親類八人ノ内ニ相見不申甚不審ニ相見申候

一與右衛門東野村ニ罷在候處元祿九年子四月廿八日與右衛門親病死いたし候右與右衛門義ハ正徳二年辰九月十一日病死いたし候

一與右衛門傳兵衛御町住居御免ニモ候哉享保七年寅五月内町組鷹町北側西角ヨリ三軒目當時たばこや龜之助屋敷ニ引移其後夜廻リト申役相勤候哉享保十六年之御水帳ニ夜廻傳兵衛名前相見候右傳兵衛同十八年丑七月十五日病死いたし候

一右傳新六儀跡役引繼夜廻相勤候様相見候享保十九寅九月稻荷堂遷宮ノ節諸役人連名ノ末ニ新六相見候寶曆二申十二月鷹町稻荷屋敷前西側貳軒目久三郎ト申者屋敷ヲ求引移同十三未七月十日外野町肝煎又右衛門跡役相勤傳兵衛ト改名いたし候安永八年亥二月外野町當時ノ屋敷引越天明五年巳三月七十八才ニテ御役休被仰付寛政元酉一月十八日八十二才ニテ病死いたし候

一傳兵衛傳與右衛門天明元丑年父子勤被仰付同五年肝煎本役被仰付候親傳兵衛長々ノ病中困究ノ内ニテ夫婦共取扱宜敷趣町内ヨリ申立夫婦共御稱譽被成下右與右衛門寛政十一未十一月十九日病死いたし候其節女子斗ニテ跡肝煎役奉願兼罷在候當時躰養子ニ而家名而已相立候事ニ御座候 文化十三丙子年改右ハ嘉永四年亥十二月栗林新右衛門殿より借用寫し置者也

片町、給人町

片町ハ西側ニノミ人家アリシヲ以テ名ケラル明曆ノ頃既ニ

七十二戸ヲ有セリ後チ東側ニモ人家出テシカハ延寶六年割キテ一町トナシ之ヲ

給人町ト稱ス是レ其地本ト給人ノ宅址ナリシヲ以テナリ然ルニ片町ノ東側ハ倉廩ニ接近シ延燒ノ憂アルヲ以テ享保十一年命シテ之ヲ筑後町外ニ移轉セシム即チ今ノ新片町是ナリ是ニ於テ再ヒ片側ノ町家タリシヲ維新後其址ニ人家出テ今日ノ觀ヲナスニ至レリ

(明曆大繪圖書入) 片町^{三十七軒} 此片町之内御給人宅地古來有之候由ニテ延寶六巳年迄之内町名ニいたし給人町相分リ申候跡上片町と唱來申候右片町之内東側御藏近所ニ而爲火防當時新片町と唱候處ハ享保十一年引地敷仰付

(天和三年巡見使調書) 片町一丁半此家五十四軒……給人町一丁此家數四十一軒
上藏ト新井田藏 創始詳カナラズ本ト板藏ナリシヲ萬治三年以後火防ノ爲メ土藏ニ改造セリ

(鷄肋編) 萬治三年六月廿日

覺

一鶴岡酒田兩所ノ米藏百姓作り候ニ付龜相成ル由ニ候類火などに燒失之時大分可爲失墜候間此方より申付候而成共火之用心能場處致吟味塗屋ニ致可然事又此之外在々當座納候藏ニ而モ塲處詮議いたしぬり屋ニ作り可申事

上藏ハ川北三郷ノ租米ヲ藏ムル所ニシテ下藏ノ對稱ナリ下藏ハ今ノ出町端日和山ノ邊字土家山ニアリテ丸岡御料大山京田中川櫛引等ノ租米ヲ收メシヲ明曆二年燒失ノ後寬文七年之ヲ筑後町外ニ移シ狩川藏四棟ノミ新井田ノ内館野權吉宅址ニ移シタリ然ルニ當時最上川屈曲シ洪水毎ニ酒田城内及ヒ上藏新井田ニ氾濫ノ憂アリシヲ以テ寬文十年廣野谷地ノ内幅廿間長サ廿八町余ノ新川ヲ開鑿シ流勢ヲ南ニ導キ其害ヲ避ケシカハ寬文十二年新井田字六ツ目ニ住セル同心衆ニ替地立退ヲ命シ筑後町外ノ下藏ヲコ、ニ移シ建テ新井田藏ト稱セリ

(明曆大繪圖書入) 上藏ハ遊佐荒瀬平田右三郷御米此處之藏ニ入テ上藏と唱其後米屋町組堀切ニ有之候下藏之分寬文十二年新井田當時六ツ目と唱候處ハ御引移ニ相成諸組御米右三處之藏ニ入申候

新井田貳拾軒 此新井田廿軒之内東方御家中御給人宅地と相見え北中之口川端町之方御同心御船番人之宅地ニ御座候濱土家山ニ御座候丸岡松山大山中川櫛引京田御藏濱之町外レ堀切と申處ハ寬文七未年御引移被仰付其節狩川藏四ツハ館野權吉殿屋敷ハ御建被成候と有之

參照

(酒田三組古控) 下藏明曆之繪圖者當時出町突當リ日和山之邊也此處土冢山と申丸岡御料大山京田中川櫛引右御藏此處ニ建置候而下藏と唱申候皆雜藏ニ而明曆二申年五月二日夜燒失致候ニ付其後寛文七未年米屋町組堀切へ御引移シ相成狩川藏計新井田之内館野權吉殿屋敷ニ御建有之候
 (野附氏書留) 獵師町外レ土冢山ニ櫛引京田中川丸岡共四處御藏萱葺ニ而有之明曆二年申五月二日月突清十郎方出火いたし右御藏十斗不殘燒失夫より寛文七年未年右之御藏同年四月筑後町堀切ニ御引四ヶ處御藏立也享保四年迄五十三年成

其後追々御家中御給人引地被仰付候様相見候先年より度々御城内並上之御藏へ水押入候ニ付廣野谷地之内巾廿間長サ廿八町余寛文十戌年新川ニ被仰付成就いたし候後御城内者勿論上之御藏ハ水押入不申候間堀切之御藏不殘寛文十二子年新井田ハ御引移ニ御成御同心八人之内村井與一右衛門渡邊藤右衛門相場治右衛門村上喜大夫高橋葛右衛門右五人之宅地今度御藏地ニ相成候ニ付三町之内明屋敷有之候處ハ替地被下置相殘候新關長右衛門杉原新右衛門小笠原佐次右衛門三人之宅地御藏へかゝはらず候ニ付住宅いたし居候處御藏近處ニ爲火防町宅被仰付御船番人茂助斗罷在候様申傳候得共一説ニ右三人自分之勝手に御町方ハ引

移候共申傳候いつの頃ニ候哉相分不申候へ共新關儀兵衛寶永三年戌十月給人町屋敷相調有之候古來より新井田より中之口川端町へ通ひ道御座候處享保十一年○道相止ミ堀通ニ被仰付候様相見申候

爾後數十棟ノ倉廩簷ヲ連ネ俗ニいろは藏ト稱シ庄内ノ一壯觀タリ維新ノ際朝廷ニ收メラレ後チ幾沿革ヲ閱シ終ニ本間氏ノ有トナリシカ明治廿七年ノ震災ニ罹リ悉ク烏有ニ屬ス

中之口町 本ト中之口川端町ト稱ス龜ヶ崎城中之口ニ當レルヲ以テナリ明曆ノ頃十六戸ヲ有シ天和三年ニ至リ廿五戸トナル

(明曆大繪圖書入) かしばた町十六軒 此河岸端町古來城内中之口に有之趣を以天和二年迄の内中之口川端町と改唱來申候

(天和三年巡見使調書) 中之口川端一丁半家數二十五軒云云

近年内町ヨリ直チニ當町ニ達スル路ヲ開キ中之口橋ヲ經松嶺ニ至ル郡道トナセ

新町 元米屋町ヨリ淡路小路ニ達スル小路ナリ明曆圖ニ町名ヲ記セス天和

三年巡見使調書ニハ新町一丁家數十七軒トアリサレハ明曆後ノ町名ナルヘシ
山王堂町 明曆ノ頃戸數三十一ヲ有シ明曆天和三年ノ現數四十戸トナレリ

同年巡見調書 上日枝神社ノ舊記ニ據ルニ同社ハ最上時代ヨリ寛永十三年四月マテノ間

當處ニ在リ故ニ名ク事彼社ノ下ニ詳カナリ

松原地 址 明曆二年五月三日ノ火災ハ酒田ノ過半焦土トナリ當時未曾有ノ

椿事ト稱ス町奉行ノ乙坂六左衛門ノ創意ニテ山王堂町以西ヨリ本町中町ノ中間

ヲ貫キ秋田町ニ達スル間ニ巾三間ノ空地ヲ存シ松ヲ植シメ火防線トナス是レ松

原地ノ起原ナリ

(明曆圖付扎) 本町と中町と裏地之間一丁目より秋田町迄横三間程家不造明置一

尺斗之内外ニ小松を植付可申候其屋敷之主能根付候様入念うたて可申云云

(野附氏御用留) 明曆二年大火後爲火防植付地ニ被仰付面々居屋敷空地ニ差置松

原地と唱來候

一之口川端 明曆圖ニ所見ナシ天和三年巡見調書ニ一之口川端一丁半家數十

四軒トアリ

本米屋町 武藤時代ニ租米ヲ圍置キシ處ナリ故ニ名ク天正文祿ノ際新米屋

町出ツルニ及ヒ之ニ對シ本米屋町ト稱ス明曆ノ頃戸數二十四ヲ有シ天和三年ニ

至リ三十戸トナレリ

(明曆圖書入) 本米屋町四十軒 武藤家領分の節米指置候場處にて夫より家作出て米

屋町と唱來候處其後上杉家領分となり天正文祿の頃米屋町組出て新米屋町有之

候ニ付其頃より元米屋町と唱候趣申傳候

(天和三年巡見使調書) 本米屋町二丁家數三十軒

米屋町ト八軒町 一二新米屋町ト稱ス天正十八年ヨリ文祿ニ亘リ東禪寺城代

甘粕景繼在城ノ際米屋町西端ニ民家出テ町並トナリ從來ノ米屋町ニ對シ新米屋

町ト稱ス寛永元年町民禰津屋彦右衛門等相議リ當町東方ノ地面ヲ申請シ宅地ト

ナシ漸次家作アリテ新井田川岸ニ達シ悉ク町並トナレリ天和二年米屋町ヲ分チ

八軒町ヲ立テラル其地本ト最上時代川北三奉行ナル齋藤筑後力與力ノ宅址ニ屬

シ當初八軒ノ人家アリシニ因メルナリ明曆ノ頃米屋町ハ戸數六十五ヲ有セシカ

天和ニ至リ米屋町二丁四十九戸八軒町壹丁半五十戸トナル其川端横町ハ元祿三年九月佐藤次郎ナルモノ出願シ町並トナセルモノナリ

(明曆圖書入) 新米屋町六十軒 此米屋町之義者天正十八年○原書二十三年ニ作ル今酒田三組古控ニ據リテ訂正ス甘粕ノ城代タリシハ十八年ヨリ慶長二年マテノ 間ナルヲ以テナリ

より文祿年中迄之内上杉家領分之節甘粕備後守酒田城代之時西之方町並家作始リ其節遊佐荒瀬之米藏無之右町ニ而兩郷之米所作シテいたし候様被申付直ニ町名にいたし新米屋町と唱來米屋町組之始りと相見申候其後元和八戌年御入國之後寛永元子年右續東之方禰津屋彦右衛門頭取にて善右衛門孫右衛門七右衛門孫兵衛善兵衛右六人申合屋敷御願申上候處被下置御町並ニ相成リ追々川端迄家續申候最上家領分之節齋藤筑後守與力之宅地も有之合面家八軒有之を町名に致し米屋町之内より天和二戌年迄ノ内八軒町相分申候尤古來より川端迄通リ候處元祿三年九月廿五日佐藤次郎と申者奉願當時之通川岸端に曲リ町いたし候

(酒井家御土藏記録寫) 元祿三年午九月廿五日酒田米屋町之末八軒町より田原へ見通し申ニ付度々御訴訟申上候通付替候様子之繪圖並道付替ニ付屋敷替仕候佐藤次郎書付壹通 ○但目錄ノミニテ書類ナシ

(米屋町小走高橋源右衛門書留) 一米屋町之義者西之方ハ天正十三四年○是亦十八年ノ誤

リ上杉家之御領分ニ相成甘粕備後守殿酒田御城代之節新町出申候間遊佐荒瀬之米宿被申付其節より新米屋町と名附候越申傳罷在候右備後守殿文祿三年巳十月廿日平田郷荻島村に申達書名前相見へ候間當時酒屋彌助屋敷禰津屋彦左衛門居宅ニ而其外善右衛門七右衛門孫兵衛吉兵衛右六人之者共御入國三年日寛永元子年新家五右衛門様御町奉行御勤役之節奉願被下置候屋敷ニ而夫より追々御町並ニ罷成申候

一寛永元甲子年米屋町割餘リ之地面南北十二間東西四十四間也此時吉田四郎左衛門様檢地奉行ニ而御出被成右之地面禰津屋彦左衛門ト無役ニ而御預ケ被成候由其頃米屋町之久三郎先祖者彦左衛門へ久敷奉公相勤候故西之方へ家を持せ候間久三郎之裏續之地面ニ而南北十二間東西十八間之處掃持之爲久三郎に預ケ置申候禰津屋彦左衛門預リ之分南北十二間東西廿六間也

一寛永元子年御町奉行新家五右衛門様之御意ニ而末代ニ被下置候屋敷之者共六人なり
貳軒屋敷善右衛門下屋敷貳軒 貳軒屋敷孫右衛門下屋敷貳軒
貳軒屋敷七右衛門下屋敷貳軒 壹軒半孫右衛門坐頭屋敷
壹軒半吉兵衛

但是ハ子細御座候故半軒分リ町並ニ相成申候八軒町角也

貳軒屋敷彦左衛門下屋敷共被下置候

(明曆圖書入)會所○俗ニ座頭
屋敷ヲ云フ最上家領分之時遊佐荒瀬米藏無之右二郷より米持參之節米屋町ニ而諸作シユクいたし候其節之掛役人相詰候共去又川北三奉行相詰候共御入國御諸役人相詰候所とも申傳書物燒失候て申傳にて相分不申候明曆之火事後普請無之何年か米屋町孫兵衛と申者支配仕候處寛文十二子年ヨリ町内へ受取大肝煎遠山七右衛門支配仕年々三百文宛差出候處其後町内より申立筋有之其段御町奉行所へ申上候處貞享三年寅二月中先ッ池田吉兵衛の御預被仰付町内へ貸地仕年々五百文宛差出町内與内へ入申候右屋敷免無之無役地故其頃より世上座頭屋敷と唱申候元文二巳年七月禰津屋善兵衛長三郎兩人の無役地被成下御町火之用心之爲薪其外積物處ニ不致畑地ニ被仰付肝煎彌次兵衛の支配仕候様被仰付候右米屋町孫兵衛と有之者同人曾祖父最上家領分之時米屋町組頭役相勤候と云ふ祖父孫兵衛者御入國之頃組頭役五人之内也休役之譯左ニ記す

最上家領分之時ハ本町入口之堀より東ハ四分堀より西ハ六分ニ相定リ居候様ニ相見申候然處寛永六年己年米屋町住居之者彌右衛門喜助藤右衛門長左衛門彦左衛門と申者五人申合願之筋申立候事者米屋町小組之處ニ役人五人有之其上御町役四分六分割にてハ米屋町組難澁仕候ニ付役人五人之内四人退役一人にて相勤

候様被仰付被下置度旨度々歎出候へ共取上無之由にて不得止事右願人五人之内彦左衛門一人ハ願ニ付御入用取計之ため相殘リ外四人ハ同年二月朔日鶴ヶ岡の罷登柴谷武右衛門殿加藤甚十郎殿御屋敷の罷出度々御歎申候得共御取上無御座五月下旬迄逗留仕候所同月晦日柴谷武右衛門殿御屋敷より御呼出にて四人罷上候處御尋之筋有之御答申上候處明朝又々罷出候様被仰渡六月朔日罷出候處長々相詰不便ニ思召願之通米屋町五人之内三人退役二人ニ而末代相詰候様且又御役ハ是迄四分六分之處酒田町七分半内町米屋町組貳分半ニ御定被成候段被仰渡候爰元御町奉行勝木多左衛門殿の御狀壹通四人之者被成御渡候翌二日右四人歸宅其節御町方被仰渡御定書左之通

○定書ハ齊藤淡路書付ニモ載セラレマシ
ト異同アルニ依リコトニ掲ゲ參考ニ供ス

定諸役人足割之事

- 一酒田三町人足百人出候時ハ
- 一内七十五人 酒田町
- 一内十八人七分半 内町
- 一内六人貳分半 米屋町

内村次之日數ハ二日

一金銀諸役等出候も右人足高を以つもりに出可被申者也

六月二十日 勝木多左衛門 印

内町中

此與右衛門ハ齋藤淡路之伴與右衛門也此節ハ齋藤與右衛門一人に長人五人ノ内より一人ツ、立會御町方支配仕候

右同文言ニ而 寛永六年巳六月二日 勝木多左衛門 印

米屋町中

此書付米屋町斗有之者役人五人之内三人休役癩二人相勤者定リ不申候内ニ相見候其後岩畑孫右衛門遠山七右衛門兩人ハ肝煎之役名にて勤申候元禄年中より大庄屋之名目ニ相成申候

(米屋町根津屋彦左衛門書留)

此書ハ野附氏ノ所藏ニ係リ他ニ類本ナク願ル

古來ヨリ持傳候書付之寫

一御入部元和八年壬戌八月

一米屋町始ハ寛永元年甲子

一御町奉行新家五右衛門様御意ニ而屋敷末代ニ廣被候者六人

一軒屋敷 善右衛門 下屋敷二軒

一軒屋敷 孫右衛門 下屋敷二軒

同 七右衛門 同 二軒

壹軒半 孫兵衛 同坐頭屋敷

同 吉兵衛 是ハ子細御座候テ半軒わかり町並ニ罷成候ハ軒町角

二軒屋敷 彦左衛門

五右衛門様御意ニ彦左衛門義ハよろしき者ニテ町ニかさりにも成申候間末代二軒屋敷ニ居可申候下屋敷モとらせ可申候間届候様ニ被仰付候彦左衛門申上候ハ町並ニハ望無御座候間裏ノ屋敷ツ、きニテ被下度ト申上候其時幸割餘リノ地候間とらせ候と御意ニ御座候是ヨリ代々二軒屋敷ニテ壹軒ノ御町役歩ヲ指出シ來裏續キノ地所ハ無役地ニ御座候

其後吉田四郎左衛門様御出被成候時モ彦左衛門裏地ノ義御町中割餘リノ地方四方ふさかりノ處故永ク爲取候間支配仕候様ニ被仰付候其後寛永七午年米屋町中より御訴訟申上候時ノ覺書

(前ノ方ハ切レちされ文字分リ兼候ハ共其意ハ長人役人五人ニテ下屋敷持多ク御町役歩(過分ニ相成、町中迷惑仕家數次第不足ニ成候而増々御役歩ニこまり候様ニ相見候)八軒ニ罷成候其時町

中寄合仕此分ニテハ米屋町亡所ニ罷成候間町役輕ク被仰付長人モ壹人カ二人ニ被仰付候テ餘ハ下屋敷共ニ町並ニ被仰付被下候ニと御町奉行勝木多左

衛門様へ御訴訟申上度由長人中へ頼申候へ共一圓ニ取次不申候ニ付町中ヨリ彌右衛門喜助長左衛門彦左衛門藤右衛門五人ノ者へ頼申候此時彦左衛門申候ハ左候ハ、四人ハ登リ可申候某ハ此方ニ居リ萬事用之義相調其上いつ迄相詰候共金錢ハつゝけ可申ト相談相極右ノ四人二月朔日ニ罷登リ加藤甚十郎様柴谷武右衛門様右兩御屋敷ニ御訴訟申上候へ共御取上ケ不被遊候右五月迄罷在五月卅日ニ武右衛門様御屋敷へ罷上リ二月ヨリ當月迄相詰御歎（此間モ余程ノ處文字切レ分リ不申候へ共其意ハ武右衛門様ヨリ御座候然共四人ノ者共逆モ難通事ト奉存無是非罷在候處ニ翌六月朔日ノ朝ニ武右衛門様ヨリ四人ノ者御屋敷へ上リ候様ニト御座候ニ付早速罷上リ候へバ被仰出候ニハ太左衛門ニ恨ミ（此モ少し文）御意被遊候其時長左衛門ト申者全太左衛門様ニ御恨トテハ無御座候へ共米屋町亡所仕候右餘々迷惑ノ儘御歎申上候ト申上候へバ長々相詰不便ノ汝等願之通町役之義ハ酒田町内町米屋町四分六分ノ處二分半七分半ノ割ニ定長人ハ三人召上御役下ニいたし二人ニテ末代勤可申旨申付候間難有可奉存旨御意被遊太左衛門様へ御狀一通被遣候其時四人ノ者難有奉存罷降候御門外ニテ相談仕候ハ永々相詰宿近處ノ抱介ニ罷成候其上昨晚ヨリ殿敷被仰付宿之苦勞とかふ不被申義ニ候間祝ヒヲ致シ下リ可申候へ共酒肴ヲ相調

候様ニト彌右衛門喜助兩人ヲ先キニ遣シ跡ニテ長左衛門申候ハ藤右衛門如何存候哉昨晚之御立腹其上宿ニ迄あれ程ニ被仰渡候趣ニテハ今朝ノ御意中々誠トハ不被存候定テ此御狀ハ我々ヲ酒田へ下シ死罪ニモ被仰付候御狀カト被存候間此狀拜見仕推量之通之御狀ニ候ハ、如何ニシテ酒田へ參リ死罪ニ相成候事口惜シキ事ニ候逆モ遣レサル道ナレバ某ハ自害可仕候ト申候へバ藤右衛門尤ニ候互ニ指違相果候ハント三日町橋ノ下へ下リ兩人死ヲ一圖ニ極候テ御狀ヲ開キ拜見仕候へバ如何ニモ長人ヲ不足いたし町役モ輕ク被仰付候トノ御狀ニ候へバ兩人涙ヲ流シ難有奉存候テ早々宿へ歸リ近所ヲ振舞大キニ祝ヒ申候然共御狀ヲ封シ可申事ニ迷惑仕如何せんト存居候處武右衛門様御手内ノ御役人ニ與次右衛門殿ト申仁御座候此人元來酒田生立ニテ長左衛門藤右衛門近付ニ御座候此仁被參候テ先刻之御狀定メテ拜見仕候ハ其勢ト被申候其時長左衛門少シモ油斷不仕是ハ思モ寄ラヌ御事ニ候殿様御同前ノ武右衛門様ヨリノ御狀拜見杯トハ勿体モナキ御義ト申候へバ與次右衛門殿被申候ハいや、永々相詰候テ御取上モナク殊ニ昨晚ノ被仰付様ニテ今朝俄ニ被召出何トナク祝メノ被仰付太左衛門殿へノ御狀ニ候へバ定メテ無心元存拜見候ハン日頃長左衛門ノ所存知候故其通りニハ被致間敷ト存

候則其御狀我等書候間上書可致ト存參候ト被申候其時手ヲ合大慶書封シ賞
ヒ候テ罷下リ候夫レヨリ御役ハ二分半七分半長人役人ハ三人被召上下屋敷
共ニ町並ニ罷成居屋敷ハ壹軒役ニ御定被仰付候此年寛永七午年御入國ヨリ
九年目也米屋町始リ子年ヨリハ七年目ニ御座候

其後ハ七右衛門孫右衛門ニ小走一人相添御普請場へも兩人杖突ニ出申候寛文四
年ノ頃ヨリ筵頭五人立候同十三年ノ頃ヨリハ小肝煎ニ罷成候又御普請場へモ其
頃ヨリ町中替リ々々ニ杖突ニ出申候

其後七右衛門孫右衛門兩人ニテ長人役勤來候處五十有余年ヲ經貞享元子年又々
同役ヲ可増旨町中へ沙汰有之候ニ付町人打寄相談仕候テ長人ヲ相増候事延引被
成下度且又兩人是迄ノ我儘之次第御町奉行山口三郎右衛門様へ御訴訟申上候時
ノ書付ノ下書

(以前ハ見不申候へ共其意ハ五十五年以前御訴訟申上候様ヲ書候ト相見申候) 御訴訟申上候得共御取上不被下候ニ付無是非町

中ヨリ四人五十五年以前午ノ年二月朔日ヨリ六月迄鶴ヶ岡ニ相詰柴谷武右
衛門様加藤甚十郎様右御兩衆へ御歎申上候者被遊聞召右五人ノ内三人下屋
敷共御町並ニ諸役被仰付御町役ハ古來酒田町内町米屋町段々四分六分ニ相
勤候處其年ヨリ貳分半七分半ニ被仰付被下候事

一當三月晦日ニ孫右衛門七右衛門兩人方へ小肝煎五人呼寄米屋町ニ長人立
可申間町中寄候而相談仕候様ニト申渡候則五人ノ者小走リ助右衛門處へ
町中寄右之通相談 此下書是迄ニ御座候

又壹枚本書

一古來無御座候處ニ十四五年以前ヨリ小肝煎五人相立其上十年前ヨリ御
町ヨリ替ル々々小奉行申付候惣テ前々ハ少分ノ御町ニ御座候故七右衛門
孫右衛門小奉行勤來リ申候事

右之通五十年前ヨリ勤來申候處ニ此度七右衛門孫右衛門願ノ長人立申候
へバ町中及迷惑ニ申候其品々ハ口上ニテ申上度奉存候被遊聞召前々之通被
仰付被下候ハ、難有可奉存候以上

貞享元年子五月廿九日

米屋町

- 長 兵 衛 印
 - 善 兵 衛 印
 - 五 郎 兵 衛 印
 - 又 右 衛 門 印
 - 助 右 衛 門 印
 - 重 右 衛 門 印
 - 吉 兵 衛
- 是ハ上役ヨリ斷御座候テ立除申候

善 五郎 印
 市郎 右衛門 印
 九左 衛門 印
 甚 四郎 印ナシ
 八右 衛門 同斷

御町御奉行所

是ヨリ此時ノ願書ト相見候

口上之覺

一米屋町長人之義古來五人御座候時節ハ我儘多く御座候故町中困究仕依之
 御訴訟申上候處五人ノ内三人召上被下候而只今ハ七右衛門孫右衛門兩人
 ニ御座候ヘ共殊外之奢リニ御座候ニ付町中迷惑ニ奉存候此上ニ又長人立
 可申由何共難義ニ奉存候
 一以前ハ孫右衛門七右衛門人足遣申候處十六年以前酉之年殊之外御吟味御
 座候ニ付人足遣申候義知レ申候ハ、兩人迷惑可被致ト存町内相談仕候ニ
 ハ兩人衆禮錢少分ニ御座候間年中ニ金子ノ五兩モ集申様ニ仕人足遣不被
 申様ニ可仕カ又ハ人足勝手ニ成被申候様ニ可仕カト相談仕候ヘバ兎角禮
 錢ニ仕候而可然旨申候故人足一人モ遣不申等ニ相極申候處ニ近年ハ田畑

一ヲ打田植草取リ稻仕舞申候時節迄男女共ニ大分之人足遣申候申付候時分
 居合不申候者ハ何程ニモ雇申候ニ付何共迷惑ニ奉存候其外兩人草履取ニ
 町中小供申付候是モ人足ニ仕候事
 一從御公義様被下候瀬取運賃ノ義米屋町ヘ當リ候高之内ニテ毎年小走リ助
 右衛門ニ錢貳文宛借シ申候是ハ助右衛門給米ニ差引申候故町中損ニ罷
 リ不成候殘ル處請取候者無御座候様ニ去年ハ壹兩壹步百十七文渡リ申候
 七右衛門家ニテ勘定仕毎年之通助右衛門ニ貳文借申候則壹軒前ニ錢拾
 貳文半當リ申候由ニテ米四合宛差引申候處ニ今度之一義ニ付當五月廿三
 日小肝煎一組切ニ連判書付爲致申候此書付ニハ瀬取御運賃ノ義ハ助右衛
 門給米濟不申者ハ算用致差引申候濟切候者ハ錢受取申候處實正ト爲致申
 候右貳文ノ外壹文モ受取候者無御座候如此傳リ仕候事
 一上川原御普請ニ付從御公義様被下候明表之代錢四百貳拾五文ト九百文ト
 二度内町ヨリ小走リ助右衛門受取申候而小肝煎中ヘ相渡シ申候處此錢町
 中ニテ受取申候者無御座候事
 一御公用ニ付御町中ヨリ集置候明表小走リ助右衛門家ニ餘リ申候故市十郎
 下申候者ノ家ニ積置候ヲ孫右衛門方ヘ六表七右衛門方ヘ貳拾三表小肝煎

庄次郎方へ貳拾四表久右衛門方へ繩廿束又右衛門方へ明表三十五表繩五束市十郎居不申内ニ取申候此段ハ其時節助右衛門方ニ斷置申候事

一亥正月二日孫右衛門鶴ヶ岡へ御禮ニ罷登リ申候荒瀬町八軒町へ人足四人申付貳人分ハ錢ニテ越可申由申付候則貳組ニテ壹人文集人足貳人五百文ニ雇五百文ハ孫右衛門方へ相渡申候又暮ニハ鶴ヶ岡へ走登リ五百文宛ニ仕小肝煎中相談斗リニテ取申候へハ二重取ニ御座候事

一同二月廿六日七右衛門鶴ヶ岡へ罷登リ申候人足貳人申付壹人分ハ錢ニテ取リ可申ト申則本町ヨリ六百文集三百文ニテ人足壹人雇三百文七右衛門へ相渡申候是モ前ノ如ク二重取ニ罷成候事

一同三月九日七右衛門酒田中ノ野手金上納ニ罷登リ申候前ノ如仕八軒町ヨリ三百文取申候如様ノ時節ハ惣與内取申候故三重取ニ罷成候事

一同五月九日酒ノ直段御訴訟ニ孫右衛門罷登申候前ノ如仕本町ヨリ三百文取申候是モ三重取ニ罷成候事

一同極月五丁野へ七右衛門奉行ニ罷出候節古來無之五丁野遣ト申候而錢五百文取申候事

一子正月五日孫右衛門鶴ヶ岡へ罷登申候山王堂町へ申付錢三百文取申候是

モ二重取ニ罷成申候事

一同三月廿一日鶴ヶ岡へ飛脚壹人遣申候由申付八軒町ヨリ錢百四拾文取申候是ハ町中ヨリ飛脚ニ參候者無御座候事

一去年本庄ノ殿様御下之節人足ニ錢被下候上林太郎兵衛方ヨリ助右衛門受取申候而小肝煎中へ相渡申候處ニ人足ニ壹文モ不渡申候事

右之通我儘成事共多く御座候委ハ小走リ助右衛門諸事ノ留帳御尋被遊御僉議被仰付被下度奉願候只今兩人ニテ如斯町中迷惑ニ及候此上ニモ長人立申候へハ如先年町中ツゞき不申候間長人立不申候様ニ被仰付被下候ハ難有可奉存候以上

子五月廿九日

米屋町

- 長兵衛印 五郎兵衛印
- 善兵衛印 又左衛門印
- 善五郎印 市郎右衛門印
- 九左衛門印 助右衛門印
- 吉兵衛印 甚四郎印
- 八右衛門印

御町奉行所

此年ハ御入部元和八年ヨリ六十三年目米屋町始リ寛永元年ヨリ六十壹年目鶴

ケ岡へ御訴訟申上候寛永七年午年ヨリ五十五年目也
此頃ハ肝煎ハ庄治郎小走ハ助右衛門右之者共勤來リ候様ニ相見へ候
右ハ貞享元年子年ノ相調ニ御座候

福津屋彦左衛門

同 彦右衛門

長左衛門子孫

野村長兵衛

藤右衛門子孫

五郎兵衛

七右衛門孫右衛門ハ濱ノ町之下屋敷ハ町中過半賣つふれ申候時節明屋敷多キニ
付いつとナク我々屋敷ニ致候押領ノ屋敷ニ御座候元長人屋敷ハ荒瀬町ノ屋敷ニ
軒下屋敷御座候
其後貞享二年岩堀孫右衛門退役被仰付候又同三年遠山七右衛門不調法ニ付御追
放被仰付候

其後元祿九丙子年御町奉行關甚大夫様御時御尋ニ付居屋敷ノ分書付差上候寫

御尋ニ付申上候事

一拙者屋敷二軒屋敷ニテ壹軒ノ御町役歩ニ仕候義米屋町御町割始メテ被成
下候其時御町奉行新家五右衛門様ヨリ彦左衛門義米屋町古來ノ者ニ候ニ

付二軒屋敷ヲ爲取候間永代壹軒ノ御町役差出候様ニ被仰付夫ヨリ代々壹
軒ノ御町役ニ仕來候由承傳候以上

十二月廿三日

米屋町

根津屋彦左衛門

池田吉兵衛殿

野附七郎兵衛殿

裏地つゝき明屋敷書付差上候事

一拙者持傳ノ拜領地ハ御町割餘リノ地方拙者屋敷裏地つゝきニ御座候米屋
町御町割以後吉田四郎左衛門様御出被成屋敷御吟味被成候時節モ御町割
餘リノ地方四方ふさかりノ所ニ候得共彦左衛門へ永ク爲取候間支配仕候
ニト被仰付候由承傳申候以上

元祿九年子三月

米屋町

福津屋彦左衛門

池田吉兵衛殿

野附七郎兵衛殿

右ニ通さし上候處此時モ古來之通り被仰付候

右ハ當家六代目也其後享保年中御町奉行十八代目高橋萬右衛門殿御時右之拜
領ノ地ニ步ヲ御もり被下濱町分ニ被仰付候右ハ當家八代目也 又御町奉行十

九代目豊原太助様御時右萬右衛門様御もり被下候歩以御慈悲御除キ被下古來之通米屋町分ニ被仰付候右ハ元文二年巳七月廿五日野附七郎兵衛殿ニテ被仰付候右同代也

其後又天明三卯年御町奉行廿六代目堀平大夫様御時右屋敷御取上ケノ義被仰付候右ニ付古來持傳ノ書付差上候處此時モ古來之通被仰付候右ハ當家九代目長人職ヲ勤候時也

其後文化三寅年三月御町奉行卅三代目高田織右衛門様御時右ノ地所へ御同心中家作被成度趣御願被成候ニ付差障リ有無御尋ニ付此時ハ古來被下置候時之趣意ヲ書上候所早速御允被仰付候

是迄幾度となく御改御尋御座候へ共古來之書付ヲ差上候所いつも元成リニ被仰付候目出度々々々

(完)

岩堀孫右衛門 米屋町組々頭五人ノ其一ナリ寛永七年減員ノ際舊ニ仍リ命セラレ年代不詳大肝煎トナリ貞享二年退役セリ爾後ノ消息詳カナラス

遠山七右衛門 米屋町組頭五人ノ其一ナリ寛永七年減員ノ際舊ニ仍リ命セラシ年代不詳大肝煎トナリ貞享三年事ニ坐シ退役追放ニ處セラル爾後ノ消息

亦詳カナラス野附氏御用留ニ岩堀遠山所有ノ屋敷引繼ニ係ル事項アリ録シテ参考ニ供ス

米屋町岩堀孫右衛門遠山七右衛門先年より持傳申候下屋敷ども
書上候様被仰付書上ケ申候事

一壹軒屋敷 山王堂町 久次郎居申候處

一貳軒 荒瀬町 八兵衛 傳十郎 久藏 居申候處

一貳軒 濱町 藤藏 八藏 居申候處

一貳軒 表口九間裏へ貳拾七間 池田吉兵衛請取支配是ハ孫右衛門持來申候分

一貳軒 荒瀬町 與三兵衛 彦十郎 久五郎 居申候處

一三軒 表口九間裏へ三十間 德右衛門 基助 喜右衛門 居申候處

一三軒 表口三間三尺裏へ三十間 次右衛門 勘左衛門 居申候處

貞享三年寅霜月四日御同心杉原新左衛門池田吉兵衛小肝煎久左衛門惣左衛門立合請取則書付角兵衛殿へ上ケ申候

池田氏 朝日山城主池田讚岐守ノ支流ナリ同家系圖貞享二年池田吉兵衛荒瀨

郷手代ヨリ酒田米屋町大肝煎ニ召出サレ岩堀ノ跡式ヲ襲ヒ野附氏御用留及天保十二年大庄屋勤書

孫相承ケ維新後ニ及ヘリ今退轉ス

檜物町 俗ニ曲師町ト稱ス明曆圖ニ町名ヲ記セス天和三年巡見使調書ニ檜

物町一丁家數廿九軒トアリ古來檜物師多ク住ス故ニ名ク

濱町 明曆圖ニ濱町十四軒、天和三年調書ニ濱町一丁家數廿八軒ト見ユ

俗ニ善導寺小路ト字ス往時當處ノ北方悉砂原ニシテ亦西濱ノ一部ニ屬セリ濱町

及濱田、濱畑等ノ名字コレニ起因セリ

荒瀨町 明曆圖ニ荒瀨町十八軒、天和三年調書ニ荒瀨町一丁廿五軒トアリ

名義詳カナラス

野附氏 家傳ニ本姓川俣氏ニシテ大彦命○姓氏錄ヲ案スルニ川俣ノ後裔武州

埼玉郡川俣ノ城主川俣主膳ヨリ出ツ天正十一年八月川俣城没落ノ後チ姻戚ニ因ミ最上家ニ倚リ祿千三百石ヲ給セラル元和八年最上家改易ノ際ニ子及ヒ同姓二人ト共ニ庄内ニ來リ田川郡下余目郷門田村ニ住ス同年酒井忠勝侯ヨリ下余目郷支配ヲ命セラレ寛永十三年八月歿ス行年七十五嫡子治兵衛嗣キ同十五年同郷大肝煎ニ命セラレ祿百石ヲ賜ハル嫡子治兵衛嗣キ長男傳太郎家督シ二男七郎兵衛貞享元年二月酒田荒瀨町ニ別居シ外戚ノ姓ヲ冒シ野附氏ト稱ス即チ是レ當家ノ祖ナリト云フ同三年九月米屋町組大肝煎ニ召出サレ遠山ニ代リ池田氏ト共ニ當組ヲ支配ナリ

(當家文書但宗家川俣氏ノ先祖書ナリ)

奉勸請御氏神大比古命則伊奘諾伊奘丹尊之御子ニ而伊勢國鈴鹿郡ニ御鎮座也

川俣之先祖城主之初メヨリ勸請有○廣岡村大内野目ノ舊家ニ川俣某アリ古四王社ヲ氏神トナセリ古四王社ノ祭神ハ大彦命ナリ

先代より傳ル處ノ重寶色々有内第一陣刀ハ月山丸友重ニ而貳尺三寸短刀ハ

入道政宗壹尺壹寸二代目之陣刀ハ關兼房ニ而貳尺五寸

主膳正源貞次生國武藏國埼玉郡ニ而貳萬五千石余川俣代々領之城名ハ龜開ノ

城と申天正十一年之秋八月上旬落城則主從廿余騎ニ而羽州最上へ下リ最上源五郎義俊ノ先君寛正年中之頃より末家の親○別本ニハ親録ニ寄リ三作ル有ニ故ニ依裔千三百石ニテ侍大將ニ被召抱申候其後庄内越後の戰大山千安之軍或ハ龜ヶ崎或ハ谷地左澤之陣中ハ數度相詰ル第一龜ヶ崎之戰ニ先陣ニ而番頭之首ニツ金ノ馬印ヲ取リ高名ニ備へ其後庄内最上之領ト成鶴岡之城代新關因幡守龜ヶ崎城代志村伊豆守息九郎兵衛大山之城代下對馬守息次右衛門也則主膳爲奉行大山ニ住居仕ル其後慶長二年之春○元和八年ノ誤ナリ義俊公行跡惡敷ニ寄御改易ニ相成其節主膳も牢人仕愛子二人並末家之川俣左近同右近諸共庄内へ下リ田川郡下余目郷門田村ニ住居罷在候處 酒井宮内大輔忠勝公元和八年戊八月信州松代より庄内へ御引移被遊候砌主膳義當分之御預ニ而下余目郷支配被仰付相勤罷在候處寛永十三年子八月十五日行年八十五才ニ而病死ス則田川郡下余目之久田村眞秀寺ニ葬法名露庵圓濟居士奥方ハ能州鳳至之城主千葉能登守秀行之妹最上在勤之節慶長元年二月十六日病死其後最上之家中山形多伸と申二女後妻申請愛子ト共ニ庄内へ同伴則法名針譽明金大姉

女子一人 田川郡余目郷木川村庄右衛門妻男子有相續ス

男子一人 藤太郎後次兵衛能次也

外ニ末家之兄弟左近右近之兩人勝手ニ而平田荒瀬之中ニ別居ス

二代川俣次兵衛能次 主膳跡御役被仰付下余目郷支配寛永十五年寅年御知行百石被下尤大肝煎相勤申候然處寛永廿年未六月 忠勝公若松ハ御出陣被遊候節次兵衛御供ニ而罷登リ御奉公申上候勤方者御廣間御番其後郷中村々高反畝相改申候相役信州より御召連御普代御家中奥山七左衛門也在勤中惣御家中並諸役人中之御扶持方相渡ス其節之帳面壹冊外ニ御大名御人數書其外御家御人數書御知行付御役割之横折壹冊我家之重寶ト仕秘藏トスル所也天和二年戊六月廿三日病死田川郡下余目郷久田村眞秀寺ニ葬法名則峰存高居士 機庵妙玄大姉

川俣次右衛能次明曆元年未ノ年より下余目之内西野ト申處ニ新田開發貞享二年丑九月迄免相定本高五百四十三石三代目傳太郎代より定免之御高書上申候委細扣等西野村役前ニ御水帳並色々有則川俣之開發也

嫡男 千松後傳太郎重次家督ヲ繼

二男 伊之助後野附七郎兵衛定次ト云尤野附氏ヲ爲名乘候義町家別家之事故本名爲名乘候義遠慮之筋有之祖母方ニ野附七左衛門と申者有之ニ付則祖母方之名字ヲ取野附七郎兵衛定次と爲名乘候其後年々

百石之内より貳人扶持分貞享元年子二月飽海郡龜ヶ崎へ引越御城
下米屋町組荒瀬町ニ住居ス貞享三年寅九月米屋町組大庄屋御役義
被仰付候

三女 飽海郡平田郷田澤組大肝煎東海林助左衛門妻女子一人有同郡遊佐
郷鷺野町富樫藤左衛門妻男子有相續

四女 羽黒山麓手向村立良坊俗名芳賀治部左衛門妻男子一人有相續

五男 八十郎政次飽海郡酒田六之丁大形與左衛門名跡男子有相續

六男 清大夫次清元祿二年午飽海郡龜ヶ崎御城下米屋町へ引越罷在元祿
六年戊五月廿日病死酒田天正寺ニ葬ル男子二人有一男田川郡上余
目郷町村御百姓二男飽海郡酒田一ノ丁吉村傳七郎名跡相續

三代川侯傳太郎重次後利次ト改天和二年戊十二月次兵衛跡御役被仰付高百石
之内八十石被下置相勤申候云云

參照

御郡中大庄屋之記ニ據ルニ傳太郎ノ繼次五兵衛天明八申年添川組ニ
轉シ寛政五丑年本郡江地組ニ移サレ同十三年酉添川組ニ復歸セシガ
其子某ニ至リ文化十三年事ニ座シ役義召放サレタリ

在役十七年ニシテ元祿十五年七月致仕シ享保十二年八月四日歿ス行年七十九嫡子七

郎兵衛次乘繼キ澄右衛門、圓太、澄右衛門、七郎兵衛、圓太、七郎兵衛父子相承ケ七

郎右衛門ニ至ル名ハ彰常實ハ荒瀬郷小泉組大組頭莊司氏ノ二男ナリ職ヲ維新前
後ニ奉シ三十余年ノ久キニ亘リ頗ル功勞アリ人トナリ學ヲ好ミ經史ニ通シ詩文
ヲ善クシ公義ノ餘子弟ニ教授シ且諸家ノ記録ニ就テ制度法令ヲ修メ其手録スル
モノ無慮數百卷アリ明治 年 月 日歿ス享年

因云本誌編纂中當主友三郎相傳ノ圖書先人ノ手録ヲ貸附シ資料ニ供セラレ酒田
ノ沿革ハ之ニ倚リ徵シ得タルモノ頗ル多シ茲ニ其芳志ヲ鳴謝シ並セテ先人ノ斯
道ニ效サレシ功績ヲ江湖ニ宣揚ス

天正寺町 明曆圖ニ濱町 横町十八軒濱町 豎町三十三軒ト見ユ横町ハ今

ノ近江町ニシテ豎町ハ即チ當町ナリ名義前掲ノ濱町ト同シカルヘシ

天正寺 雞足山ト号ス曹洞宗田川郡大山善寶寺末ニシテ釋迦牟尼如來ヲ本
尊トナス寺傳ニ文明元年本寺開山祥瑞長老ノ創始トスルモ文書ノ徵スヘキナシ
一説ニ乗椿ヲ開基トナスモ年代事歴詳カナラス本ト山形ニアリシヲ年月不詳米

屋町組山王堂町東側南方ニ移建スト云フ慶長十四年横代村年貢皆濟狀ニ五石余天正寺領トアリサレバ移建ハ慶長十四年以前ナルヘシ

慶長十七年最上義光寺領トシテ下安田村地方ニ於テ十七石九斗五升ヲ寄附セラ

ル黒印ハ四世住僧ノ時紛失セリト延寶九年伊丹播磨守改庄内寺社領略記寺地低窪ニシテ數々水害ノ憂

アルヲ以テ承應元年現境内ニ移轉ス明曆圖ニ據ルニ當時ノ境内ハ五十三間ニ四

十七間ヲ有セリ爾後ノ沿革詳カナラス

(錯薪編)天正寺開山乘棒大山善寶寺も此僧の開基と云ふ其元最上山形ニ有之寺

ニ而能登惣持寺を本山とせしが諍論ありて其後大山善寶寺を本山と頼みたる申

傳有最上山形ニ天正寺屋敷有由其先久敷事不詳當地へ引移たることも書物紛失

いたして不相知最上出羽守義光領分之時と相見申候左候へ慶長六丑年より同

十九年寅迄之事ニ候其時ハ米屋町組山王堂町東側南方へ山形より引寺慶長十七

年六月四日義光より十七石九斗五升之黒印有其後度々洪水ニ而攝津守様御代當

境内へ引移と有之候左候へ正保四亥年より萬治三子年二月迄之内と相見申候

天和三亥年正月公義へ書上ニハ雞足山天正寺と有之塔頭善正庵壹ヶ寺有之○五大院書留同之

(當寺書留)新井田口山王堂町に寺屋敷御座候處度々洪水にて及難儀承應元年壬辰年奉願北之濱拜借被仰付只今之寺地御免被成置候當時新町及新片町邊とも頂

戴せしも充分行届不申種々手數ニ付皆返納して今の所のみ頂戴申候云云

伊藤氏 姓ハ藤原 伊藤ヲ氏トシ遠祖詳カナラス數代大山ニ住シ四郎左

衛門ト稱シ鑄工ヲ業トセリ隱居ノ後太郎兵衛ト改メ延寶二年十二月廿六日没

ス嫡子四郎右衛門壯年酒田ニ來リ荒瀬町ニ住シ油屋ヲ業トス後天正寺町ニ移

ル之ヲ當伊藤家ノ先祖トス延享四年七月十五日歿ス享年八十八

二代四郎右衛門初彌次兵衛ト稱ス寶曆二年十二月一日歿ス享年六十六

三代四郎右衛門諱ハ家勝幼名長四郎安永二年藩主ニ金五千兩献上二十人扶持

ヲ賜ハリ居宅地永代免租セラル天明四年九月六日歿ス享年六十八家運大ニ起

ル

四代四郎右衛門諱ハ等和幼名四平家勝ノ弟平四郎ノ子、家勝ニ養ハレテ子ト

ナリ家督相續ス度々ノ献金才覺金アリ又貧民救助ニ力ヲ盡セリ又新庄戸澤家

ニ才覺金融通アリ享和元年平田郷飛鳥村狩川通平岡村川普請入用金錢諸拂御

用仰付ラレ文化二年酒田増口錢取立改惣元方仰付ラレ同十二年大坂御廻米雇

船檢分掛仰付ラル、故ニ大庄屋格トナリ御流頂戴格トナリ知行取御鷹匠席トナリ御手廻格家一代小姓格トナリ五人扶持加増廿五人扶持トナル而シテ等和風流韵事ニ達シ百合坊ノ跡ヲ繼キ俳諧ノ宗匠トシテ相生庵花笠ト号シ門人數多ヲ有セリ又能樂ニ力ヲ盡シ觀世流ヲ宗トシ一座ヲ起シ内匠町別邸ニ舞臺ヲ備フ文化二年二月鶴ヶ岡城ニ於テ藩主ノ上覽ニ供シ文政九年十月藩主龜ヶ崎城ニ至ルヲ機トシ上覽ニ供シ翌十年二月又鶴ヶ岡ニ於テ興行セリ其都度賞詞アリ物ヲ賜ハル今當家ニ傳フル能裝束能面等ハ其紀念ナリ等和又一代ノ豪奢ヲ極ム天保五年七月廿二日歿ス享年六十七

五代四郎右衛門諱矩道幼名彌惣吉實ハ末彌三郎ノ二子兄四平ト共ニ等和ノ養子トナル四平早世シ等和ノ死後相續ス度々ノ献金才覺金貧民救助アリ安政六年五月十二日新知百五十石ヲ賜ヒ家中組ニ編セラレ元治元年九月廿九日歿ス享年六十九

六代四郎右衛門諱寬衆幼名四郎太四平ノ庶子矩道ニ養ハレテ子トナル相續ノ

後藩主ヨリ邸ヲ鶴ヶ岡大寶寺ニ賜ヒ移轉ス維新ノ後再ヒ酒田本邸ニ遷ル

七代四郎右衛門諱ハ資言幼名得四郎寬衆ノ四男明治二年家督シ壯年藩命ニヨリ北海道ノ警備隊ニ入ル晚年俳諧ニ遊ヒ養老庵萬壽ト号シ門人數多アリ又大ニ謠曲ヲ嗜ム大正三年六月十日歿ス享年六十(當家々記ニ依ル)

近江町 明曆圖ニ濱町横町十八軒ト見エ本ト濱町横町ト稱セシヲ天和二年近江町ト命セラル其他最上時代川北三奉行ノ一ナル寺内近江ノ宅址一説ニ與ナリカノ宅址ナリシヲ以テナリ當時廿五戸ヲ有セリ同二年巡見使覺書ニ近江町一丁半家數廿五軒ト即チ此レナリ

(明曆圖書入) 濱町横町同盛町 此濱町兩町之内最上家領分之時寺内近江守宅地又ハ同心與力之住宅共申候天和二成年迄之内町名ニいたし候

日枝神社 御城内日吉宮、東禪寺山王、元宮一ニ本宮トモ作ルトモ稱ス大山昨命ニ大己貴胸形中津姫ノ二神ヲ配祀ス

社傳ニ貞觀十八年近江國志賀郡比叡山坂本山王宮今ノ官幣中社日枝神社ナリヨリ勸請スル所ナ

リト云フ初メ田川郡宮之浦地方ニアリ年代不詳東禪寺城鎮守トシテ城内ニ遷シ
祀ラレシヲ慶長六年此内庄内悉ク最上家領トナルニ至リ東禪寺分町家内町米屋町兩組トモ安全守護ノ爲

メニ米屋町組ノ東ニ遷座セラル其地今ノ山王堂町東側ニシテ本間家所藏ノ文書
ニ據ルニ同町修驗行藏院ノ向ヒ松原地ノ南方ナリト云フ本文縣社日枝神社ノ下ニ載ス古來當社

ヲ御城内山王宮ト稱スルハ本ト城内ニアリ其鎮守タリシニ依リ其名稱ヲ襲用シ
又東禪寺山王宮ト稱スルハ東禪寺分兩組ノ鎮守タリシヲ以テナリ然ルニ其地低

窪ニシテ數々浸水ノ憂アルニ依リ寛永十三年四月濱町ノ東現今ノ位置ニ移サレ
境内南北五十二間東西百間ヲ占メ明曆圖ニハ表三十三間裏九十六間トアリ社殿ハ南面ニ建築セラレタリ

境内ニ「御神跡」ノ碑アリ是其社址ナリ

(社家齋藤氏文書) 御尋ニ付申上候

一拙者相守申候龜ヶ崎日吉神社者元來比叡山ヨリ奉勸請御神体古來御船ニテ四月十五日當湊ニ爲入給候節袖之浦を御旅所ニ構暫鎮座候由其節より袖の浦を改宮之浦共申傳候其節之領主右之御神体御城内に被移一字建立被遊守護神と候由其後越後御領之時迄御城内ニ社有之候處最上御領之時御城近處に替地被

仰付慶長十七年六月四日爲御燈明料高七石八斗四升之處半物成寄附被遊則御
黒印所持仕候右社建立被成下候其他只今山王堂町と申傳候場處御座候然共度々之洪水ニ而及難儀候ニ付只今之近江町に被移候南北五十二間東西百間替地被仰付候只今之社地者寛永十三年丙子年四月建立成就今以相守罷在候

一宮内大輔忠勝公御入國之砌ニも古來之趣御尋ニ付申上候
一只今當社之門前差置候門前家數ベ二十間内二軒ハ濱之日吉山之社地之内門前ニ御座候右之場處表口四間三尺裏行十八間之所代々拙者下屋敷ニ而差置申候右之通少も相違無御座候以上

延享四年卯二月

龜ヶ崎御町兩社祠官

齋藤大隅守

○外一件アリ主トシテ下日吉社ノ事跡ニ關スルヲ以テ彼社ノ下ニ掲載スヘシ

(明曆圖書入) 山王並別當大夫 貞觀十八申年近江國志賀郡坂本より勸請袖の浦に御旅所を構暫鎮座有之候由姓古宮之浦と改り候も此謂也と云何れの領主の時
にや城内に遷し上杉同年五月中被仰付候○上杉以下欠文アリテ意義通暢セズ

(酒田御町三組古控) 山王並別當社人 貞觀十八申とし近江國坂本より勸請し袖之浦ニ御旅所を構え其後城内に移し有之候最上家領分ニ至リ町家安全守護之爲

米屋町東側之地に御城内より相移申候得共度々洪水之難事有之ニ付寛永十三子
年四月近江町に引移し申候又砂濱之山王者此神社より勸請し兩山王宮當時之社
是なり夫故龜ヶ崎山王を元宮と唱來申候御城内山王宮と板扎ニ書來る事往古よ
り例と相見候

(錯薪編) 山王別當大夫 貞觀十八申年近江國志賀郡坂本より勸請し袖ノ浦ニ御
旅所を構鎮座有之候由往古宮之浦と改り候義此謂也と云何レ之領主之時ニ候哉
城内ニ遷し上杉家領分之時迄城内ニ神社有しを最上家領之時ニ至リ町家共安全
守護之爲米屋町組山王堂町東側之方ニ城内より引移し候事詳カ也慶長十七年六
月四日七石八斗四升義光より寄附有之候黒印齋藤大隅守代々所持ス其後山王堂
町低地ニ而度々之洪水有之よし寛永十三年子四月當社地近江町之東ニ引移せし
也南北五十二間東西百間之替地なり又濱之山王者此神社より勸請せしより龜ヶ
崎之山王を元宮と唱來れり御入國以後今ニ至リ御城内山王宮と板扎ニ書來るこ
と往古之例ニ相見へ神主大隅守事往古何代にや不詳

○東禪寺城内ヨリ米屋町組東ニ遷座ノ時代ヲ最上家領ノ時ト云ヒ其年号ヲ逸
セリ然レ柏谷家記ニ據ルニ下山王宮モ上杉時代マテハ西濱御富士山ニアリ
シヲ慶長六年最上家領ナルニ及ヒ志村伊豆守ノ沙汰トシテ酒田町組守護ノ

爲メ今ノ荒町地方ニ遷座スト云ヘレバ當社ノ米屋町東ニ遷サレシモ同年ニ
係ルコト自ラ明カナレバ本行ノ如ク成文セリ

是レヨリ先キ向フ酒田ノ人家漸次北遷シ酒田町組ヲ成立スルヤ其鎮守山王宮ヲ
モ遷シ奉リ同組ノ産土タラシメシカ人家ノ繁殖スルニ隨ヒ社頭ノ規模モ壯大ニ
赴キ慶長十四年八人ノ當人ヲ立テ中ノ申ノ神事ヲ創始シ盛ナル祭禮ヲ行ハレ正
保三年町奉行乙坂六左衛門ノ發端ニテ當社ノ神木ヲモ彼社ニ奉シ町内ニ渡シ參
ラセ酒田三組一統ノ祭禮トナシ東禪寺分各町ノ練物モ其行列ニ加ハリ且當社ノ
神職古來彼社ノ別當ヲモ兼帶セシヲ以テ當社頭ニ於テハ別ニ祭典ヲ行ハサルコ
ト、ナレリ事縣社ノ下ニ詳カナリ

○因ニ云フ錯薪編三組古扣等ニ下山王宮ヲ當社ヨリ勸請スト云ヒ土人亦往々之
ヲ傳誦スルモ蓋非ナリ必覺當社ノ神職ヲ本宮大夫ト字スルヨリ起レル傳説ニ
シテ本末ノ意義ニアラズ所謂本宮ハ慶長八年酒田町年寄上林永田等三十六人
ノ長人ニ相議リ下山王宮當時ハ本地佛釋迦如來ヲノミ安置セラルノ本体(大已
貴命)ヲ其南側ニ奉祭シ之レヲ本宮(即チ南殿)ナリ從來ノ北殿ヲ併テ兩山王宮ト

惣稱ス下稱セルモノニシテ當社ヲ云ヘルニアラズ故ニ寛永二年ノ供物帳ニハ
 南殿ヲ本宮ト記セリ以テ証スヘシ而シテ當社ノ神職慶長八年以來南殿別當ヲ
 帶帶セシヨリ本宮大夫ノ字ヲ得終ニハ其本務タル當社ヲモ誤リテ本宮ト稱ス
 ルニ至レルモノナリ事縣社ノ下ニ詳カナリ宜ク參照スヘシ
 正德五年七月米屋町組ニ山王講ヲ立ツ是レヨリ先キ内町組ハ既ニ其設ケアリシ
 カコ、ニ至リ當組モ亦之ヲ發起セラレ

(野附氏御用留) 正德五年未七月朔日初而山王宮社司齋藤清大夫宅へ米屋町組よ
 り連中四十人寄相談極ル此外十ヶ年以前より内町斗ニ山王講相立野附七郎兵衛
 池田吉兵衛宮崎忠右衛門此三人内町へ罷在候へ共未七月朔日より米屋町組連中
 へ入

享保七年八月看督長狛犬ヲ置ク數回ノ火災ヲ免レ今尙存ス○近年彩色
 (同 上) 享保七年寅上之山王矢大臣兩体二ノ町池田六郎兵衛殿寄進ニ而左近と
 申佛師作則八月朔日ニ遷宮アリ近江町ありせ町片町給入町内町より濱町ヲ通申
 候其日御遷宮也同年駒犬も建立是ハ内町米屋町兩組より拔々奉加ニ付
 同十七年八月社殿葺替アリ同十九年十一月建築修繕其他社頭ニ係ル總へテノ費

用ハ兩組負擔ノ契約成ル

(同 上) 享保十七年壬子八月上ノ山王宮葺替ニ付則八月十一日より遷宮同十五
 日迄五夜五日有此時御輿並供物通候町々之覺
 山王宮社司齋藤山城守宅よりねり出し近江町荒瀨町給人町上片町下片町より御
 役所之前へ出られより下内町上内町通り新米や町遊佐代屋角より平田代屋前へ
 出又々荒瀨町へ入夫より濱町ヲ新地入口ノ大小路ヲ通り新地へ出西町ヲ北へ通
 シ濱之出口より筑後町不殘通り御宮入申候其節出申候役人御足輕目付高橋彦内、
 庄司安平兩人出ル御同心村上喜大夫、相場彌三郎兩人内町米屋町兩組軒煎不殘走
 小兩人出ル長人之内高橋作右衛門池田藤七出ル町並より三丁目彌右衛門出ル大
 庄屋ハ出不申候齋藤半内斗一人出ル此節近江町濱町ニ而燈籠五夜之内付ル
 山王宮葺替之節人足手間賃並造用割御町方より取立候覺

- 一錢七ノ六百三十五文
- 内壹ノ百七十文
- 同壹ノ五百五十文
- 同壹ノ八十文
- 同五百十文
- 内町組米屋町組共ニ本屋名子共ニ面
掛ケ壹軒ニ付十五文ツ、取集申候
- 米屋町家數百七十八軒
- 八軒町同百六軒
- 山王道町同七十貳軒
- 荒瀨町同三十四軒

同貳貳百五文

同壹貳百八十文

七六六三十五文

山王宮遷宮之節供物代並すわら白丁仕立代錢割

一錢貳七百五十文

本家名子共ニ面掛ケ壹軒ニ付五文四分ツ、

内四百貳拾壹文

米屋町 同五百七十三文

同三百八十九文

山王道町 同百八十四文

同三百八十九文

近江町 同七百九十四文

貳七百五十文

是ハ内町組米屋町組ニツ割

爲取替証文之事

一當所山王宮造立並修覆其外何儀ニよらず宮一道之義入目出錢此未内町組米屋町組兩組共ニ家掛ニ取立差出し可申爲其双方相談之上相究爲取替証文如此ニ候以上

享保十九寅年十一月廿貳日

野附 七郎兵衛 印
池田 吉兵衛 印

伊藤 傳内 殿
齋藤 半内 殿

此通相認内町へ出ス内町兩人よりも我々之宛所ニ而一通取置候此未ハ宮一同之入目ハ兩組之家かけニ取立申筈御役所廣間ニ而取組此証文爲取替申候

文政五年十月朔日社殿類焼後天保十一年五月本殿ノミ建立シ久ク拜殿ノ設ケナク假殿ヲ以テ之ニ充ツ明治九年二月廿四日郷社ニ列セラル同年拜殿建築ニ着手シ今尙工事中ニ屬セリ

舊社領 慶長十七年最上義光ヨリ燈明供物料トシテ大町村地方ニ於テ七石

八斗余ノ寄附アリ黒印面左ノ如シ

爲燈明供物料七石八斗四升之處但半物成令寄進候永算萬安可奉祈當家之延長者也

慶長十七年六月四日

出羽 少將 印

龜ヶ崎 山王 大夫

舊社職 齋藤氏出ル所ヲ詳カニセス慶長八年酒田町鎮守山王宮ニ南殿ヲ創

始シ神体ヲ安置シ之レヲ本宮ト稱シ當家其別當ヲ兼帶セシヨリ子孫之ヲ襲ヒシカ明治 年當主清澄ニ至リ兼務ヲ辭シ專ラ當社ニ奉仕セリ

寶物

築後町 元和八年酒井家入部ノ初メハ少數ノ民居アリシモ風砂ノ爲ノ毎ニ埋没ノ憂アルヲ以テ漸次退轉シ僅カノ人家ヲ殘セシカ明曆二年五月三日酒田大火ノ際土家山ナル下藏悉ク烏有ニ歸セシカハ寛永七年四月當處ノ人家ニ資ヲ給シテ立退ヲ命シ更ニ下藏ヲコ、ニ新築セリ寛永十年野ニ新川ヲ開鑿シ最上川ヲ之ニ導キシヨリ酒田城新井田附近汎濫ヲ免レシニ依リ同十二年當所ノ下藏ヲ新井田ニ移建セラル實ニ是レ新井田倉庫ノ始メナリ事新井田ノ下ニ詳カナリ是ニ於テ藏跡島地トナリシヲ前年退去ノ輩再ヒ舊址ニ家作ヲ申請シ延寶六年屋敷割ヲ命セラレ天和三年宅地ヲ割賦シ其西ニ延長百間ノ土手ヲ築キ風砂ノ害ニ備ヘ以テ家屋ヲ造作セシム當時之ヲ鶴田口濱町ト稱ス同年巡見使調書ニ鶴田口濱町壹丁家數廿三軒ト即チ是ナリ貞享三年二月更ニ築後町ト命名セラル是レ其地本ト齋藤筑後守

川北三奉行ノ其一ナリノ邸宅一説ニ同心與力ノ宅址ト云フタリシヲ以テナリ同年九月其北ニ二十七間ノ砂除土

手ヲ築キ簀垣ヲ設ケ之ヲ擁護シ永ク風砂ノ害ヲ免カシム

(明曆圖書入) 築後町之義ハ最上家領分之時齋藤筑後守宅地又ハ同人與力之住宅とも申傳候御入國後まばらニ家有之所砂吹散シ家埋候ニ付他町ニ引越其後西之方ニ土手○今ノ妙法寺山ナルヘシ普請被仰付堀切ト申處ハ濱土家山ニ有之候下之御藏之内丸岡御料松山大山櫛引中川京田御藏寛文七年未四月御引移し被仰付又者右御藏不殘同十二年子年新井田ヘ御引移被仰付御藏跡屋敷畑ニ相成居候處先年罷在候者共又々家作仕度趣奉願候處延寶六年午年屋敷割被仰付天和三年亥八月ヨリ家作相始リ追々家居相増候間近江町通筑後を町名ニ仕度旨奉願候處貞享三寅年ニ被仰付右筑後町屋敷割被仰付候節肝煎一人ハ一軒屋敷ツ、無役地被下置下屋敷ト唱來候處享保十三申年ヨリ同十八丑年迄之内右屋敷御引上ニ相成翌十九寅年六月町々位ニヨリ御町用金之内ヨリ年々鳥目ニテ被下置候様被仰付候今以下屋敷代とて被下置候

(野附氏御用留) 貞享三年寅ノ二月御町中本屋之分水帳ニ致候間明細帳面ニ仕出シ候様ニ御町奉行鱸角兵衛殿ヨリ被仰付則米屋町惣家數間數相改申候山王道町

川端三軒之處新町五十六軒此時より別帳ニ仕出シ申候新町之義ハ古來齋藤筑後殿與力衆居申候處之由申候ニ付則角兵衛殿へ得御意筑後町ニ仕候其外前々より無役屋敷大小出入之處モ明細帳面ニ書付同月十三日ニ水帳角兵衛へ差上申候此末家屋敷貸渡候ハ御披露仕角兵衛殿帳面手前之控とも買申候者名付ニはりかへ申筈ニ被仰付候右此時迄三町ニ水帳と申者無之候

(同 上) 寶永五年子歲

御尋ニ付以書付申上候

一拙者共支配筑後町之義古來より御町地ニ而家作罷在候處ニ五十年前ヨリ西濱砂吹かけ家立罷在候義成兼段々家こほし取御町名子借宅ニ入込居申候少々こほし残り申候家も御座候處丸岡御料並御私料御城米御藏御立被遊候ニ付殘リ申候家共引料御金被下置不殘引取申候而御藏御立被遊候其後右之御藏新井田ニ御移替被遊候家こほし取申候口藏屋敷ニ罷成申候其間十二年過先年罷在候者共奉願廿六年以前亥年山口三郎右衛門殿御町奉行御勤被遊候節古來之通御町地ニ被仰付家作罷在候然共西濱より砂吹かけ筑後町之者共迷惑仕同亥年山口三郎右衛門殿御勤之時風除土手願申上候へば則被仰付候由聞傳申候と親共申候又々拾五年以前寅年鱸角兵衛御町奉行御勤之節之川北御郡奉行關甚

大夫殿御改被成土手繪圖被仰付候右繪圖ニ平田郷地と書付差上申候様ニ被仰付候先々地方之様子拙者共不存候間書申候様如何ニ奉存候と申上候へば妙法寺へ拙者共親兩人御呼被成鱸角兵衛被仰聞候ハ郷方地方と書付不申候へば甚大夫殿御指圖被成かたきよし御申被成候間平田分と書付申候而も筑後町風除土手ニ申請候へば構無之義ニ候間書付申候様ニ被仰付候其節關甚大夫殿平田御代官氏家門大夫殿御立合被成鱸角兵衛殿ニ被仰付候ニ付御指圖之通繪圖相調差上申候由兩人之親共方より拙者共承申候以上

子十一月

野附七郎兵衛
池田吉兵衛

御町奉行所

此書付寶永五年子十一月五日ニ上ル山田四郎左衛門殿御勤之時

一筑後町以前ハ「こぎ上リ」と申候天和三年亥八月前々罷在候者共へ御家老中様より屋敷とも被下置候其節之御町奉行山口三郎右衛門殿御步行目付五十嵐久右衛門殿御町割被成候西之土手も其節御兩人御差圖ニ而つき申候由肝煎共申候一筑後町西ノ土手百間之處ハ亥ノ年つき申候土手へつきたし北新規ニ貳拾七間つき申候是ハ貞享三年寅ノ九月廿六日より同廿五日迄米屋町總人足百八十二人筑後町ハ廿三日廿四日家掛ニ罷出つき申候小奉行町々小肝煎替りく出申

候同すかき之義此時迄ハ無御座候處ニ同十月四日鱸角兵衛殿より同心村上喜
大夫被遣立杭横ふちす繩共ニ被下筑後町人足ニ而御普請被仰付候是より年々
御奉行所より此普請被成下候

堀切 本ト平田郷地方ノ畠地ナリ延寶六年其一部分ハ筑後町屋敷トナリ殘

余ノ畠地ハ大肝煎岩堀遠山ノ支配ニ屬セシカ貞享二年岩堀退役ノ後チ池田氏之
ヲ預リ翌年遠山追放ノ後野附氏之ヲ預ル正徳三年初メテ宅地トナレリ

(野附氏御用留) 筑後町割殘シ堀切川端之畑御座候先年より岩堀孫右衛門遠山七
右衛門支配仕來候右兩人役義被召上候故池田吉兵衛寅之壹年預リ支配仕候卯之
二月より孫右衛門預リ來候處ハ吉兵衛支配仕候七右衛門支配之處ハ七郎兵衛預
申候

(筑後町内堀切御水帳末書野附御用留所收) 右屋敷之義平田地方ニ而先年畑地ニ御座候
處畑主奉願正徳三年巳八月屋敷ニ被仰付則其節之御町奉行白石茂左衛門殿御勤
之砌御在番之御徒目付菊地治兵衛殿御立合屋敷長巾御見分之上御改被成候年貢
ハ大町組の上納仕其上御町役も相勤申等ニ御座候ニ付拙者共支配被仰付候

新片町 本ト片町ニアリ人家御藏ニ接近スルヲ以テ火災ヲ慮リ享保十一年

東側廿七戸向南角四戸ニ立退ヲ命シ更ニ替地トシテコ、ニ家作セシム故ニ新片
町ト稱ス

(新片町水帳末書上同) 右新片町之義享保十一年午御藏近邊ニ付爲火防上下片町
之内東側貳拾七軒向南角四軒都合三十壹軒御除ニ相成右爲替地筑後町末御田地
之所被下置右ニ付御普請奉行坂部八郎左衛門殿爰元御普請方小寺三郎兵衛殿服
部六兵衛殿御見分相濟其後間地御改松浦音右衛門殿澁谷六右衛門殿御下リ間敷
被成御渡候片町より相分申候ニ付其節より新片町と相唱申候

新地 鷹町外野町ノ小字アリ本ト平田郷大町組濱畑分ニシテ不毛ノ砂地ニ

屬セリ寶永三年五月内町組ノ名子借宅ノ輩之ヲ借用シ家作センコトヲ請願セシ
カ同年川北御郡奉行平田郷大庄屋ノ檢分アリ同五年御代官町奉行立會實測シ惣
坪壹萬三千六百廿二坪ヲ百廿四軒屋敷ニ割賦シ内町組大庄屋ヲシテ之ヲ支配セ
シム是レ新地ノ草創ナリ爾後年々借地料壹兩貳分ヲ濱畑ニ納メ正徳三年マテハ
町役ヲ免セラレシヲ同年秋初メテ水帳ヲ製シ借地料ヲ外惣歩高三百十七步六厘
ノ町役ヲ課セラレ維新後ニ至レリ明治九年地租改正ノ際町村宅地トシテ之ニ現

右之通大町組濱畑之内龜ヶ崎御城下内町組名子借宅之者共居屋敷ニ借用仕度旨御町奉行山田四郎左衛門殿迄奉願候處願之通從公義被仰付候地境間數之義ハ平田御代官小花又右衛門殿鈴木半左衛門殿御檢分之上山田四郎左衛門殿御立會ニ而御改地境間杭被仰付御渡被成借用仕候處實正ニ御座候依之自今以後右爲地代金壹兩貳步宛毎年極月中濱畑御百姓中ハ無滯相渡可申候右之借地公義御用之由被仰付候ハ、不依何時繪圖之通無殘急度返上可仕候勿論右地境間杭之外ハ屋敷少成共切廣メ申間敷候尤右之間杭末々朽痛申候者各ハ御斷致其方御役所ヨリ御指圖次第濱畑御百姓衆立合打出シ置可申候且又借地之内ニ而何様之義出來仕候共郷方ニ御苦勞掛申間敷候右申合之趣共於以來聊違變申間敷候爲後証之借地之者共以連判繪圖証文仍如件

寶永五戊子年三月

借地

甚右衛門	勘左衛門	喜兵衛
三郎右衛門	源兵衛	三右衛門
九郎右衛門	作兵衛	次郎右衛門
多兵衛	六右衛門	仁兵衛
彌次兵衛	甚助	新右衛門
勘右衛門	長左衛門	助次郎
與兵衛	吉右衛門	新四郎

濱畑肝煎
甚四郎殿
長人百姓
佐次右衛門殿
喜三郎殿
惣御百姓衆中
大町村肝煎
宇兵衛殿

市十郎	久次郎	彌惣兵衛
仁兵衛	次兵衛	多右衛門
久左衛門	勘五郎	六兵衛
伊兵衛	次兵衛	三次郎
與兵衛	德左衛門	七右衛門
作左衛門	五兵衛	四郎兵衛
彌七	仁兵衛	六藏
與次兵衛	長兵衛	長太郎
權三郎	作兵衛	五助
長三郎	作右衛門	作兵衛
彦兵衛	清左衛門	善三郎
六左衛門	作藏	甚左衛門
彦右衛門	與左衛門	甚右衛門
久左衛門	作十郎	彦右衛門
善四郎	茂左衛門	清十郎
六十郎	與八郎	久三郎
藤右衛門	佐次兵衛	勘助
五郎兵衛	善九郎	長三郎
庄右衛門	清左衛門	藤十郎
作兵衛	與兵衛	與次兵衛
三郎左衛門	五郎左衛門	吉右衛門

左五兵衛	仁兵衛	六兵衛
長右衛門	勘左衛門	清右衛門
九郎左衛門	半兵衛	又右衛門
仁兵衛	與吉	久三郎
惣三郎	德右衛門	仁左衛門
右衛門	助右衛門	善三郎
源十郎	角右衛門	作兵衛
吉右衛門	勘九郎	市郎兵衛
與十郎	多兵衛	庄右衛門
源兵衛	勘五郎	左兵衛
勘七	久作	與兵衛
彌右衛門	六兵衛	かも左衛門
三四郎	長作	六右衛門
伊右衛門		

肝煎 幸助
齋藤 半左衛門
伊東 彌左衛門

(鷹町外野町御水帳末書野附御用留所收)

右御町古來平田地方砂山無用之場處ニ御座候處拙者共支配仕候御町高免ニ付開發仕度旨寶永三戌年五月奉願同五年子三月平田御代官鈴木半左衛門殿小花又左

衛門殿其節之御町奉行山田四郎左衛門殿御立會御實見之上東西九十六間余南北百五十間余此坪數壹萬三千六百廿貳坪永々御町支配被下置候

一正徳三己年白石茂左衛門殿御勤之節御水帳相改差上享保十六亥年御町繪圖仕立差上候様被仰付明和七寅年明細相改新水帳仕立差上申候

濱

畑 妙法寺所藏古圖ヲ案スルニ方域頗ル廣濶ニシテ東南ハ今ノ兩新地ヨ

リ寺町裏今町ニ亘リ北ハ千日堂前林昌寺境内ヲ包ミ西ハ一ノ杭ヨリ四ノ杭マテヲ總ヘテ濱畑ト稱シ平田郷大町組地方ニ屬セリ正保ノ頃既ニ民居アリテ高二十二石余ヲ有シ濱畑分ト稱ス

(正保五年正月酒田御城廻亥之御成箇納方土目録)

高貳拾貳石四斗八升七合

濱 畠

取米五石三斗九升六合九夕

亥ノ免貳ツ四分
外壹分肝煎給

口米貳斗壹升五合九夕

本口合五石六斗壹升貳合八夕

肝煎 五郎兵衛
百姓 藤右衛門

大肝煎 正右衛門

寛保二年内町組ヨリ濱畑分地方ヲ借り砂除樹木ヲ植エ行々宅地トナシ新地ニ接續シ町並トナサンコトヲ請ヒ聽サル寶曆四年米屋町天王堂修驗文珠院ノ植付ニ熟練スルヲ以テ堂舎ト共ニ濱畑ニ移轉シ之ニ從事セシム是レ濱畑町ノ濫觴ナリ

(野附氏御用留) 寶曆四年爰元寺町後通平田郷大町村支配濱地之義追々草木植付末々屋敷割いたし家作町地相成候へバ内町組之者共勝手ニ相成候ニ付十三年以前成年右郷方ハ相對之上少々年貢米出内町組へ永代借地致度之旨先役多助へ願出則多助申上願之通被仰付候米屋町修驗文珠院植付等相心得候ものニ付内町組之者共申合文珠院相守候天王堂右濱地ハ引移造立仕度寺社方ハ願立被仰付候

伊東氏 出ツル所ヲ詳カニセス寛文六年彌左衛門内町組大肝煎ニ命セラレシヨリ子孫相承ケ維新後ニ及へリ

林昌寺 南千日堂前ニアリ鎮護山ト号ス淨土宗西京知恩院末ニシテ阿彌陀如來ヲ本尊トナス寺傳ニ天文中岾源ノ創始スル所ナリト岾源ノ事歴詳カナラス永祿三年九月十八日ヲ以テ示寂スト云フ本ト田川郡向酒田ニアリシヲ同年酒田本町一丁目二丁目ノ間ニ移建シ林昌寺小路今上ノ山ト稱スル處即チ是レナリ慶長

六年志田川村東禪寺籠城ノ際當寺ノ住僧爲メニ武勇ヲ顯ハセシコト第一卷總説ノ下ニ詳カナリ寛永元年更ニ内匠町ニ移轉ス當時ノ境内南北五十六間貳尺東三十二間西四十八間明曆圖亦之ト同シヲ有セリ

(酒田町三組古控) 林昌寺小路拾貳軒 永祿年中飯盛山北方宮之浦地續向酒田と唱候處より引移申候林昌寺此處ハ引移リ候ニ付林昌寺小路と唱候其後寛永元子年内匠町ハ引移申候

(錯薪編) 林昌寺開基岾源天文中當寺を起立スと在て其先數代有之といへども不詳故岾源を開山とす永祿三年申九月十八日卒ス二世岾鎮和尚之時尾浦の百姓雨乞祈禱之後勅額拜領其後戰國之節燒失此義ハ田川郡向酒田境内有之節之由○墨圖ナリルモノハ後世ノ捏造ニ係ルリ下項田記證スヘシ夫より何代目何レ之年カ酒田本町一之丁二之丁之間ニ當時林昌寺小路と唱候處西側ハ引移其後何レノ年カ又々當境内へ引移と云上内匠町元祿十四年已八月御水帳之内ニ林昌寺出候節勘左衛門佐兵衛長兵衛九左衛門由兵衛又兵衛松右衛門七兵衛清八德兵衛權四郎右十一人屋敷一人前屋敷長五軒壹尺四寸ツ、裏地之處寺地ニ相成候ニ付七軒役之内貳軒御役引殘五軒御役下ニ相成是ハ寛永年中初頃と相見候左候へバ此時林昌寺小路より當境内へ引移候天和三年正月公義ハ書上ニハ淨土宗鎮護山林昌寺と在右山号之意味又ハ寛延年中ノ頃迄

ハ下馬扎も有之候由左候へハ勅額並下馬扎とも焼失之義實説ニも可有之候へ其年月日も不相分候略之塔頭寶珠院觀世庵貳ヶ寺有之

(天保十一年十二月書上) 起立天文中開山生蓮社往譽上人岷源和尚永祿三庚申九月十八日被致入寂候(中略)

今度拙寺由緒御糺御座候へ其古記録焼失拙僧昨今之住職ニ御座候へハ檀中舊家老人成者ニ相尋右より聞得之處左ニ申上候

一最初建立之地ハ宮之浦之内大鍾之銘羽州庄内田川郡鎮護山岷翁院林昌寺と相見え候

一何レノ年代ニ御座候哉當御城下本町通上之山と申處ニ轉地仕只今ニ至迄林昌寺小路ト申候處御座候六字名号之石塔一ツ印ニ殘置干今御座候

一何年代候哉内匠町ハ轉地仕候

一内匠町元境内南之方五十六間貳尺裏寺町五十六間貳尺東之方三十二間西之方四十八間三尺此坪數二千百八十貳坪右より御免地ニ御座候

一十八年以前未年○文政六年拜借地奉願候通被仰付候地面東西百貳間南北八十五間此坪數七千八百貳坪

寛永十九年二品良恕法親王ヨリ染筆ノ額字ヲ下附セラル

(匹田市右衛門記) 逐而申上候酒田淨土宗林昌寺ニ親王家之御額有之由及承候ニ付其様子寺社御役人へ申達林昌寺へ承合候處ニ御額之義ハ林昌寺より書付にて寺社奉行役人衆へ遣し申候間爲御覽右之一通越申候今度長泉寺下馬願扎申候ニ付爲御心得御知せ申達候以上

(元祿四年)

未六月廿三日

匹田市右衛門
松平武右衛門

服部瀨兵衛様
塙傳右衛門様

本寺額之義ハ無障金剛二品親王良恕様之御筆ニ而御座候寛永十九年壬午年當寺第八世單譽隼公と申住僧頂戴仕候則勅額之寫從其節佛間八尺間ニ掛置申候右御額かけ置申候ニ付其節下馬扎之義ハ遠慮にても御座候歟下馬扎無之候檀中年寄申者共ニ承リ候へ共耽と聞え者も無御座候

(元祿四年)

未六月九日

林昌寺

寺社御役所

○右ハ元祿二年十二月鶴岡長泉寺へ曼珠院二品良尙親王ヨリ天徳寺ノ額字ヲ賜ハリシニ依リ同四年三月門前ニ下馬扎建設出願ノ際藩廳ヨリ下馬扎ノ有

無ヲ照會セラレシヲ以テ寺社方ニ差出セルモノナリ但錯薪編ニ之ヲ勅額ト云ヒ又天保十一年書上ニ勅額ニ係ル傳説ヲ載スルモ皆本行ノ事跡ニ傳會セルモノナレハ今之ヲ取ラス

文政五年 月 日火災ニ罹リ堂宇烏有二歸セシカハ同六月現住報譽第二十更二現境内ニ移轉シ先ツ庫裏ヲ造リ嘉永 年最譽第卅一世ニ至リ本堂ヲ建ツ

○鐘 銘

以以永祿三年庚申稔殘秋十八日第二世及鎮上人華鯨一口令造鑄訖出羽州田川郡大泉庄於酒田湊
淨土宗鎮西派白旗流儀鎮護山林昌寺第八世單譽筆覺上人以寬永十七年庚辰稔殘秋朔日所令增鑄之撞鐘也
今以寶永庚寅稔七月廿八日當寺第廿世本蓮社空譽上人聞澄了阿令再興鎮鑄者也

干時寶永七庚寅稔七月廿八日

鑄物師大工生國江州栗木郡辻村

藤原朝臣正次

國松吉右衛門

瑞相寺

南千日堂前ニアリ千日堂カハ抱念佛堂トモ云フ萬治中林昌寺十三世曉譽ノ創始スル所ナリ元祿八年曉譽人寂ノ後子末寺ノ隱居法譽コ、ニ住シ爾後本寺ノ隱居所トナリ其末寺ニ屬セリ

(天保十一年林昌寺書上)

抱念佛 萬治年中拙寺中興十三世曉譽上人開基ニ御座候元祿八年八月三日被致入寂候

一松平甚三郎殿御城代之節御由緒ニ而元より石塔位牌安置御座候尤五千日中回向と申萬日大回向と唱酒田御町並川北三組郷中相對托鉢奉願御差紙被下置候儀前々より仕來ニ御座候

(酒井家御土藏記錄目寫) 元祿八年亥九月四日酒田林昌寺濱之念佛堂曉譽跡相續當隱居法譽差置念佛執行仕度由願書之本書其外一通但願書所見ナシ

本町

七町アリ往時田川郡向フ酒田ノ住民移轉ノ際當町先ツ成り年寄長人便宜コ、ニ住居ス故ニ本町ト稱ス事前卷ニ詳カナリ

(酒田町長人松田家傳) 大永元辛巳年迄追々酒田町草創シ屋敷トセシ處本町通トス壹丁目ヨリ七丁迄分割シテ三十六人住居トナセリ其住家ノ名ヲ因ミトシテ町

名トナセシ所ハ上林和泉粕谷掃部藪田彌右衛門村井理右衛門等ノ爲メニ和泉小路粕谷小路藪田小路理右衛門等ト呼フ

(庄内昔聞書 慶長六年酒田合戦ノ條) 上扱又酒田町の者共並郷中のもの目出度鎮りたる故家々に歸る安悦依而燒跡を町割仕るなり一ノ町小路ハ堀の端二ノ丁小路ハ林昌寺小路と申也三ノ丁小路ハ淨福寺小路と申なり四ノ丁小路ハ上林小路と申すなり五ノ丁小路ハ地藏院小路と申是ハ後の火事之時和尚遷化故明き寺也本尊地藏今海晏寺に有となり六ノ丁小路ハ地持院小路と申七ノ丁小路ハ粕谷小路と申是粕谷五助と申もの住せしいわれなりと申傳ふ

貞享二年壹丁目ヨリ三丁目マテヲ上本町ト唱へ四丁目ヨリ七丁目マテヲ下本町ト稱ス

(酒田御町三組古控) 壹之丁 二十軒 貳之丁 二十軒 三之丁 三十軒 右者貞享三年より上本町と唱來申候四之丁 二十軒 五之丁 十九軒 六之丁 十七軒 七之丁 十五軒 右者同年より下本町と唱來申候

飽海郡役所 本町壹丁目ニアリ明治十一年十一月一日郡制施行ノ際山形縣

一等屬貴島宰輔 鹿兒島縣士族 本郡長ニ任セラレ當時船場町舊運上所ヲ以テ假ニ廳舎ニ

充テシカ同十二年コ、ニ新築ス梁行 間桁行 間二階造洋風ノ建物ナリ同

二十七年十月劇震後二階ヲ撤シ現今ノ構造ニ變更セラレタリ郡長ハ貴島氏轉任 本縣警部長 ノ後チ服部民郷 本縣士族 大河平隆綱 兒鹿島縣士族 相良守典 本縣士族 北野直壯 熊本縣士族 佐藤直中 本縣

西川耕作 本縣平民 ヲ經テ現任指宿彦八 鹿兒島縣士族 ニ至ル

本間氏 曩祖本間主計ハ越前ノ人ナリ來住ノ年代事歴ヲ詳カニセス寶曆十

二年十二月藩主ニ差出セル由緒書ニ據ルニ當時尙ホ祖先ノ遺物トシテ馬物具ヲ相傳スト云フサレハ本ト武士タリシナランモ惜哉記錄散逸シ今得テ考フヘカラ ウモヒ、ケ

平泉志ニハ當家ヲ以テ藤原泰衡ノ子孫ナリト云ヘリ 世々本町一丁目ニ住シ傳ヘテ久四郎ニ至レリ久四郎諱ハ光源家頗ル富ミ藩主ノ爲メニ效ス所少ナカラス常ニ以爲ク太平ノ世ニ生レ安穩ニ産業ヲ治メ父母妻子ヲ奉養スルハ皆國君ノ恩澤ナリ苟モ資力ニ餘贏ヲ存スルモノハ必ス應分ノ義ヲ盡クシ以テ其萬一ヲ報セサルヘカラスト毎ニ之ヲ以テ子庄五郎ニ訓誡セラル當家ノ奉效ニ篤ク慈善ニ切ナルハ蓋コレニ根底スルナリ元文五年十一月十八日歿ス享年六十六、潛神院釋宗旦ト法諡シ淨福寺先塋ノ次

二葬ル

庄五郎諱ハ光壽、久四郎ノ嫡子ナリ家道益々盛ンニ亦藩主ニ效ス所アリ寶延二年三月乃父ノ遺志ニ依リ米壹千貳百表ヲ献ス藩主其篤志ヲ嘉ミシ永代廩米七十表ヲ賜ヒ謁見帶刀ヲ聽サル而モ此賜ヲ以テ自家ノ尺寸ヲ延ハスヲ屑シトセス年々六十表ヲ御郡代所ニ預ケ子母蕃殖セシメ邦家萬一ノ資ニ供セシム寶曆四年八月十九日歿ス享年六十三、種徳院釋宗旦ト法諡ス

久四郎諱ハ光丘、庄五郎ノ嫡子ナリ幼名友次郎、家督ノ後乃祖ノ稱ヲ襲ヒ久四郎ト改ム人トナリ剛毅ニシテ濶達機ヲ制スルコト神ノ如ク最モ經濟ニ長セリ嘗テ上國ニ遊ヒ爛タル犀眼、京坂地方ノ形勢ヲ達觀シ巧ミニ相傳ノ資産ヲ運用シ幾ナラスシテ陶朱ノ富ヲ累ネ海内有數ノ素封家トナレリ而モ資性篤實ニシテ君長ヲ敬ヒ貧究ヲ恤ミ爲メニ效ス所頗ル多カリシモ自ラ奉スルコト極メテ薄ク常ニ華奢遊惰ヲ誠メ無益ノ費ハ隻錢ノ微ト雖之ヲ苟クモセサラシム且學ヲ好ミ文ヲ屬シ寛政中藩主ノ諮問ニ對シ上リタル富國足民策ノ如キハ其言剴切ナルノミナ

ラス亦文章トシテ誦スル足ルヘキモノナリ兼テ土功建築ノ術ニ通シ其設計スルモノ自ラ規矩ニ合ヒ御米置場修繕最上川水除工事及ヒ山王宮本殿淨福寺中門ノ如キ斯道専門ノ輩ヲシテ後ヘニ瞠若タラシム要スルニ勤勉節儉忠孝慈仁ノ數德ヲ具ヘ能ク之ヲ實行セシ人ナリ

寶曆五年作毛熟ラス米家騰貴細民饑餓ニ仆ル、モノ甚多シ乃チ有司ト相謀リ孳々救卹ニ從事シ且別ニ金百兩ヲ效シ之ニ加ヘシム翌六年十一月其賞トシテ金千匹ヲ賜ハリ同七年六月年來ノ篤行ヲ嘉ミセラレ俸十口ヲ賜ハル

同八年二月西濱植付ヲ請願シ之ヲ聽サル酒田ノ西北ニ遙ニ大海ヲ承ケ平沙漠々トシテ樹木ノ其間ニ生スルナシ試ミニ明曆元祿ノ地圖ヲ展セヨ西濱一帶ノ方面ハ「砂山」ト注記スルモノニ充タサレツ、アリテ累々波濤ノ如キヲ見ルナルヘシ是レ皆吹荒ム土砂ノ堆積スル所ニシテ風伯怒ツテ之ヲ簸揚スレハ條チ高低其處ヲ易ヘ廬舍ヲ埋メ田園ヲ没シ毎ニ地方ノ大患ヲナシ就中臺町辨天小路今町ヨリ寺町ノ後方ニ亘ル處最モ慘狀ヲ極ム當時風除植付ヲ試ムルモノナキニアラスト

雖方法宜シキヲ失ヒ未タ曾テ好成績ヲ收ムルモノナカリキ久四郎痛ク之ヲ慨キ
 百年經營ノ方法ヲ計畫シ是ニ至テ私資ヲ投シ貧民ヲ賃シ植付ニ從事セシメ着々
 功ヲ收メ成績頗ル觀ルヘキモノアルニ至レリ同十二年九月藩主其功勞ヲ嘉ミシ
 酒田町年寄格ニ補シ益之ヲ獎勵セラル爾後愈々精ヲ勵マシ植付ヲ擴張シ町民ヲ
 シテ各々其堵ヲ安ンシ並テ袖之浦ノ風光ニ一段ノ美ヲ添ヘシメタリ子孫其遺績
 ヲ繼キ年々巨額ノ資金ヲ投シ之ニ當リ終ニ荒涼不毛ノ地ヲ舉ケテ鬱葱タル茂林
 トナシ長ヘニ風砂ノ害ヲ免カレシメタルハ實ニ其賜ニシテ現今山王臺ニ存スル
 松林碑ハ文化中町民某カ之ヲ不朽ニ傳ヘントシテ建ツル所ナリ

同十三年町奉行中田七郎兵衛久四郎ト相議リ火消用金ヲ創始ス町民永ク其慶ニ
 賴レリ酒田ハ西大海ヲ控ヘ南最上川ニ枕ミ東北平野ニ連リ地物ノ之レカ蔽障ト
 ナルヘキモノナケレハ總ヘテ風力其勢ヲ逞ウシ殊ニ當時家屋ノ構造大率粗笨ニ
 シテ今日ノ如クナラサリシヲ以テ一點ノ螢火處ヲ失ヒ消防其道ヲ愆ル時ハ看ル
 々々大火トナリ數町ヲ連ネテ焦土ト化シ巨萬ノ資財ヲ烏有ニ歸セシムルモノ古

來幾回ナルヲ知ラス

明曆ノ大火ハ事古リ又姑ク寶永以後ニ於ケルモノヲ記センニ寶永四年十二月八
 日獵師町火ヲ失シ延焼七百十八戸、享保十一年五月八日片町ヨリシテ千七百五
 十八戸、同十二年四月十二日ニハ上山ヨリシテ七百戸、同十四年二月十六日再ヒ
 獵師町ヨリ七百戸、同十六年九月十五日和泉小路ヨリ一千戸ニ及ヒ寶曆元年三
 月廿九日荒瀨町ヨリスルモノハ二千三百九十九戸幾ント全町ヲ舉ケテ赤地ニ屬
 セシメ近古未曾有ノ大變ト稱ス尋テ同八年七月十三日傳馬町出火シ亦千四百七
 十九戸ヲ延焼セシム、コハ七百戸以上ヲ摘出スルモノニシテ其他五十戸乃至百
 戸ノ小火災ノ如キハ勝ケテ數フヘカラス
 火災ノ慘狀既ニ斯クノ如ク頻繁ナルニ寶曆ノ大火後相踵キテ凶荒アリ町民悉ク
 疲弊シ各々目前ノ生計ニ汲々トシテ未萌ノ憂ヲ顧ルニ遑アラス當時消防ノ器械
 未タ全ク整ハズ應急ノ設備頗ル疎ナリ今ニモアレ祝融隙ニ乘シテ猛威ヲ擅マニ
 スルアラハ何ヲ以テ之ヲ制セン再ヒ寶曆ノ悲慘ヲ見ンコト必セリ七郎兵衛深ク

之ヲ憂ヒツ、アリシニ恰モ好シ此歳久四郎嘗テ藩廳ニ調達セル金子ノ利息貳百四十余兩ヲ寸志獻納ノ舉アリ因テ火災ノ狀ヲ具シ下賜ヲ請ヒ久四郎ト商議シ火消用金ナルモノヲ組立テ更ニ之レヲ久四郎ニ依托シ其利子ヲ以テ消防ノ器具ヲ設備シ以テ非常ノ用ニ應セシム天明六年町奉行堀平大夫之レカ顛末ヲ記シ且ツ「火消料之義ハ根元本間四郎三郎殿ノ大功ニシテ並ニ七郎兵衛殿宜ク被申上候ニ付酒田永久之備ニ相立候」ト云ヘルハ全ク其實ヲ傳ヘタルモノナリ當家ノ世々意ヲ消防ニ注キ罹災ノ細民ニ米錢ヲ賑給セラル、ハ其遺摸ニ率由スル所ナリ

(天明六年町奉行堀平大夫御用引繼覺書)

一火消用金起リ之義承及候趣ハ七郎兵衛殿勤メ節本間久四郎年來上レ御用立候金子五分利ニ利子下被仰付候處久四郎寸志ニ右五分利差上申度旨役所レ相願候由七郎兵衛殿取次被申上候節酒田ノ義前々々大火有之候ハ畢竟火消道具其外火防ノ手當疎ニ御座候故自ラ類焼モ廣ク罷成候哉ト奉存候今度久四郎寸志ニ指上候五分ノ御利足ヲ以永ク酒田火消料ニ被下置候ハ、拙者並惣御町中方之義ハ不及申上久四郎義モ寸志ノ品永久ノ御備ニ相成候段本望至極可奉存旨

被申上候處御家老中被御聞濟其己後年々六拾兩宛火消料トシテ被下置候由承及候其後ニ度々大火御座候得共右確ト致候用金有之候故彼是ノ手當殘ル處ナク行届火消道具ノ義モ鶴岡ナド、ハ格別ニ相揃候然處安永三年午年同四年未年ハ兩谷地野手金ヲ被下候而右六十兩御手ヲ被引同五申年ヨリ野手金ヲモ不被下置候ニ付此七八年ハ元入一切無之候ヘ共元來ユタカナル被下方ニ有之候故其分モ有之且ハ近年大ナル火事無之候間拂方モ不足ニ而當分指問候事モ相見ヘ不申候乍去元入無之用金ノ事故後々ハ絶候筈ノ義ニ御座候間當分入用ノ外一割ノ利足ニ貸廻シ置候様ニ申付委細帳面ニ相見候尤前方ハ火消料ノ内ヨリ帳付共坏ヘ手當致シ候義モ相見其外火防ノ手當トシテ爲取候口々ノ内ニモ右被下金相止候後ハ省略致シ候モ在之帳付共ナド手當ノ義ハ男四郎殿被仕立候役所用金ニテ相成候事故是又相止候(中略)右火消料ノ義ハ根元四郎三郎殿ノ大功ニテ並ニ七郎兵衛殿宜被申上候ニ付酒田永久ノ備ニ相立候處近年ニ至右之次第ニテ甚乏敷相成候段歎敷義ニ御座候打續御靜謐ニ候故當年ハ指タル入用モ無之候得共又々火事繁キ時節ニモ至候ハ、終ニハ退轉可致候乍去當分ハ如何様ニモ間ニ合候義ヲ御時節ヲモ不願強テ被下金之義可奉願筋トモ不存候故其後ハ兎角不申上候

明和元年三月父祖ノ遺訓ニ遵ヒ金一千兩ヲ献シ其利子ヲ以テ大督寺藩主ノ菩提所及ヒ城池修繕ノ資ニ供センコトヲ請フ聽サル同五月多年ノ救卹、家族ノ和順、寸志金ノ奇特ヲ賞セラレ御手廻格ニ補シ俸十口ヲ加へ前後通シテ三十口ヲ給セラル同九月酒田町鎮守山王宮ノ建築成ル亦與リテ力アリ事縣社日枝神社ノ下ニ詳カナリ

此時ニ當リ昇平既ニ久ク上下治ニ狃レ漸次華奢ニ推移リ靡然風ヲ成シ府帑欠乏ヲ告ケ諸士困究ヲ懇ヘ動モスレハ公訴ノ沙汰トナリ武士ノ体面ヲ汚スノミナラス累ヲ君侯ニ及ホスモノ往々ニシテアリ藩主痛ク之ヲ憂ヒ明和三年有司ニ命シ救濟ノ方法ヲ計畫セシム郡代等相議リ諸士ノ俸祿ヲ擔保トシテ質扎ヲ作り低利ノ金子ヲ才覺シ更ニ之ヲ困究ノ諸士ニ貸附シ高利ノ負債ヲ償却セシムルノ方案ヲ組立テ之レカ金主ヲ募リシニ不幸應スルモノナク有司ノ苦心畫策セラレシ方案モ將ニ画餅ニ屬シ去ラントス是ニ於テ旨ヲ久四郎ニ諭シ命スルニ資金調達ノ事ヲ以テス因テ巨額ノ金ヲ效シ其方法ヲ實行セシム同四年正月御小姓格ニ進ミ

「御家中勝手向取計」ヲ命セラル是レ財政ニ參預スルノ始メニシテ後チ貸金役所ヲ鶴岡ニ置キ低利ノ金子ヲ諸士ニ貸附シ永ク其困究ヲ救濟セラレシハ實ニ之ニ起因スルモノナリ同十月靈光院故酒井忠侯靈屋、大督寺寸志修造ノ勤功ヲ以テ祿百石ヲ賜ハリ士林ニ列セラル

明和五年二月二日命ニ依リ出府ス同月廿九日藩邸ニ於テ有司カ多年處置ニ苦メル諸士オホソツケ大津借返濟ノ取計ヲヒ並ニ「鶴ヶ岡龜ヶ崎兩城御普請御用掛」ヲ命セラる時ニ幕府ノ巡見使菅沼藤十郎 戸田主膳正明後七年ヲ期シ庄内ニ下向シ武備ノ整否ト政治ノ得失ヲ視察セントスルノ聞エアリ城池ノ淺薄ハ諸侯ノ榮辱ニ關ス故ニ兩城修繕ノ議起リ久四郎ヲシテ之レニ當ラシムルモノナリ是日糶二萬表ヲ献シ八組郷中ニ蓄積シ凶歉ニ備ヘンコトヲ請フ开モ備荒儲蓄ハ世ノ古今ヲ問ハス邦ノ大小ヲ論セス一日モ忽諸ニ附スヘカラサルモノニ屬セリ況シテ封建時代ニアリテハ諸侯各封内ヲ守リ彼此ノ融通頗不便ナルニ於テヤ故ニ一旦凶荒ニ際スレハ各藩米穀ノ輸出ヲ嚴禁シ領内ノ飯料ニ備フルモ既ニ食シ盡クレハ復タ供給ノ道ナク

細民樹皮草根ニ依リテ露命ヲ繫キ終ニ餓莩路ニ望ムノ悲慘ニ陷ルハ當時ノ通患ナリ苟モ民ノ父每タルモノハ須ク之ニ寒心シ預メ平時ニ於テ之レカ備ヲナサルヘカラス唯々然リ儲蓄ハ上下舉ツテ之ヲ冀望スル所ナルモ目前ノ需用ニ局促トシテ備フヘキノ餘贏ナク口能ク之ヲ唱フルモ其實行ハレス却ツテ反對ノ結果ニ出ツルモノ滔々皆是ナリ、要、蓄積ノ必要ハ田夫野人尙且之ヲ知レリ能ク之ヲ行フト否ニ依リ其人ノ如何ヲ品題スヘキモノナリ

久四郎亦嘗テ之ヲ憂フル久シ今ヤ巡見使ノ下向既二期アリ若シ備荒ノ有無ヲ問ハレンカ現アタリ藩主ノ不覺悟トナルノミナラス他日封内幾多ノ生靈ヲ驅ツテ死地ニ擠ラシムルモノナリ其性質トシテ默止スルニ忍ヒス是ニ至テ庄内八組郷中ニ當年ヨリ八ヶ年ヲ期シ年々三千表ツ、ヲ献シ通計二萬四千表トナシ以テ飢饉ノ救濟ニ備ヘンコトヲ請ヘルナリ藩主大ニ其志ヲ嘉ミシ左ノ

本間久四郎儀當年より置^{オキ}相はしめ八ヶ年末年に至り^{オキ}高^{タカ}二萬表に致し^{○當初二萬表ノ豫定ナ}表ヲ増シ二萬四千表トナセリ 饑饉の年も有之候節御私領二郡の御百姓御救一助に相成候

様ニ差上度志願之趣御内々達、御聽候甚、御感悅之事ニ彌々心懸候様ニ被遊度被、思召候就夫豫被、仰出候者^{オキ}相成就致候ハ、八組郷中^{オキ}貯置候而御勝手向御用等^{オキ}一切借用候義致間敷候左候而ハ、歳凶之御百姓御救之一途ニ久四郎存候深誠も消え御政令之失ニ候條御家老共御郡代之者堅相心得、御家長久郷方儲蓄のみに可致候此義後世に至り御役人共忘却無之様ニ記録可差置候尤^{オキ}相成就迄御郡代中田七郎兵衛其掛^{オキ}被仰出候

明和五年子二月十九日

書面ヲ後日ノ左券トシテ有司ト久四郎トニ下シ永久蓄積シ目的以外ニ流用スルヲ得サラシメタリ實ニ是レ庄内ニ於ケル蓄^{オキ}相ノ始メナリ後チ十六年ヲ經、果シテ天明ノ大凶荒アリ此際一民ノ飢渴ニ斃ル、モノナカリシハ豫メ之レニ備フル所アリタレハナリ

同年五月是レヨリ先キ居宅ヲ抱地ニ新造シ從來ノ宅地ト跡式ヲ本間庄五郎ニ讓リ俸三十口及ヒ廩米七十表ヲ之ニ賜ハランコトヲ請フ此月聽サレ且ツ多年ノ勤

功ヲ勒シ新宅地ノ租ヲ蠲キ庄五郎ヲ酒田町年寄格ニ補ス所謂新宅地ハ即チ現今ノ邸ナリ同月廿二日巡見使旅館普請御用掛ヲ命セラル
 同年六月廿二日御米置場御普請御用掛ヲ命セラル同場ハ幕府直領ノ租米ヲ積圍フ所ナルヲ以テ藩主ノ保護監督極メテ嚴重ニシテ之レカ修繕等ハ悉ク幕府ニ稟申シ其裁決ヲ仰キ有司ヲシテ施設セシムルヲ規定トナセリ而シテ其位置ハ最上川ノ末流ニ枕ミ銚子口ニ瀕スルヲ以テ動スレハ川欠ノ患アリ去年三月ノ雪融洪水ニハ既ニ柵際ヲ崩壞シ漸次柵内ヲ掠メ危殆將ニ測ラレサラントス町行奉金井男四郎狀ヲ具シ急ヲ訴フ藩主大ニ驚キ有司ヲ特派シ應急ノ工事ヲ設計セシムルニ頗ル大業ニ屬シ輒ク成算ナシ因テ之ヲ久四郎ニ諮詢セラル乃チ爲メニ水利ト地勢トヲ觀察シ其方法ヲ計畫シ圖案ヲ附シ之ヲ藩主ニ上ル其方案幕府ノ採用スル所トナリ是ニ至テ此命アリ且之レニ係ル圖書ヲ預ケ永ク保存セシメラレタリ當時舉世幕府アルヲ知り帝室アルヲ知ラサリシ徳川氏全盛ノ世ニ於テハ特ニ之ヲ拜スルハ中外ノ一大名譽トスル所ニシテ久四郎亦之感激シ拮据經營知遇ニ負

カサランコトヲ努メタリ

同年十一月兩城ノ修繕成リ同月十三日其賞トシテ百石ヲ加増セラレ高二百石トナル明和六年正月廿一日新宅地ヲ拜領地トナシ子孫永世之ヲ所有セシム亦年來ノ勤功ニ酬ユルナリ四月二日新造ノ家屋ヲ以テ巡見使ノ旅館ニ擬セラル是月御米置場修治成リ五月十日其功勞ヲ以テ百石ヲ加増セラレ高三百石トナル十月七日鶴ヶ岡ニ於ケル巡見使旅館成リ爲メニ御供頭次席ニ列ス時ノ藩老水野内藏助ハ夙ニ賢明ノ聞エアリテ國初以來ノ名大夫ト稱セラル深ク久四郎ノ誠忠ヲ慕ヒ藩邸ヨリ書ヲ遺リ其功勞ヲ賛シ且無限ノ心事ヲ洩サレタリ蓋彼レハ自ラ社稷ノ臣ヲ以テ任スルモノ而モ日暮レ路尙遠シ故ニ重キヲ久四郎ニ屬シ邦家ノ爲メニ自愛ヲ冀望セシモノナリ

追啓先頃及御報候爲御挨拶預御禮被入御念候御事泰存候乍然御隔心之義却而痛入候仕合御座候

一御米置場御普請之義被蒙 仰御本懷難有之由右御普請貴様御厚意を以被仰出候乍慮外御忠勤之御事此義耳ニ不限萬端致感心候御普請繪圖松平右近將監様

御勘定奉行伊奈備中守へ御伺書被差出候節大造之御普請御伺被成候とて甚御
我折之様ニ及承候兩御城御修覆今般御用屋敷御目付御旅宅御普請大津金之義
彼此悉皆貴様御親切之御取計にて致成就真ニ無比類御深情言語紙面ニ難盡御
事ニ存候右ニ付候而御心曲ニ可被勞候無申迄候得共被加御保養御壯健ニ御勤
候様にと預候私最早六十歳余年いくはくもなきを朝暮存つゝけ候にも足下の
如き忠信の御人御長壽被有候へと存候かやうの事申進候も無用且御役がらい
かゝに候へともあまりに萬を感じ候而の事に候條失言預御宥赦度候追日貴郷
可赴秋冷候猶更御自愛可被成候以上

八月

水野内藏助

本間久四郎様

明和七年三月巡見使下向同十月十日巡見使御用ノ精勤ニ依リ所有ノ田地谷地ノ
内二百石ヲ添知トシテ賜ハリ高五百石トナル同八年二月廿九日四郎三郎ト改名
ス

安永元年二月廿九日江戸目黒行人坂ヨリ出火シ府内過半焦土トナリ明暦以後ノ
大火ト稱ス候伯ノ邸宅多ク焼失シ我カ藩邸モ亦烏有トナリ同四月十五日酒田片

町火ヲ失シ延焼二千余戸ニ及ヒ當家亦其災ニ罹レリ是月藩邸焼失ノ故ヲ以テ町
村ニ「御用金」ヲ課セラル因テ自宅ノ類焼セシニモ拘ハラス金二千兩米三千表ヲ
献ス

是時ニ當リ藩主ノ財政頗ル困難ニシテ所謂「御勝手必死與御難澁」ノ文字ハ有司
ノ公文ニ遠慮ナク臚列セラレ通常ノ套語トナリ吾人之ヲ怪マス殊ニ江戸在勤ノ
モノハ限リアル歳入ヲ以テ限リナキ需用ニ應セントスルニ依リ支出ノ途ナク融
通ニ融通ヲ重ネ連々高利ノ金子ヲ以テ一時ヲ彌縫シ山ナス負債ハ年々高キヲ加
ヘ大坂神戸ノ「御用達」ニ係ル舊債數萬金ハ姑ク置キ江戸ニテ「御暫借」「御買物」
ト稱スルモノ漸次積リテ二萬五千兩ノ巨額ニ上リ債主ノ督促矢ヨリモ急ナリ有
司之ヲ奈何トモスル能ハス茲ニ財政改革ノ議起リ四郎三郎ヲシテ其衝ニ當ラシ
メントシテ安永三年四月廿九日爲ニ出府ヲ命シ委スルニ整理ノ任ヲ以テセラル
爾來深ク其知遇ニ感シ一身ヲ以テ邦家ノ休戚ニ任シ數々京坂地方ニ往來シ且自
ラ幾多ノ金子ヲ調達シ將ニ破綻セントスル財政ヲ整理スルノミナラス拮据經營

ノ餘府庫ニ巨額ノ黃白ヲ藏メ藩主ヲシテ内顧ノ憂ナカラシメ當時漢高ノ蕭何ヲ以テ之レニ擬セラレタリ今其事跡ヲ詳述セントスレハ頗ル浩漭ニ涉ルヲ以テ姑ク省略ニ從フ其財政ニ於ケル功勞ハ獨リ庄内ニ止ラス米澤藩主鷹山侯ノ治績ヲ翼賛シ其他松山 新庄 本庄 龜田 矢嶋ノ諸藩亦其慶ニ賴レリ同六年正月廿八日御元^{オモトシメ}上席ニ陞セララル抑モ士ノ百石以上ノ秩祿ヲ食ムモノハ率ネ馬ニ汗シ又ニ塗リ身ヲ腥風血雨ノ間ニ委ネ九死ノ中ヨリ之ヲ賭シ得タルモノニアラサルハナシ當家カ本ト武門ヨリ出テタリト雖氏中コロ籍ヲ市井ニ置キ而モ太平ノ世ニアリテ未タ嘗テ汗馬ノ勞ナクシテ五百石ノ大祿ヲ享クルハ其勳功ノ優ニ彼レニ讓ラサルモノアレハナリ以テ四郎三郎ノ邦家ニ盡セル功績ハ何カニ偉大ナリシヤヲ知ルヘキナリ

同七年酒田町民ノ爲メニ雜用^{ザウヨウセンヒキダシモトダセ}錢引足元立錢ヲ創始シ町費ノ負擔ヲ輕カラシム事町經濟ノ下ニ詳カナリ同九年江戸芝清光寺修繕及ヒ御用精勤等ヲ賞セラレ御物頭次席トナル

天明三年作毛熟ラス寶曆以後ノ大凶荒ト稱シ今尙古老ノ傳誦シ寒心スル所ナリ此時ニ當リ有司ト相議リ心力ヲ盡シテ救卹ニ從事シ封内ニ於テ一民ノ之ニ斃ル、モノナカラシメシノミナラス諸國ノ流民賴リテ生ヲ得タルモノ亦少ナカラス其酒田ニアリテハ「安賣座」^{ヤスウザ}ナルモノヲ設ケ價ヲ低クシ所有ノ米四千五百五十九表ヲ沽賣シ就中極究ノ輩ニハ粥及米錢ヲ施與シ飢渴ヲ免カレシム翌年十一月藩主其篤志ヲ嘉ミシ白銀時服ヲ賜ヘリ

同四年ハ去秋不熟ノ餘弊ヲ承ケ總ヘテノ職業閑ヲ愬ヘ町民最モ生活ニ艱メリ然ルニ明和元年建立ノ酒田町鎮守山王宮ハ安永ノ災變ニ烏有二屬シ爾後再建ヲ計畫シツ、アリシニ會々凶荒ニ際シ暫ク之ヲ中止セラレシカ此時ヲ以テ自ラ大施主トナリ造營ヲ企テ從來ノ規模ヲ改メ社殿ヲ南面ニシ土居ヲ築キ樹木ヲ植エ高野濱櫻小路間ノ砂山ヲ鑿チ道路トナスノ大土功ヲ起シ社頭ヲ莊嚴ニスルト同時ニ貧民ヲシテ勞銀ヲ得セシム用意到レリト謂フヘシ

四郎三郎ノ救卹ニ於ケル緩急既ニ斯クノ如ク切ナルモ尙自ラ以テ足レリトセス

常例歲暮施行ノ外寛政元年十一月更ニ「冬貸錢」助力錢ナルモノヲ創始シ極窮以上ノ細民ヲモ救濟セラレタリ由來酒田ハ主トシテ海客ニ依リ生業ヲ營ムモノ多キニ居レリ故ニ毎年樹葉凋落ノ頃ヨリ船舶漸ク跡ヲ歛メ市街ノ風物寂寥トナリ職工勞働者ハ常ニ生活ノ困難ヲ告クルニ比年凶歉ノ影響トシテ一層ノ困難ヲ來タシ細民三冬ノ飯料ニ差支ヘ生業ヲ治メ得サルモノ幾何ナルヲ知ラス四郎三郎深ク是ヲ憐ミ此輩ノ爲メニ郷中夫食貸ノ方法ヲ折衷シ一町連帶ノ契約ヲ以テ低利ノ飯料錢ヲ町内ノ細民ニ貸附シ之ヲ冬貸錢ト稱シ且其利子ハ更ニ極窮助力錢トシテ施與スルノ方法ヲ組立テ旨ヲ各町世話方ニ諭シ其受拂ヲ依頼セラル左ニ掲クルハ實ニ是ニ係ルモノナリ

口達

各町之内極難澁之族ハ少々之取替ノ及沙汰候而も返濟取立相滞リ可申哉其方記ニ據ルニ此時四郎三郎鶴岡ニ在リ故ニ酒田ヲ指シテ其方ト云ヘルナリ之家數三町酒田内町米屋町ノ三組ヲ云フ合凡千軒余も可有之哉其一段上之族極窮ナラサヤカラ細民ヲ云フ當時米直段ニ價米壹表と壹俵半冬暮之爲代金前濟霜師走兩月之内貸渡凡此錢高四千貫文此利壹貫文ニ付五十文宛元利來ル六月中限取立右惣利足

二百貫文程者前段極難澁之族へ當年右利足取越し〇翌年收納スヘキ利子ヲ前年當家ヨリ繰替ヘ施與スルヲ云フ合力致し候事ニ相成候ハ、右冬貸借用之面々之勝手ニ相成勿論極究之者へ之少助ニも可相成哉且又元立備用錢之儀仕法通全備ニ至リ候ハ、此砌申立惣御町役出錢之足ニ專組立候處勘定之外引當品被差向酒田町雜用錢元立錢ノ返濟淹滯シ抵當品ノミ多カリシヲ云フ口々過分之不足相立候義其上是迄年々三百貫文又ハ六百貫文年ニ依リ御町出錢並ニ極究之方へ渡リ物加リ旁今暫ク年數可有之哉〇元立錢ノ備ヘアリト雖貸附ノ淹滞極窮救助ノ爲メ未タ充分ナラズ町民ノ負擔ヲ緩ウスルニハ今暫クノ年數アルヘシトノ意義ナリ是等之儀も有之候間右借入受拂共之取扱迷惑相察候へとも纒之米錢相求冬凌相調候ハ、其仁渡世はげみニも可相成哉互ひ之義ニ候間是等之趣意を以一統懇志被取扱候様頼入存候

寛政元年酉十一月

當時四郎三郎ハ如何ナル地位ニアリテ如何ナル資格ヲ有セシヤ家ニ巨萬ノ富ヲ累ネ海内有數ノ素封トシテ其名内外ニ著ハレ身ハ御郡代次席ニアリテ五百石ノ秩祿ヲ享ケ藩主ノ恩遇極メテ厚ク士民ノ屬望太ク重シ何ヲ苦ンテ「右借入受拂共之取扱迷惑相察候へとも……………頼入存候」ト云ヒ懇切ニ之ヲ依頼セラレシソ必竟スルニ是レ所謂一夫所ヲ得サレハ已レ陷阱ニ擠ルカ如シテフ精神ノ迸出ス

ルモノニ外ナラス嗚呼海内ノ廣キ富家何ソ限ラン而モ慈善ニ切ナル斯クノ如キ
ハ四郎三郎以外果シテ幾人カアル
冬貸錢助力錢ノ貸與ハ既ニ實行セラレ幾多ノ細民冬期飯料ノ憂ナク一意生業ヲ
營ミ得ルト共ニ窮民亦餘澤ニ浴スルニ至レリ子孫其遺續ヲ失墜セス今尙實施シ
ツ、アリ俗ニ本間錢ト稱スルモノ即チ是ナリ其借用受取証文案ハ貸借ノ方法ヲ
知得ルノミナラス四郎三郎力慈善ノ反照トシテ見ルヘキモノナレハ録シテ參考
ニ供ス

錢借用仕候証文之事

一錢何貫文

何町

内何貫文

誰印

同同

誰印

右此節至而難澁ニ付御願申上渡世持之爲飯米代錢書面之通何貫文借用仕即連判
之面々へ貸渡申候處實正御座候返納之義者來戌何月限元錢壹貫文ハ五十文宛之
利足ヲ加ニ元利取立返納可仕候此度格別之思召を以御恩借仕候上ハ若連判之内
欠目等有之候共連判之者相弁急度返納可仕候縦ヒ内外何様之義出來候共此冬貸

錢ニおのてハ毛頭相違仕間敷候依之拙者共世話仕取立聊遲滯仕間敷候爲後日證
文仍如件

寛政元酉年十一月

世話人

誰印

同

宛名

助力錢受取申候証文之事

一錢何貫文

何町

内何貫文

誰印

同同

同

右此節一町之内極究ニ付此度冬貸錢來戌年利足取越助力ニ被下候ニ付書面之通
儘受取即面々へ相渡候處實正御座候爲其請取如此御座候以上

酉十一月

世話人

誰印

同

宛名

寛政五年七月諮問ニ對シ富國足民策ヲ上ル從來御代官等ノ作毛檢見土功視察ト

シテ村里ヲ巡回スルヤ休憩宿泊及ヒ送迎ノ費用ニ至ルマテ悉ク關係ノ農民ニ課シ相競フテ美酒佳穀ヲ備ヘ盛宴ヲ張り饗應スルヲ以テ慣例トナシ之ヲ「郷賄」ト稱シ其費額大凡五百兩ト算セラル吁一杯ノ酒モ百姓ノ血ナラサルナク一塊ノ肉モ農民ノ膏ナラサルハナシ何ソ少ク之レヲ顧ミサル當時其弊風最モ甚シク所謂「郷賄」「村遣」ナト、稱スル懸物即チ正租以外ニ屬スル課出年一年ヨリ多ク農民之レカ負擔ニ堪ヘス爲メニ相傳ノ田畑ヲ沽却シ纔ニ之ヲ弁スルモノ亦少カラス農民ノ凋弊既ニ斯クノ如クナレハ自ラ年貢ノ未進ヲ來タサ、ルヲ得ス滯納相嵩ミ奈何トモナスヘカラサルニ至レハ結局御代官大庄屋等ノ失態ニ歸シ輕キハ轉役重キハ退隱ノ處分ヲ免ルヘカラス是ニ於テ彼等ハ御郡奉行ニ稟議シ郷中救濟ノ方策トシテ一組毎ニ大庄屋ノ加判ヲ以テ田地ヲ擔保トナシ債主ヲ募リ金子ヲ調達セシメ代官所ヨリ之ヲ農民ニ貸下ケ其急ヲ救ハレタリ是レ名ハ頗ル美ナリト雖其實利子ハ壹割五分乃至貳割五分ノ高率ナルヲ以テ農民ニ於テハ二重ノ年貢ヲ徵セラル、カ如ク歸スル所ハ貧民ノ皮肉ヲ殺キ徒ラニ金主ノ口腹ヲ肥スモノニシテ何等ノ恩澤ナク寧ロ角ヲ矯メテ牛ヲ殺スモノナリ

四郎三郎ハ萬頃ノ土田ヲ有シ數多ノ代家支配人ヲ抱ヘ而モ事物ノ觀察ニ周到ナル農民ノ疾苦吏胥ノ贅澤ハ飽クマテ知悉セラレ今ニシテ之ヲ不問ニ委シ去ラハ孟軻カ老幼ハ溝壑ニ轉シ壯者ハ四方ニ散スト云ヘルモノ遠ク支那ニアラスシテ目アタリ庄内ニ於テセンコトヲ憂ヒ數々懸リ物増加ノ顛末ヲ藩主ニ以聞スル所アリキ

當時藩主ノ財政最モ困難ヲ極メ幾ント邦家土崩ノ勢ニ迫リ御郡代等復タ之ヲ奈何トモスル能ハス自ラ責ヲ引キ袖ヲ連ネテ差扣ヲ上リ待命スルニ至レリ藩主忠德侯ハ國初以來不世出ノ明君ナリ痛ク之ヲ憂ヒ曩ニ天明二年非常ノ英斷ヲ以テ破格ノ節儉令ヲ中外ニ布キ自ラ供膳被服ヲ卑クシ愛ヲ割キ馬匹ヲ減シ飼鳥ヲ放チ躬之ヲ率井冗員ヲ汰シ用度ヲ省キ前代未聞ノ儉約ヲ勵行シ四郎三郎ニ委スルニ財政整理ノ任ヲ以テスルト同時ニ藩老ニ命シ民力ヲ養ヒ國本ヲ固ウスルノ道ヲ講セシム因テ水野内藏助之ヲ四郎三郎ニ諮詢ス乃チ農民ノ凋弊ハ懸リ物ノ増加

之レカ一源因タルノ理由ヲ縷述シ併テ低利貸附ノ方法御代官手代ノ減員等ニ及
 ヒ其第一着鞭トシテ八組郷賄ノ賦課ヲ全廢シ更ニ藩費支弁トナシ自ラ之ニ年々
 百兩ヲ獻シ賄料ノ受拂ヲ擔任シ費用ニ制裁ヲ加ヘ以テ民力ノ一部分ヲ休養セン
 コトヲ請ヒ之ヲ實行セリ當家ノ世々「郷賄代渡方」役ヲ勤仕セラレシハ實ニコ、
 ニ起因スルモノナリ時ノ御小姓頭堀巴門ノ書柬ハ正ニ其消息ヲ洩ラセルモノナ
 レハ錄シテ參照ニ供ス

略上郷中へ懸リ御用出郷之面々ニ爲郷方之從、上御賄此已後被下置候ニ付此分之
 御入方も被差出度御寸志被仰上候處御許容被仰出候重疊御規模之至乍毎
 度御深志之段奉感心候只今迄八組へ相掛リ候處凡五百兩程之物ノ様ニ郷方にて
 申事ニ御座候由扱々大掛リ之物と被存候如仰諸事相減候てハ出物不足ニ相成候
 間御年貢並浮役共ニ上納安ク相成可申奉恐悅候尤諸民之大悅不少義と奉存候今
 度御書付藩主ノ令達ヲ云フを以古法之通被仰渡候由コレニ據レバ代官等出郷ノ賄ハ其本ト藩費若クハ役
 料ヲ以テ支弁セラレシテ何時シカ民費ニナリ來レルモ
 ノ、如ク見ユタリ偏ニ御精力故ト奉恐悅候略下

天明元八月

巴門

四郎三郎様

將々「村遣」ムラツカヒナルモノハ所謂村費ニシテ其金額ヲ通算スルニ八組郷中ニ係ルモノ
 數千兩ヲ要セリ當時農民疲弊シ租稅ヲ淹滯シ例ノ代官所ヨリ高利ノ金子ヲ借り
 辛ウシテ督責ヲ免レツ、アルニ斯クノ如キ多額ノ負擔アリ農民究セサラントス
 ルモ固ヨリ得ヘカラサルナリ四郎三郎爲メニ金五千兩ヲ代官所ニ調達シ高利ノ
 證券ヲ塗抹ニ附シ易フルニ五分利ヲ以テシテ農民ヲシテ幾分ノ肩ヲ緩ムル所ア
 ラシメタリ事天明元年十月ニ係レリ其藩邸ニ在勤スルヤ藩主便室ニ召見シ郷中救濟ノ篤志ヲ
 賞シ時服ヲ賜ヒ且農民ノ消息ヲ下問セラル因テ懸物統計書イッパシヲ上ル其要スル所ノ
 モノ尙十一萬表ノ巨額ニ上レリ藩主其夥多ニシテ負擔ニ堪ヘサランコトヲ憂ヒ
 更ニ令ヲ有司ニ下シカメテ之ヲ減少シ民力ヲ舒ウセシム事天明二年ニ係レリ去年三タヒ懸
 物減少ノ方法ヲ有司ニ諮問シ意見ヲ開陳セシメシカ御郡代等相議リ之ヲ討究ス
 ルモ連年減少ノ餘適當ノ方法ナク答フルニ向後一組毎ニ御郡奉行代官等商議シ
 然後チ稟申スヘキヲ以テセラレ藩主ノ諮問モ亦其要領ヲ得ル能ハサリキ是ニ至
 リ爲メニ此方策ヲ畫シ以テ採擇ニ供セシモノナリ

臣光丘拜手稽首而言曩辱賜富國足民論者謹拜而受之熟讀數回雖不得知其撰者實是微言哉今幸得遭明盛之世處不諱之朝寬其罪使得畢其辭臣雖不敏敢言上三策焉夫天不爲人之惡寒而輟其冬地不爲人之惡險而輟其廣君子亦然不爲小人之匈々而易其行何則天有常度地有常形君子有常行也雖然臣又聞之天道虧盈而益謙地道變盈而流謙人道惡盈而好謙焉今夫欲富國足民則無如薄稅歛且夫貸民賤利而命庄長安民教以謙約職正百姓風儀時巡檢策勵農業勸懲定制而免衆庄長之拜賀禮式河南河北各出一人令參勤則乃減其費用薄民軍役矣雖然薄租稅有術歛貢米每斛減四升則十萬斛爲一斛積之五年則爲一斛爾時無偏無黨貧民之賑則初而可道富國而已矣誠乎生民者爲國家之基無農則王侯何以食無農則妃嬪何以儀天下之衣食皆農是出詩曰嗟我農夫我稼既同上入執宮功晝爾干茅霄爾索絢丞其乘屋其始播百穀猶是觀之凡百皆從農出而春鑿氷冲々耕鋤是勤夏不避炎熱疲耘耨夜苦入水虵蚊噬膚秋猿狖罷鹿食田園纒怠防嚴至欠租稅則父老妻子不得支歲月飲食男女遊觀高會人々實所欲而農夫不能安寐食偶不幸罹災病負債則水滴微積々焉爲淵卒至于溺而不可濟援悲哉愷悌君子民之父母雖道君子有常行也虧此盈而援彼溺令民得其所則郡國之廣生民之衆庄長爲之田畝時勸竭精全業於富國足民何難之有臣光丘不敏管窺蠡測敢舒萬一誠惶不勝戰栗之至謹上言

寛政癸丑季夏下浣

下臣 本間 四郎 三郎

斯民ノ爲メニ畫策スル所一々肺腑ヨリ迸出シ彼無責任ノ文字ヲ臚列スルモノトハ痛ク其撰ヲ異ニセリ今其要ヲ摘スレハ大凡四節トナルヘシ一ニ曰ク低利ノ金子ヲ貸附ス二ニ曰ク勸懲ノ制ヲ定メテ農業ヲ獎勵ス三ニ曰ク大庄屋ノ觀禮ヲ簡ニシテ費用ヲ減ス即チ是レナリ蓋第二第三ノ畫策ハ有司ノ方寸ニ依リ實行セラルヘキモ第一策ノ如キハ新ニ巨額ノ金ヲ調達シ代官所ニ於ケル債主ニ償却シ更ニ證券ヲ書替ヘ實際五歩利ノ貸附ヲ七歩利トナシニ歩ノ餘贏ヲ以テ漸次元金ヲ償却シ抵當ノ田地ヲ復回セシムルノ方法ニシテ爲メニ二萬兩ヲ要スレハ事頗ル大業ニ屬セリサレト此一策ノ行ハルト否ヤハ總ヘテノ方策ノ死活ニ關シ即チ農政改革ノ樞子ニアリシナリ

由來四郎三郎ノ人トナリ言ヲ苟モセス言ヘハ必ス之ヲ行フ今ヤ邦家ノ爲メ農民ノ爲メ之レカ方策ヲ畫セリ藩主ニシテ容レサレハ已ム否ラサル限リハ之ヲ實行スルニ躊躇セサルナリ是ニ於テ自ラ多額ノ金ヲ調達シ有司ト相議リ代官所ニ係

ル高利ノ證券ヲ悉ク抹殺ニ附セシメ斯民ヲ塗炭ノ中ヨリ仁壽ノ域ニ躋セタリ爾
來民力漸次恢復シ終ニ庄内ノ富强ハ海内ニ喧稱セラレ幕府倚リテ重キヲナスニ
至レリ是レ實ニ農政改革ノ結果ニシテ其功績偉ナリト謂フヘシ是歲大炮五門鉄
炮數口ヲ献ス時ニ外舶近海ニ隱見シ物情頗ル穩カナラス幕府沿海ノ諸侯ニ令シ
邊防ヲ嚴ニセシム故ニ此献アリ

寛政六年二月五日社寺領復舊ノ賞トシテ時服ヲ賜ハル四郎三郎ノ神明ヲ尊ヒ佛
陀ヲ敬フハ世間一樣ノ迷信者トハ其趣ヲ異ニシ單ニ過去ノ罪障ヲ除キ現在ノ幸
福ヲ求メ未來ノ冥助ヲ希フノミナラス祠堂ニ莊嚴ヲ加ヘ人ヲシテ益々尊崇歸依
ノ念ヲ深カラシメ以テ名教ヲ扶植セシメントスルニアリ試ミニ見ヨ如何ナル兇
爺惡媼モ六字ノ稱名ヲ唱フル刹那ノ間ハ百八ノ煩惱モ消エ佛其物ト同化シツ、
アルヲサレハ眞正ニ神佛ヲ尊敬スルモノニシテ未タ曾テ乱臣賊子アルヲ聞カサ
ルナリ是レ其冥罰後生テフ觀念ニ情欲ヲ制裁セラレ自ラコ、ニ至レルモノナリ
必竟敬神崇佛ハ當時儒教以外ニ立チテ社會ノ道義ヲ支配スルニ絶大ノ効力ヲ有

セリ故ニ四郎三郎ノ神佛ヲ尊敬スル極メテ厚ク尋常ノ企テ及フ所ニアラス近ク
ハ鳥海羽黒ノ諸山ヲ始メ封内著名ノ社寺ニハ率ネ資財ヲ施捨シテ莊嚴ヲ加ヘ或
ハ土田ヲ寄附シテ祭會ヲ益ナラシメ遠クハ伊勢ノ大廟北野ノ天神奈良ノ春日攝
津ノ住吉及ヒ京都本願寺紀州高野山三州回向院等ニ供米點燈スルモノ頗ル多カ
リキ

後來庄内ノ社寺領ナルモノニ二様アリ一ハ先代ノ領主最上義光ノ寄進ニ屬シ其
印黒内ヲ用フ故ニ之ヲ黒印又義光知行ト稱シ一ハ當藩主ノ寄附ニ係リ其印朱ヲ
用フ因テ朱印ト稱ス此等ノ領田ハ幕府法令ヲ以テ賣買抵當ヲ嚴禁シ永ク祠堂ノ
修理祭會等ノ資ニ供シ以テ退轉スルナカラシム然ルニ氏子檀徒ノ疲弊スルニ隨
ヒ先ツ其影響ヲ受クルモノハ僧侶社人ナリトス天明凶荒以來爲メニ生活ニ困難
ヲ懃ヘ終ニ國家ノ嚴禁ナルニモ拘ラス巧ニ法網ヲ逸シ領田ヲ賣買質入セシヲ以
テ社寺領ハ名ノミニシテ其實社寺ノ有ニアラス是レヨリ先キ農政改革ノ實施ト
共ニ百姓ハ非常ノ恩澤ニ浴シ各蘇生ノ思ヒヲナセルモ不幸僧侶社人ハ未タ其餘

瀝タモ紙リ得サリキ是レ有司カ故ラニ此輩ニ不仁ナルニアラス本ト社寺領ハ禁
 令ノ存スルアリテ賣買セラレサリシモノト認ムレハナリサレトコハ表面ノミニ
 シテ事實ハ全ク之ニ反對シ多クノ社寺領ハ既ニ已ニ債主ノ手裡ニ歸シ一粒モ社
 寺其物ノ有ニアラサリシナリ寺社方石井丹治其實況ヲ縷述シ向後賣買抵當ノ禁
 令ヲ勵行スルト同時ニ既ニ賣買典物トナレルモノヲモ復舊セシメンコトヲ稟申
 ス事寛政五年ニ係レリ有司爲メニ之レカ方法ヲ計畫シ旨ヲ債主ニ諭シ復舊ヲ承諾セシメン
 モ之レニ要スル資金ハ九百七十五兩ノ巨額ニ上リ事体亦容易ナラス有司ノ苦心
 モ將ニ水泡ニ屬シ去ラントス是ニ至テ爲メニ其金額ヲ調達シ以テ悉ク社寺領ヲ
 復舊セシム故ニ此賞賜ニ與レルナリ

曩ニ「御家中勝手向取扱」ヲ命セラレ初メテ財政ニ參預セシヨリ數多ノ印綬ヲ帶
 ヒラレ其重モナルモノヲ舉クレハ大督寺公儀御位牌所、御米置場、御普請御用掛、
 内外御勝手向取計、郷賄代受掛方、永久粗取扱及ヒ松山御勝手取計等ニシテ其他
 臨時ニ屬スルモノ他藩ニ係ルモノハ一々枚舉スルニ違アラス且邦家ニ大議アリ

テ事經濟ニ關スルモノハ必ス召サレテ之レニ預リ一身ヲ以テ提封十四萬石ノ重
 キニ任シ精勵之ニ當リ唯其及ハサランコトヲ恐レ鞠躬トシテ經營懈ラス其餘力
 ヲ以テ慈善洪益ノ事業ヲ計畫シ爲メニ心力ヲ盡瘁スル三十六年ノ久キニ亘リ其
 間未タ曾テ劬勞ヲ慰ムル日月トテハナカリシモノ、如シ今ヤ齡七旬ニ垂ナシントシ
 テ既ニ功成リ名遂ケヌ宜シク一切ノ世累ヲ謝シ閑地ニ置キ花ノ朝夕月ノ夕ヘニ
 老後ヲ樂ミ優遊自適天年ヲ終フヘカリシモノナルニ其性質トシテ之レヲ爲スヲ
 屑シトセス老テ志氣益壯ンニ毫モ疇昔ニ異ナル所ナカリキ
 寛政八年春來ニ豎ノ侵ス所トナリ久ウシテ瘳ヘス乃チ退隱ノ志ヲ懷キ之ヲ有司
 ニ内請ス時ニ堀巴門ノ消息アリ

御別紙致拜見候春頃より御痰氣にて折々御痰咳來御全快被成兼候由委細被仰知
 被下無御心元存候未御年齡極御老体共難申存候間無程御全快可被成隨分御保養
 專要存候兎角御氣根者故御むり成事も可有之哉寒氣之節坏ハ鶴岡へ夜中之御往
 來等堅御無用ニ可被成候御家事之儀も御内々之事ハ外衛殿へ御任せ被成候様ニ
 と存候當中御退役且御隱居御願をも被成度旨乍然中途ニて手間取之程も難計

御座候由此段何卒取計 上より被仰付候様相成候ハ、御満悦之趣致承知候へども此節御用も御座候様内膳殿御内々御咄も有之候間中々此節御退役之義坏之沙汰ニも致兼候殊ニ寄候てハ來春貴様京都御用登り被仰付候事可有之哉只今より致承知候御報ハ得貴意兼候萬々目出度追々御摸様相知次第可得貴意候省略御報失禮御免可被下候段々委細之趣者御尤ニ奉存候何分心懸罷在候間御安心可被下候略

十月廿一日

所謂「鶴岡へ夜中之御往來」ノ文字ハ老体ヲモ厭ハス公務ニ從事スル如何ニ精勤ナリシヤ「御内々之事ハ外衛殿へ御任」ハ家事ヲ整理スル如何ニ勉強ナリシヤノ一班ヲ露出スルモノニシテ正ニ是レ其生涯ニ於ケル性行ノ全豹ヲ窺ヒ知ルヘキモノナリトス

當時ノ形勢啻ニ退隱ヲ許サ、ルノミカ明春藩主上京ノ供奉ニ加ヘラルヘキ内議サヘアリテ其冀望ヲ滿タスヘキ時機ニアラサルモ内願亦默止シ難ク一タヒ藩老ノ評議ニ上リ終ニ之レヲ以聞セラレシカ同年十一月ニ至リ果シテ聽サレス特ニ

命シ厚ク保養ヲ加ヘシム既ニシテ病モ亦瘳ユ

九月十八日之御封印令拜見候本間四郎三郎先年御勝手御指繰方被仰付御郡代へ立會相勤候處近年老衰多病罷成難相勤候ニ付御役奉願度旨内意申立候由御組頭當番中間候實ニ病身ニ而弱相成此度者別而相勝不申様子ニ相聞候間御役願出候様ニ被成其上ニ而被成御評議是迄無滯相勤度々寸志をも申上候者之義直ニ隱居被仰付且去年中大筒指上候御稱譽之被下物も此砌ニ可被成下哉旁御何方も可有御座哉と被成御沙汰候へども私共御承知之通四郎三郎儀別段者故○藩主ノ恩遇特ニ右厚カリシヲ云フ願書爲差出御伺之上萬一御思召被爲在候節ハ如何と先爲御相談被申聞候由御内々御小姓頭を以てなりとも 御内慮可奉伺哉尙私共存念次第宜致沙汰追而可及御報之旨尤夫迄右内意之御挨拶者御延置可被成之段令承知則御書面之趣を以御内慮奉伺候處得と養生を加へ可相勤之旨被仰出候間左様御承知宜被成御沙汰候以上

十一月三日

石原平右衛門 朝岡助九郎
竹内八郎右衛門 服部圓藏

酒井吉之允様
松平内膳様

是ヨリ先キ最上川上下河原ニ治水ノ工事ヲ施セシヨリ其反動トシテ河流直チニ御米置場附近ヲ衝キ被害年々甚シ寛政十二年十一月命ヲ奉シ爲メニ地勢ト水利トヲ相シ壘ヲ夷ケ壕ヲ埋メ更ニ柵ヲ後方ニ移シ水患ヲ避クルノ設計ヲ案出シ之ヲ有司ニ提議シ未タ土功ニ着手セサルニ翌享和元年五月病ニ罹リ六月朔日太タ篤シ因テ末後ノ退役ヲ請ヒ同日歿ス享年七十、速滿院釋宗善ト法諡ス

外衛諱ハ光道初メ光武新三郎ト稱ス四郎三郎ノ嫡子ナリ安永六年七月乃父ノ功勞ニ依リ新知百石ヲ賜ハリ天明四年十二月外衛ト改名ス享和元年十一月跡式三百石ヲ賜ハル添知二百石故ノ如シ人トナリ溫良ニシテ格勲、學ヲ好ミ經史ニ精シ能ク乃父ノ遺績ヲ繼キ家道愈盛ナリ同二年十月軍用金五千兩ヲ獻ス藩主其篤志ヲ嘉シ御供頭次席ニ列セシム同三年閏正月郷賄渡方永久取扱ヲ命セラル同年十月松山御勝手取計ヲ命セラル時ニ松山ノ財政頗ル困難ヲ極メ有司之ヲ奈何トモスル能ハス毎ニ之ヲ宗家ニ懇フ藩主特ニ外衛ヲシテ之ヲ整理セシム

文化元年六月地大ニ震ヒ被害算ナシ爲メニ救恤金三千兩ヲ調達シ時服ヲ賜ハル

同三年三月江戸大火抑原下谷藩邸及ヒ清光寺燒失ス因テ乃父ノ遺志ヲ繼キ寸志之ヲ再建ス同五年正月其功勞ニ依リ御元ノ席ニ列セラル同年正月出府ヲ命セラレ爲メニ效ス所頗大ナリ六月在府ノ勤功ヲ以テ御物頭次席トナリ且佩刀一口ヲ賜ハル同十年五月諸士借物片付取計ヲ命セラレ同年九月先侯ノ遺金ヲ委托セラル同十一年二月御郡代所出仕及ヒ御雇船惣御用掛同十二年十一月學校引移掛ヲ命セラル當時藩學致道館ハ大寶寺ニアリテ諸士ノ通學ニ便ナラス因テ之ヲ城中ニ移シ會所藩廳ヲ云ヲ其内ニ置キ政教一途ニ出テシメントスルノ議アリ而モ多額ノ金ヲ要シ有司其支出ニ困メリ外衛爲メニ資金ヲ助成シ土功ヲ擔任シ翌十三年九月ニ至リ其功ヲ竣フ同年十二月松山財政ノ精勤及ヒ學校移轉ノ功勞ニ依リ御郡代次席トナル同十四年二月砂金買上掛ヲ命セラル時ニ立谷澤川ノ砂金領外ニ濫出スルノ憂アリ故ニ此命アリ

文政五年二月藩主上京ノ台命ヲ受ケ費用賞ラレス爲メニ用金ヲ調達シ別ニ金千兩ヲ獻ス同年九月其賞トシテ大緘熨斗目ヲ賜ハリ且老体ヲ厭ヒ特ニ紅裏コウラヲ聽サ

ル同十月老体往來ノ勞ヲ厭ヒ嫡子源吉ヲシテ御用ヲ代勤セシメ且時服ヲ賜フ同八年二月酒田港口錢方ノ監督宜ヲ得及ヒ臨時御用精勤ノ故ヲ以テ龍門紋絹ヲ賜ハリ同年八月致仕ス多年ノ功勞ヲ嘉ミセラレ時服ヲ賜ハル同九年八月隼人介ト改名ス同年十月廿四日病歿ス享年七十三、速融院釋宗榮ト法諡ス、
外衛諱ハ光暉、源吉ト稱ス實ハ本間彌十郎ノ長子ナリ先代外衛養フテ嫡子トナス文政七年六月蠶桑方御用取扱掛ヲ命セラル是レヨリ先キ藩主蠶桑方ヲ遊佐郷ニ創置シ養蠶機業ヲ獎勵セラレシカ成績擧カラス幾ント瓦解ノ勢アリ故ニ此命アリ
文政八年八月十四日家督相續高三百石ヲ賜ハリ松山御勝手、永久扱取扱、郷賄渡方、諸士借物取付、御廻米取扱ヲ命セラレ蠶桑方御用掛故ノ如シ同九年正月外衛ト改名ス人トナリ恭儉ニシテ勤勉中興三代ノ業ヲ承ケ奉效慈善ノ志篤ク家門益盛ンナリ同年三月藩費多端ノ故ヲ以テ金千兩ヲ獻ス同年九月藩主沿海ヲ巡視シ濱畑ノ別莊ニ臨ム因テ海防費トシテ金二千兩ヲ獻シ御物頭席ニ列セラル同十年

六月命ニ依リ出府シ藩邸ノ爲メニ效ス所アリ同十一年九月在府ノ功勞ニ依リ御番頭次席トナリ更メテ永久扱締方ヲ命セラル
天保二年十二月酒田町非常備扱取扱掛ヲ命セラル同四年天災地變相踵キ作毛熟ラス前代未聞ノ凶荒ト稱ス此際御郡代所出仕及ヒ新穀喰^{シシコククヒツキスクヒガカ}繼救方ヲ命セラレ心力ヲ盡クシテ諸國ノ米穀ヲ購入シ封内ニ供給シ一民ノ飢饉ニ仆ル、モノナカラシム同五年九月藩主深ク其篤志ヲ嘉ミシ手カラ三所物ヲ賜フ

同六年二月酒田町非常備扱ノ内ニ三百表ヲ效ス同年十二月御郡代所出仕ノ精勤ニ依リ時服ヲ賜ハリ同七年七月御米置場水除御普請掛ヲ命セラル同八年五月藩主上京ノ台命ヲ受ケ用途無慮三萬兩爲メニ金二千兩ヲ獻シ且御用金ヲ調達セリ曩キニ酒田町ニ非常扱ヲ蓄積スルヤ其「仕法取扱」ヲ命セラレ扱倉建築ニ從事セシメシカ是歲十二月ニ至リ竣功ス即チ山玉山扱倉ノ始メナリ同九年五月家督後十三年間ノ勤勞ト祖父以來ノ遺功トニ依リ祿百石ヲ加増セラレ高四百石トナル同年九月藩主武ヲ大濱ニ閱スルノ次、別莊ニ臨ミ拜領獻上品アリ